

# 孤独に応答する孤独

— 釜ヶ崎・アフリカから —

編著 西川 勝

著 石川 翠

石橋友美

上田假奈代

姜 明江

小手川 望

白波瀬達也

西 真如

孤独に  
応答する  
孤独

孤独に応答する孤独 西川勝 ..... 004

釜ヶ崎周辺地図 ..... 012

釜ヶ崎風景写真 ..... 013

## 第1部 釜ヶ崎における老い・孤立・死

第1章 釜ヶ崎の概要 石川翠 ..... 016

第2章 釜ヶ崎における社会的孤立 石川翠 ..... 023

第3章 釜ヶ崎における死と弔い 白波瀬達也 ..... 032

## 第2部 釜ヶ崎の事例―周縁を生きる

孤独の力―引き合う万有引力のように 上田假奈代 ..... 050

第4章 生活保護のパラドクス―路木の事例をもとに 石川翠 ..... 058

第5章 起こってしまった孤独死 小手川望／上田假奈代 ..... 096

第6章 高齢生活と向き合う実践から―さいごの人間関係・紙芝居劇むすび 石橋友美 ..... 104

## 第3部 アフリカの実践から

はじめに 西真如 ..... 124

アフリカ地図 ..... 125

第7章 ザンビアのハンセン病回復者村における生活―病いと生きるコミュニティ 姜明江 ..... 126

第8章 エチオピアの葬儀講演―都市の無縁死にあらがう 西真如 ..... 156

風の声のなかに 上田假奈代 ..... 172

編著者・執筆者紹介 ..... 178

## 孤独に応答する孤独

西川勝

本報告書にある研究活動は、NPO法人こえとことこのるの部屋（以後、コキョームと呼ぶ。代表、山田假奈代）が、公益財団法人三井住友海上福祉財団から助成を受けた『無縁社会』における高齢単身者の死に関する研究…大阪市西成区釜ヶ崎を事例として」（2011年12月から2012年11月）の共同研究者として、西川勝、白波瀬達也、石橋友美が参画したことが最初の機縁である。この研究に、石川翠、西真如、姜明江、小手川望らが合流してくる。財団からの助成期間を終えてからは、大阪大学コミュニケーションデザイン・センターの高齢社会プロジェクトの協力を得て研究活動を継続している。釜ヶ崎という地域に限定せずに、そこでテーマとなっている孤立と連帯という課題を、遠くはなれたエチオピアやザンビアの庶民の活動に架橋して考える試みが始まった。まだ、それぞれの研究活動を有機的にまとめ上げる段階にはいたっていないが、途上にある活動報告として発表する。

ぼくは、西成市民館において「哲学の会」という場を毎月一回開催している。2012年の春にはじめて一年が過ぎた。釜ヶ崎をフィールドに死の研究をするというコキョームに誘われて、ぼくは自分が何をしたらよいか迷っていた。ぼくにできそうなことといえば、臨床哲学の活動として10年間ほど続けていた哲学カフェくらいしか思いつかなかった。哲学カフェというのは、フランスではじまった活動であるが、哲学的なテーマについて参加者が対等の立場で話し合うという試みである。生きる上で抜きにできない問題を考える哲学を、大学の片隅から社会の現場に返していく活動といえる。

釜ヶ崎でも哲学カフェをしてみよう。まずは、現場に行っ て対話をしてみよう。ほとんど馴染みのない釜ヶ崎で哲学カフェの場所をどうするかに迷ったが、共同研究者の白波瀬さんが勤めている西成市民館に部屋を借りることだけが決まった。哲学カフェをどうやって知らせるか、良いアイデアもなままに「ゆっくりの会」という名前ではじめてみたが、参加者はいなかった。紙コップとペットボトルのお茶、少しのお菓子を用意し、和室の会場で2時間待ったが、空しい時間だけが過ぎていった。ぼくは17歳の息子を助手として連れていた。息子と二人で、壁を見つめる時間が長かった。彼は中学の頃から学校に行かなくなり、高校は夜間のデザイン科を選んで進学していた。ふだんは父親であるぼくとの会話も少ないのだが、釜ヶ崎で哲学カフェをするから、お茶を出すなどの手伝いをしてほしいと頼むと素直にきてきた。理由は話さなかったけれども、息子は釜ヶ崎に関心を持っている様子だった。だれも来なかった「ゆっくりの会」の帰りに、西成市民館の事務所に寄って、白波瀬さんに相談をした。「借金相談会や、食事の出る会合ならば人は集まりますが、ただのお話会だと難しいかも

しれません。しかし、西川さんは何がしたいのですか」と問い直され、哲学カフェの話をする、「じゃあ、哲学の会にすればいいじゃないですか」と諭された。ぼく自身が釜ヶ崎に対してもっている先入観が「哲学」という言葉を遠ざけていることに気づいた。

会の名称を「哲学の会」と決定し、話し合うテーマを「幸せについて考える」とした。チラシは息子に依頼した。モノクロ写真をあしらったチラシをコールドと西成市民館に置かせてもらった。仕切り直して、第1回の「哲学の会」を4月27日に開催したが、前回とは違っておおよそ10名の参加者が集まった。進行役のぼくは、いつもより緊張していたかもしれない。進行役として簡単な自己紹介をした後、「哲学の会」の基本的なルールを説明した。2時間の対話が、進行役の補助によって行なわれること。対話のルールは、人の発言は最後まで聞く、自分の意見を自分のことばで話す。発言する、しないは自由で、途中の入退場も自由であることを説明し、参加者の発言を待った。参加者の自己紹介は必要ないと断ったので、初対面同士の何も知らない者としての対話がはじまる。

「幸せになりたいと思ったことはありません」という発言からはじまったのが印象的であったが、参加者は人の意見を聞きながら、ゆっくりと自分のことばを探すようにして発言を繋いでいった。進行役のぼくは、かすかに頷くくらいの振る舞いでよかった。「昔から哲学には興味があった。こんなふうにしてまじめな話をできるのは嬉しい」という感想が述べられたり、「もっと、楽しく話をしなくては、人が集まっている意味がない」という意見も出された。黙って、人の話を聞いているだけの人もいたが、途中で退席することはなかった。次回の開催日とテーマをみんなで決めてから散会した。息子は、帰り道に「面白かった。次も行くよ」と話しかけてきた。

これまでに開催された「哲学の会」のテーマは、以下の通りである。第1回「幸せ」、第2回「遊び心」、第3回「色」、第4回「自分とは」、第5回「安らぎ」、第6回「親しみ」、第7回「死」、第8回「自由」、第9回「愛」、第10回「生きる」、第11回「賭け」、第12回「次元」(2013年3月)。

一回だけの参加者もいるが、西成市民館に案内してある張り紙のテーマに惹かれた人が多い。第7回「死」の場合、はじめての参加者が酒臭い息をして会場に入ってきた。自分がガン患者であること、死に対する恐怖はないことなどをしばらく話してから、他の参加者の意見を静かに聞き入る事があった。途中で退席した彼とは、西成市民館の出口で再会する。その手には焼酎が握られていたが、「またやってくれよ」と進行役に話しかけてきた。その人は、以後も「哲学の会」を覗くようになっていく。そして、手短に自分の意見を語ってくれる。「愛が大切なんやで、人と人はやさしゅうにせなあかん。ほんまや」とつぶやくように語る表情が、みんなの納得を呼び起こす。理屈だけではない、からだから滲み出てくるようなことばに出会うことがある。

「哲学の会」は、テーマに則して対話をすすめていくが、正しく立派な結論を求めているわけではない。同じテーマについて参加者がそれぞれ自分の考えを深め、人の意見に耳を傾ける時間の過ごし方を大切に行っている。自己紹介もなしに始まる「哲学の会」だが、対話の空間は人と共にあることの実

感に繋がっている。「哲学の会」では、自分の意見を人に説明して分かってもらうために、理由をことばにしてみよう。意見の言い合いではなくて、お互いの意見を十分に吟味するためには、聞く人へ届くことばづかいが要求されるからだ。あるときには、自分の意見の理由を、ことばで探すうちに、自分の考えに対して別の見方が可能なことに気づくこともある。他人に説得されるのではない。真剣に聞く人を前にして、自己への反省が新しい考えを生み出すのだ。こういう意味で、普段とは少し違った対話の緊張感が大切なかもしれない。

この報告書のタイトルを決めかねていたとき、ふと思い浮かんだことばが、「孤独に応答する孤独」であった。このタイトルの背景には、釜ヶ崎での遠い思い出がある。およそ30年前のことである。自分自身が孤独を強く感じていた頃の話である。よちよち歩きをする2歳の娘を連れて天王寺動物園に遊びに来たことがある。妻は一年近く入院していた。母のいない毎日を暮らしている娘に子どもらしい思い出を作ってやりたいと思って家を出てきたのだった。幼い子どもを扱い慣れていないぼくが、寝てしまった娘を抱いたまま暗い表情で、動物園の中を歩いていると、周囲の家族連れから不審とも同情とも区別のつかない眼差しをおくられた。せっかくの休日を、久しぶりに娘と楽しんで、日頃の憂さを晴らそうとしたのに、人の視線を避ける自分の惨めさが身にしみて、腹立ちさえ感じていた。どこかで酒を飲もうと決めた。

ぼくと同じく精神科のナースをしていた妻は、ある日の朝、強い抑鬱に陥り身動きすらできなくなっ

た。大学病院の精神科に紹介されて、治療がはじまったが鬱と躁が激変し、薬物治療だけではなくホルモン療法もはじまって退院のめどはつかなかった。ぼくは私立の古ぼけた精神科病棟で仕事をした後に、大学病院の精神科に妻を見舞う毎日が続いた。妻の発病をきっかけに、妻の実家とぼくの関係は破綻した。ぼくに無断で、妻を義母が外泊させるなどということもあり面会が空振りになってしまったこともあった。幼い娘も妻の実家に預けられたり、ぼくの元に戻ったりと落ち着かなかった。妻のことも心配であったが、お母ちゃんということばを覚えて、「お母ちゃん」と呼べない娘が不憫であった。

動物園を出て、賑やかなジャンジャン横町を抜ける。さらに信号を渡って釜ヶ崎に通じる動物園前商店街を歩きはじめる。信号を渡るまでは、後ろからも突き刺さるようになっていた視線が、急になくなった気がした。手頃な居酒屋を見つけ入ると、昼間から呑んでいる男たちが数人いる。大人数できている様子はない。眠りこけた娘のおしめを気にしながら、自分の隣の席に寝かせた。黙って酒を飲んでみると、近くにいた男が「兄ちゃん、大変やな」と話しかけてきた。適当に返事をしていうちに、徐々に打ち解けてきて、それまで職場の仲間にも話したことのない悩み事をつぶやいている自分がいた。聞くともなく、ぼくの話聞いていた酔客たちが、口々に「可愛い子や、にいちゃん。しっかりしてみたりや。子どもがいるのは、ええことや」と、ぼくの話に応じてくれた。決して暮らし向きが楽そうには見えない男たちの優しさに、ぼくの心は少し元気を取り戻した。しかし、どうやって堺市にある家まで帰ったのかは覚えていない。結局、妻とは別れることになり、娘も一緒に去っていった。独り身の生活は乱れに乱れ、朝から酒を飲むために天王寺の駅で降りることが増えた。特別な解決策

があるわけではなかった。酒場で会うだけの関係で知らされる淋しそうな男たちの話は、ぼくの苦勞など足下にも及ばないものが多かった。同病相憐れむではないが、自分を嘲り尽くせぬ思いの中でこぼれる孤独を、ただ受け流してくれる相手がいるのは、日雇いの街として馬鹿にされているこの街だった。暗いトンネルを抜けるようにして数年の孤独を過ぎた後、ぼくは釜ヶ崎から遠ざかっていた。再び、釜ヶ崎を訪れたとき、あの頃の孤独が足下から立ち上がってくる気がした。同時に、あのときの素朴な交流が思い出されていた。「哲学の会」では、個人的な悩みを話し出す人はいないが、ことばの端からのぞき見える苦しみや痛みには、そっと受け流す雰囲気がある。必ずしも、釜ヶ崎在住の人だけが参加しているわけでもないのに、こういう安心感が生まれる理由は、いまのぼくには分からない。

最後に、孤独に応答する孤独が可能にする共同性のイメージを描いてみたい。共同性を「固まりの共同性」と「流れとしての共同性」に分けて考えてみる。「固まりの共同性」は、積み木で作る立方体のイメージである。同じ材質の同じ形の積み木の方が高く大きな立方体を構成できる。共通点を重ね合わせて個々の機能を集めさせる共同性である。多くの社会的組織はこのイメージに合っている。もう一つの「流れとしての共同性」は、たとえば川の流れとそれによって回る水車の関係である。川の流れと水車は、まるで別物であるが、両者が出会ったとき、固まってしまうところにも共同の働きが生じる。流れを受けた水車はそれを受け止めきってしまうのではなく、流れとして送り出し、自らを回転させる。川の流れも堰き止められることなく続いていきながら、水車を回し続ける。出会い

は次の出会いに交代し、お互いの動きを励まし続ける。川の流れと水車が出会わなければ、川は川のまま、水車は水車のままで何も生み出さない。「哲学の会」で出会う人と人の対話は、この「流れとしての共同性」が具体的な姿で現れていると考えられる。「哲学の会」は、ある主義主張を同じくして集まるわけでもなく、同じ利害を共有するわけでもない人と人が、対話しながら考えるところという営みの中で、お互いを大切にし、自分に気づき、共にあることを実感する。「固まりの共同性」では、同一性からの排除を避けることはできない。「流れとしての共同性」は小さな試みであっても、互いの異質性を生き生きとした流れにする希望を与えてくれる。



「あいりん総合センター」2階。朝5時にシャッターが開く。近年は閑散とした状態となっている。



「あいりん総合センター」脇の通路。夕方5時20分から夜間シェルターの整理券が配られる。配布前の風景。





第1部 釜ヶ崎における老い・孤立・死



萩之茶屋南公園（通称：三角公園）の桜。三角公園では、週に2回炊き出しがおこなわれる他、盆に「釜ヶ崎夏祭り」、年末年始に「釜ヶ崎越冬まつり」がおこなわれ、多くの人で賑わう。



三角公園での炊き出しの風景。背景のプレハブの建物は夜間シェルター。

## 第1章 釜ヶ崎の概要

石川 翠

### 1 単身男性の街がつくられた歴史

はじめに釜ヶ崎について概観する。「釜ヶ崎」と呼ばれる地域は、大阪市西成区の北東部の端に位置する日雇い労働者のまちである。わずか0・62平方キロメートル内に「ドヤ」と呼ばれる簡易宿泊所が密集し、1970年代のピーク時には4万人、現在も2万5千人ほどが暮らしている。浪速区、阿倍野区、天王寺区に隣接しており、JR環状線、大阪市営地下鉄御堂筋線、阪堺電軌線の交わる地区である。ただし、「釜ヶ崎」という地名は地図上には存在しておらず、1922年に消滅した西成郡今宮村の一地域名が呼び継がれている。行政機関やマスコミは1966年に考案した「あいりん（愛隣）地区」と呼んでいる。南海電鉄とJR環状線の新今宮駅の南側から南海電鉄の萩ノ茶屋駅と阪堺電軌の今池駅辺りまでの一帯、町名では萩之茶屋・太子を中心に周辺の花園北・天下茶屋北・山王の一部の地域に相当する。

JRの線路の南北で街の雰囲気はがらりと変わる。線路より北は浪速区にあたり、大阪を代表する観光地「新世界」がある。一方で、線路より南には、新世界でみられるような華々しいネオンや人の賑わいはなく、「マンショ

ン」や「アパート」、「ホテル」などと書かれた看板のかかる建物がひしめきあって立ち並ぶ。阪堺電軌の線路より一本西の通りは「銀座通り」と呼ばれるメイン通りである。通りの両脇には、近隣に住む人びとのと思われる自転車がずらりと並んでいる。自販機の前や縁石部分に座り込んでカップ酒を片手に数人で会話をしている50〜60代の男性をあちらこちらで見かける。銀座通りを南下していくと釜ヶ崎を象徴する「三角公園」（正式名称は「萩之茶屋南公園」）に行きつく。遊具や砂場はなく、公園内にはベニヤ板やブルーシートで覆われた小さな家が立ち並ぶ。

この釜ヶ崎は1960年代以降の高度経済成長を下支えする労働力の貯蔵地として、政策的に単身男性の街としてつくられてきた。それゆえ釜ヶ崎の人口は男性が多くを占めている。釜ヶ崎の中心となる西成区萩之茶屋の男性人口割合は極めて高く93・73%にのぼる。なぜこうした偏った人口比であるのか、次に単身男性の街がつくられてきた歴史を簡単に振り返る。

#### I 1950年代

1890年代頃までは田んぼのひろがる地であった釜ヶ崎だが、明治時代からは近代的な都市計画がすすめられ、木賃宿街となった。世間から「スラム」としてみられるようになったこの時期には女性や子供、家族の姿も多くあった。

#### II 1960〜80年代

第二次世界大戦後の戦後復興を経て、のちに日本の三大寄せ場となった、東京の山谷、横浜の寿町、大阪の釜ヶ崎は、高度経済成長を下支えする労働力を貯蔵する日雇い労働市場として確立されてゆく。農村など地方から「金

の卵」として大都市へ集団就職した多くの若者のなかには職を転々として寄せ場で働くようになる者も多く、また復員軍人や炭鉱離職者なども含まれていた。同じ寄せ場である東京の山谷における調査では、「第一に、新規学卒（特に中卒）労働者として中小零細企業に就職し、数年を経ずしてここから排出されたもの。第二に、農民の賃労働兼業流出者、出稼ぎ農民。この2つを代表とし、前者は若年層、後者は中高年層」（西岡1979）であるとされており、釜ヶ崎も同様の様子であったと推察される。

1961年「第一次釜ヶ崎暴動」を機に、行政による「釜ヶ崎対策」が打ち出され、地域から家族が移転させられていく。そして、1970年に開催された万国博覧会の会場を建設する労働者を集めるために簡易宿泊所が改築増室され、労働者は約3万人に達した。

日雇い労働とは、1日単位で雇用者と被雇用者が契約を結び、その日に給料が支払われる雇用形態であり、仕事内容は主に道路工事や鉄道工事などの土木関係の肉体労働である。毎朝「あいりん総合センター」で手配師と交渉して現場に赴く。1976年に「釜ヶ崎日雇労働組合」が結成されるまでは、暴力団が労働者手配に絡んでいる場合が多く、労働環境は劣悪なものであった。暴力行為が蔓延する厳しい労働環境や、差別的な扱いへの労働者たちの不満が暴動として頻発した。

このような劣悪な労働環境であっても人びとが流入してくるのは、ここでは、労働資本となる身体さえあれば、学歴や国籍、住民票の有無、さらには本名さえも関係なく仕事ができ、生活ができるからである。釜ヶ崎には相対的に低学歴の地方出身者が多く、地縁・血縁・社縁との結びつきも弱い傾向がある。

70年代に暴動が頻発して差別的なまなざしが強まっていくなかで、労働者と地域住民との亀裂が生じていく。この頃には既に町名変更によって地図上から「釜ヶ崎」という地名は消滅していた。それにもかかわらず、依然、日雇い労働者やその支援者たちは「釜ヶ崎」という呼称を使用している。一方、行政や高度経済成長期以前から

この地に住む人々は、「あいりん地区」と呼ぶことが多い。こうして、流動的な労働形態と、地域住民との断絶によって、日雇い労働者は地域人口の大半を占めていたにも関わらず、地域的なつながりを築くことはほとんどなかった。

### Ⅲ 1990年代

1990年代に入ると求人数が激減する。日雇い労働は不安定な労働形態であるため経済不況の影響が強くなるのである。1990年に戦後最高の約185万人まで上昇した求人数は、その後急激に減少し、3年後には半数以下の89万人にまで落ち込んでいる。1995年の阪神・淡路大震災後に一時的に求人が増加するも、1997年以降は再び減少の一途をたどる（上畑2012）。

保障のない労働形態のうえ、家族に頼ることができない多くの労働者は、野宿生活を強いられることとなる。1998年の大阪市内では約8600人にのぼっている。釜ヶ崎内では、大阪市保護課の調査によると1992年には422人、釜ヶ崎日雇労働組合などをつくる「釜ヶ崎反失業連絡会」によると1000人近くにのぼると推定されている（朝日新聞1994年7月16日付夕刊）。

不況のこの時期には、出稼ぎとして流入してきたがとどまらざるを得なくなった層と、倒産やリストラによって職を失い流入してきた層が存在していたといえる。労働者の多くが、高度経済成長期に集団就職してきた「団塊の世代」にあたり、体力が衰えて働けなくなったり、働く意欲があっても仕事に「アブレ」たりして生計を立てることができなくなった。経済構造の変化と高齢化によって慢性的な失業状態となり野宿に陥る者も多く、野宿者の数は現在でも国内最多となっている。

野宿者のなかには、夜は段ボールやブルーシートで雨風をしのぎ、日中は拾い集めた空き缶を自転車に積んで換金したりして生活費を稼いでいる者が多い。「三角公園」で毎日行われている炊き出しに並んだり、教会で礼

拜を受けたのちに支給される食事を受ける者も多い。NPO法人「釜ヶ崎支援機構」が行っている「高齢者特別清掃事業」（略して「特掃（とくそう）」と呼ばれている）に登録してその給与を生活費に充てている者もいる。

#### IV 2000年代～現在

2000年頃から野宿者数は減少し、その数に反比例して生活保護受給者数が増加している。大阪市の実態調査では野宿者数は2005年度の6603人から2011年度は半数以下の2860人となった。以前に比べ生活保護の申請が受理されやすくなったためである。釜ヶ崎内で野宿からアパート暮らしへ移行する層に加えて、釜ヶ崎外で野宿をしていて支援者などにアパートを紹介された層が流入してきた。

高齢化はすすんでいき、現在では釜ヶ崎を内包する西成区は、12万1264人のうち65歳以上が4万1418人と全体の34・2%を占めている（2012年11月現在）。全国平均の23・3%に比べて非常に高く、これは西成区に釜ヶ崎が含まれているためである。釜ヶ崎の中心となる萩之茶屋地区では42・4%にのぼる。さらに、西成区は全国の大都市のなかで「ひとり暮らし高齢者出現率」が60・7%と最も高い（2005年現在）（河合2009）。

## 2 生活保護受給者の増加とその背景

歴史的にみてきたように、寄せ場である釜ヶ崎で单身男性の高齢化がすすむと、必然的に生活保護受給率が高まることとなる。生活保護受給世帯は、全人口約2万人のうち、2002年度に約2500世帯だったのが、2010年度には約9500世帯へと増えており、現在では2.6人に1人が生活保護受給者である（水内・平川

2011）。「あいりん地域」の中心部を占める萩之茶屋地区では約8000世帯が受給しており、受給率は44・4%と、大阪市全体の5%に比べて格段に高い。

以前は、疾病・障害等がある場合を除いて、65歳以上でなければ生活保護が適用されるのは困難であった。また、生活保護を簡易宿泊所で受給（通称「ドヤ保護」）が適用されるかは、自治体によって異なっており、大阪市では許可されないことも大きな要因であった。

生活保護を受けやすくなった背景としては、これまで労働者へ支援を行ってきた支援団体「キリスト教協友会（キョウイ）」や「釜ヶ崎医療連絡会議（キョウイ）」が施設ではなく、「居宅保護」を認可するように交渉を続けてきたことがひとつにあげられる（河野1999）。加えて、「佐藤裁判」の判決と厚生省の通達によって受給しやすくなったことがあげられる。

「佐藤裁判」とは日雇労働に従事していた佐藤氏がアパートでの居宅保護を申請したにも関わらず、大阪市は一時保護施設への収容保護を条件に受理するとし、この決定を不服として審査請求を経て1997年にはじまり、2002年に勝訴となった裁判である。この判例がその後の野宿からの居宅保護適用の基準に影響を及ぼした。そして、2003年に厚生労働省が各自治体に出した「ホームレスに対する生活保護の適用について」の通知によって、野宿から直接アパートでの生活保護へ移る場合には大阪市役所が敷金を支給することとなった。

現在でも生活保護の受給申請を行うと収容保護を条件とされるといふ慣行は続いているが、支援団体の多くがアパートでの居宅保護を訴えており、以前に比べると実現しやすくなっているというのが現状である。

\*1 1970年にカトリック教会の修道会やプロテスタント協会など5団体で発足し、多岐にわたる支援を続けている。

\*2 キリスト教牧師の大谷隆夫氏によって設立された釜ヶ崎日雇い労働者や野宿者の生活相談をおこなっているNPO法人。

#### 《参考文献》

- 青木秀男,1989,『寄せ場労働者の生と死』明石書店。  
青木秀男編,2010,『ホームレス・スタディーズ——排除と包摂のリアリティ』ミネルヴァ書房。  
生田武志,2007,『ルポ最底辺——不安定就労と野宿』ちくま新書。  
上畑恵宣,2012,『失業と貧困の原点——「釜ヶ崎」五〇年からみえるもの——』高菅出版。  
釜ヶ崎資料センター編,1993,『釜ヶ崎——歴史と現在』三一書房。  
河合克義,2009,『大都市の一人暮らし高齢者と社会的孤立』法律文化社。  
河野豊,1999,『野宿者を居宅保護せよ』『賃金と社会保障』1249:46-51。  
西岡幸泰,1979,『社会的形成過程』江口英一・西岡幸泰・加藤佑治『山谷——失業の現代的意味』未来社。  
原口剛、稲田七海、白波瀬達也、平川隆啓編,2011,『釜ヶ崎のススメ』洛北出版。  
水内俊雄・平川隆啓「第1章 数字で追う簡易宿泊所街／あいりん地域のこの10年の変化」,2011,大阪市立大学都市研究プラザ『大阪府簡易宿泊所生活衛生同業組合50年誌』  
釜ヶ崎支援機構ウェブサイト「高齢者特別就労事業（特掃）の歴史といま」.www.npokama.org/PDF/genjiyoutokadai/koureishiyajigyou.pdf (2013年3月8日閲覧)

## 第2章 釜ヶ崎における社会的孤立

石川翠

### 1 生活保護受給者の社会的孤立問題

生活保護が以前よりも受給しやすくなり、日雇い労働生活や野宿生活からアパートでの定住生活に移り、経済面、住居面では安定したといえる。ならば、不安定な生活に比べて安心した暮らしになるかといえば、そうとは限らない。大倉は、「居宅保護にかかってからの問題もある」として、以下のように述べている。

ひとつは保護費の支給に関することである。居宅保護の場合は月々の保護費を自ら管理することになるが、これまで日給で生活を送ってきた人にとってそれは簡単なことではない。なかには保護費を使い果たしてしまい路上に戻ってしまう人もいる。もうひとつは孤独（死）の問題である。野宿生活から居宅保護生活に移行することによって、それまでの人間関係は失われる。それと引き換えに近隣の人と新たに親密な関係がすぐに築けるかというと、そうはならない。居宅保護に移行した元野宿者の多くは毎日をひとりさびしく過ごしている。その姿を直接目にするケースワーカーや生活相談・支援のスタッフは、制度や環境が整っていない

いので十分に支援ができないと嘆く以外にないのが現状である（大倉2011）。

野宿生活から生活保護を受給することになった人の約2割が生活保護を辞退して再び野宿に戻っていく。アパートで暮らすようになってからキャンセルやアルコールに依存していくことも多い（生田2012）。アパートの個室に入ることとそれまでにあった関係が切れてしまい、部屋で亡くなった方の遺体が死後数日間発見されないということもある。これは、生活様式の変化や健康上の問題などが重なり、これまでの付き合いが途絶えてしまったためだと考えられている（稲田2011）。

「大阪就労福祉居住問題調査研究会」が2005年に実施した西成区の生活保護受給者に対する調査は、生活保護受給後に「人との交わり・会話」が減った人が34%、「近所づきあい（管理人等も含む）がない」人が37%であることを示している（大阪就労福祉居住問題調査研究会2006）。

調査結果や支援者の声を受けて、「西成特区構想有識者座談会報告書」においても、釜ヶ崎の生活保護受給者の社会的孤立が重要な課題として挙げられた。先の報告書は「生活保護受給者の健康・医療問題や孤立化」に対して、次のような考えを示している。

彼らは、それまで日雇労働や野宿生活をしながら就労をしていた人々が多く、生活保護を受給した途端、仕事等のやるべきことを失って、時間を持て余してしまうのである。居場所や生きがいも失い、狭いアパートや福祉マンション等に孤立して引きこもる生活は実にさびしい。そのはけ口として、上記のような不適正な支出があると考えられる（西成特区構想有識者座談会報告書2012）。

つまり、ここでは、彼らなりに孤立に対応した結果が、生活保護費の不適正な支出につながってしまうと認識

されている。西成特区構想では、生活保護受給者の社会的孤立に対処するために、「居場所づくり」や「やりがい創出」の事業やプログラムの施策が提言されている。ここでは提言内容については踏み込まないが、生活保護受給者の社会的孤立が以上のように注目されていることがわかる。

先行研究では、社会的孤立の要因が以下の3つの要因に整理されている。1つめは、「階層的格差」であり、貧困との親和性が高いとされている。2つめは、家族関係や地域コミュニティ、労働形態の変化による「中間集団の衰退」である。3つめは、生活保護制度の消極的運用に象徴される「制度運用の問題」である（河合2009）。

しかし、釜ヶ崎における社会的孤立は、生活保護を受給できなかった後に生じた問題である点に特徴がある。こうした受給後の社会的孤立の問題が射程に入られてこなかったのは、生活保護を受給することによって支援のネットワークに組み込まれると考えられてきたからだろう。

さらに、釜ヶ崎における社会的孤立は地縁・血縁・社縁といった中間集団の衰退という側面だけでは説明できない特徴をもつ。それは、1章でみてきたように、釜ヶ崎に至るということは、すなわちこの旧来の縁とはすでに疎遠になっているということである。それゆえ、重要なこととして、現在の釜ヶ崎における社会的孤立とは、先述した3つの縁とは別の縁からの孤立であることが察せられる。

## 2 不関与規範を土台とした労働者同士の関係

地縁・血縁・社縁と異なる縁とは、労働者同士の縁である。寄せ場には、長年、日雇い労働者に特有の付き合い

い方が存在してきた。西澤では、その付き合い方がどのようなものか、労働者の言葉が次のように引用されている。「手配師が大体同じになってくると、やっぱり、現場で会う人も決まってくるしな。そういう知り合いが多くなる。こっち帰って来てどうのって言うわけじゃないけど。帰ってこりゃあ個人個人だから。ドヤも違うし。このへんじゃあ、飲み友達とか、仕事友達しかいないよ、意気投合して一杯飲むとか、仕事で顔合わすとか、そういう程度だよな。この辺の人は詳しく突っ込んだ話なんかしないから。普通の一般社会だったら、悩み事とか過程の事情とか話すことあるやろ。ここはそんな無いんだから。」(西澤 1990)。

このようにして労働者同士で「金の貸し借りや様々な情報の交換や酒、煙草の奢り奢られ、愉快的な会話」が繰り広げられるのである。「意気投合して一杯飲むとか、仕事で顔合わすとか、そういう程度」の付き合いは、寄せ場特有の規範を土台として行われている。このことについて青木は次のように説明している。

寄せ場は、日雇労働者の流動的な匿名社会である、そこで人びとは、互いの出自や経歴を問わない。また問うことをタブーとする。人々は名前を通称で呼びあう。それが本名であるかどうかは、問題でない(青木 1989)。

このような「互いの出自や経歴を問わない」ことは関係をもつうえで重要な規範である。この規範は、彼らの寄せ場に至る経緯が大きく影響していることを西澤は以下のように述べている。

寄せ場労働者が、漂泊者たることを選んだあるいは選び取られたのは、何らかの「事情」——彼らが持

つ烙印ゆえの「世間」における「肩身の狭さ」、被差別体験、事業の失敗、離婚による生活の激変、借金からの逃亡、解雇といった様々な人に言いにくい事情——を直接、間接の理由としていることがかなり多いように思われる。それゆえに、彼らは自分たちの過去を隠匿しようとする。：一般に、経験の共有は、共同性——共通の絆と相互作用——を生む重要な前提であるとされる。しかしながら、寄せ場においては、文字通りの意味での「互いに他を知り合う」ことによる経験の共有は行われにくい(西澤 1995)。

つまり、日雇い労働という流動的な生活様式とともに、差別を受けかねない「過去」をもつ人びとが暮らしているために醸成されてきた規範である。

このような規範を本章では「不関与規範」と呼び、以下にその具体例をみていく。

### 3 規範を揺るがす状況

寄せ場においては、このような不関与規範の存在が、個人の経歴や性格などに関わらずに暮らしている「懐の深い」地域性を醸成したことが大きな特徴となっていた。

しかし、近年この不関与規範を土台とした労働者間の関係からの孤立が問題となってきた。西澤はこの規範を保つことが困難になる状況を示している。

彼らの生活の不安定さ——不安定な就労形態、病気やケガ、そしてとりわけ死——は彼らのアイデンティ

ティの土台を根底から切り崩さずにはおかない(西澤1990)。

西澤は加齢や傷病、そしてその延長線上にあって避けられない「死」について考えざるを得ない状況になっていると述べている。「死」を考えざるを得なくなったときに、「彼らのアイデンティティ」の変化が迫られると述べる。故郷に戻ることは「過去のアイデンティティへの回帰」であり、施設に入ると身元を調べられるうえに「自由な」生活様式は切り捨てざるをえない。このように西澤は、「死に場所」を考えること<sup>4</sup>が、「規範を揺るがす状況」になることを提示している。

そこで、西澤の考えを今日的な課題に照らしいうならば、加齢や傷病によって生活保護を受給することにおいても、「規範を揺るがす状況」が生じると考えられる。つまり、寄せ場の規範と社会福祉制度が想定する規範が異なるため、彼らのなかに軋轢が生まれうることを考えられる。

たとえば、不関与規範を土台としたルールがいくつが存在している。一度会った相手と次回も会おうとする行為はあまり好ましいものと認識されていないため、以前路上で出会って酒を酌み交わした相手を探し訪ねたりすることはない。西澤は関係が未来に発展しない理由を、寄せ場特有の時間の捉え方によって説明している。

ここでいう「過去」は、過去から茫漠とした未来に向って直線的に流れる多くの近代人にとっての主観的な時間の流れの中であって、未来の対に位置づけられる過去とは、質が違っている。寄せ場労働者は、「過去」を断ち切ることによって、過去から未来へと流れる時間から離脱し、ただ「今」を「自由」に生きることができる別の時間の中に漂っているといった方がよい。それゆえに「過去に触れ合わない」この関係規範は、「過去」の経歴のみならず、「これから」のこれらの関係にも作用する(西澤1990)。

つまり、触れてはいけない「過去」とともに、触れてはいけない「これから」がある。そのため、見知らぬ者同士が「意気投合して一杯飲む」関係は一般的だが、顔をみかけなくなったときに探し訪ねるなど積極的に関わり合うことは稀である。それゆえ、一度パートでの生活を始めると、自らその場に行かない限り、わざわざ訪ねて来られることはないのである。

以上、釜ヶ崎における社会的孤立の内実を、先行研究をもとにみてきた。もう一度振り返ると、釜ヶ崎における社会的孤立とは、地縁・血縁・社縁からの孤立に加えて、他の(二)労働者との付き合いからの孤立であることを記した。そしてそれは、生活保護を受給することによって、寄せ場の規範を揺るがす状況が起きているためであることが推察される。

#### 4 福祉アパートと支援付き住宅

近年、釜ヶ崎では主に生活保護受給者の住まいとなる「福祉アパート」が急増しているが、そのなかの一部は様々な福祉的なサービスを提供する「支援付き住宅」として社会的孤立の防止に尽力している。1970年代から1990年代にかけては、釜ヶ崎の住空間の中心は日雇い労働者を主たる対象とした「簡易宿泊所」であった。簡易宿泊所はスポーツ合宿所や民宿なども含まれるが、そのなかでも日雇い労働者が多く利用してきた宿泊所は「木賃宿(きちんやど・もくちんやど)」とも呼ばれていた安価で粗末な宿泊施設である。日雇い労働者は出張で数ヶ月間、釜ヶ崎を離れることも珍しくない。そのため簡易宿泊所は彼らの生活様式に適合的な日払い形式をとっ



ている。「宿(やど)」を逆から読んで「ドヤ」と呼ばれている簡易宿泊所は、多くが「三畳一間」の個室であり、トイレや炊事場は共同である。風呂が設置されているところもあるが、ない場合は近所の銭湯を利用する。一泊千円前後の値段設定である。バブル経済期には釜ヶ崎に約200軒の簡易宿泊所が存在し、2万人以上の収容力を誇っていた。

しかし、バブル経済崩壊以降、日雇い労働者の失業が深刻化し、それに伴い、簡易宿泊所の稼働率が著しく低下していった。このような状況を背景に簡易宿泊所が転換したのが2000年前後である。

1999年に「釜ヶ崎のまち再生フォーラム」(以下「再生フォーラム」)が結成され、「大阪府簡易宿泊所環境衛生同業者組合」と協同で、簡易宿泊所を野宿者対策のための住居として活用するプランが提示された。従来、釜ヶ崎では住所不定者に生活保護を適用する際、アパート等の居宅ではなく施設で保護することが一般的であった。簡易宿泊所経営者と「再生フォーラム」が、居宅保護をおしすすめるために、簡易宿泊所を共同住宅に登記変更をおこなった。そして、2000年にNPO法人「サポーターティブハウス連絡協議会」が発足する。ドヤ経営の状況と住居支援の流れが重なり、サポーターティブハウスは成立した。

サポーターティブハウスの具体的なサービス内容としては、バリアフリー仕様など設備の拡充などのハード面に加えて、24時間常駐するスタッフによる日常的な生活支援や、住人が自由に利用できる談話室が設けられた。

この取り組みが順調に進んだことによって、ドヤを宿泊施設から住宅へ登記変更して、生活保護の住宅扶助を家賃収入として経営をおこなう「福祉アパート」が2000年ですでに約50軒、2010年では宿泊施設数の半数である約100軒にまで増えた。サポーターティブハウスなどのように、さまざまな生活支援をおこなう住宅もある一方、弁当などとして高額のお金をとったりする「貧困ビジネス」ともいえる住宅もあり、入居先によって生活は大きく変わるといえる。

#### 《参考文献》

- 生田武志,2012,「釜ヶ崎と『西成特区』構想」『現代思想』40(6):130-138.
- 稲田七海,2011,「変わりゆくまちと福祉のゆらぎ」原口剛、稲田七海、白波瀬達也、平川隆啓編『釜ヶ崎のススメ』洛北出版.
- 大倉裕二,2010,「コラム…生活保護と野宿者」青木秀男編『ホームレス・スタディーズ——排除と包摂のリアリティ』ミネルヴァ書房.
- 河合克義,2009,『大都市の一人暮らし高齢者と社会的孤立』法律文化社.
- 白波瀬達也,2010,「コラム…『福祉の街』へと変わりゆく釜ヶ崎」青木秀男編『ホームレス・スタディーズ——排除と包摂のリアリティ』ミネルヴァ書房.
- 西澤晃彦,1990,「寄せ場労働者の社会関係とアイデンティティ——東京・山谷地域を事例として——」『社会学評論』41:248-343.
- 西澤晃彦,1995,『隠蔽された外部——都市下層のエスノグラフィ』彩流社.
- 藤田孝典,2012,「ソーシャルワークが生活保護を変える——貧困運動と支援者のあり方を問う」『POSSE』17:68-77.
- 水内俊雄,2007,「生活保護受給の激増と脱野宿生活者の地域居住の現状—釜ヶ崎から西成区全域をめぐる—」高田敏・桑原洋子・逢坂隆子編『ホームレス研究—釜ヶ崎からの発信—』信山社.
- 大阪就労福祉居住問題調査研究会ウェブサイト「大阪市西成区の生活保護受給の現状(西成区生活保護受給者聞き取り調査の概要)」[www.osaka-stk.com/pdf/nishi\\_jeaf0623.pdf](http://www.osaka-stk.com/pdf/nishi_jeaf0623.pdf) (2013年3月8日閲覧)
- NPO法人「サポーターティブハウス連絡協議会」ウェブサイト <http://supportivehouse.jp/index.html> (2013年3月8日閲覧)

### 第3章 釜ヶ崎における死と弔い

白波瀬達也

#### はじめに 「福祉のまち」における死の問題

高度経済成長期以降、釜ヶ崎は「労働者のまち」というイメージが流布していたが、近年は「福祉のまち」へと変容したと論じられることが多くなった。このことの含意は以下の2つに集約できる。

ひとつは釜ヶ崎の高齢化である。釜ヶ崎が位置する西成区の2011年10月現在の高齢者数は4万1418人を数え、高齢化率は34・8%にも及ぶ。同年同月の大阪市全体の高齢化率は22・8%であることから、西成区の高齢化率がいかに高いかがうかがえよう。釜ヶ崎は西成区のなかでも特に高齢化率が高い地域であり、2013年時点で40%を超える。そのうちの大半が単身で暮らす男性である点に釜ヶ崎の特徴がある<sup>【\*1】</sup>。

もうひとつはホームレスや生活保護受給者といった「社会的・経済的弱者」にカテゴライズされる人々の顕在化である。釜ヶ崎では1990年代に日雇労働の求人数の激減によってホームレス問題がかなり深刻化した。1990年代後半から官民を問わず、様々なホームレス対策・支援が積極的に講じられたことにより、2000年頃から、釜ヶ崎ではホームレスの数は減少傾向にある。

一方、釜ヶ崎では生活保護受給者が年々増加し、2013年現在で約1万人を数える<sup>【\*2】</sup>。2011年12月時点の大阪市の生活保護受給世帯数は11万4933世帯、生活保護受給人員は14万9396人。生活保護受給率は5.6%で政令指定都市のなかで最も高い。また、西成区の生活保護受給世帯数は2万5607世帯、生活保護受給人員は2万8438人、生活保護受給率は大阪市24区で最も高く23・5%にも及ぶ。西成区内でも突出して高い生活保護受給率となっている地域が釜ヶ崎で、住民の約40%が生活保護を受給している。2002年の時点の釜ヶ崎における生活保護受給人員は約2500人であったため、この10年間でおよそ4倍増加した。

近年、生活保護が適用されやすくなったことで、釜ヶ崎に暮らす人々の経済状況はかなり安定した。しかし、社会関係においては未だ排除されがちである。このことは「死」の場面においてシンボリックにあらわれる。以下では、まず、釜ヶ崎における「死」に関するデータを数量的に示し、次に釜ヶ崎のなかで「死」がどのように扱われているのかについて述べる。

\*1 なお、2020年には釜ヶ崎の高齢化率が50%以上になる見込みとなっている。

\*2 釜ヶ崎におけるホームレス減少の主要因は、「就労による経済的自立」ではなく「生活保護の適用による居所の確保」であることがわかる。

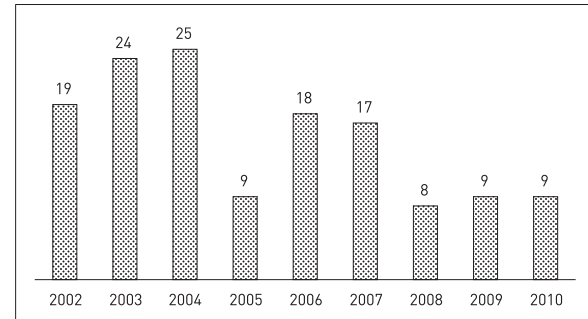
#### 1 「行旅死亡人数」と「行旅病人の死亡件数」

釜ヶ崎における住所不定者の死亡者数は西成区保健福祉センターが取り扱う「行旅死亡人数」<sup>【\*3】</sup>と、大阪市緊急入院保護業務センターが取り扱う「西成区の入行旅病人死亡件数」<sup>【\*4】</sup>から推測することができる<sup>【\*5】</sup>。

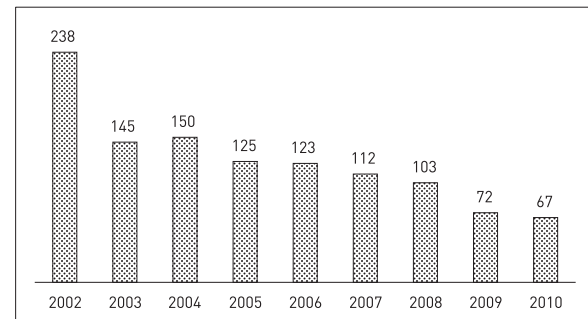
西成区の住所不定者の多くは釜ヶ崎を拠点に生活をする人々であり、大阪市内の住所不定者もまた、釜ヶ崎に集中する傾向がある。したがって、2つの機関が取り扱う死亡者のうち、釜ヶ崎を生活拠点とする者は多いと考えられる。釜ヶ崎では住所不定者の集住地域というイメージが強く、路上死と簡易宿泊所内の死亡が多く発生すると考えられがちだが、近年その数が激減していることが統計データから明らかとなっている。

※3 1899（明治32）年施行

- の「行旅病人及行旅死亡人取扱法」において行旅死亡人は、
- ① 旅行中ないしは行路中に死亡し、引き取り手がいない者
  - ② 住所、居所、氏名のうちいづれか一つ以上が不明で、引き取り手がいない者
  - ③ 引き取り手がいない死胎にの3つに分けられている。



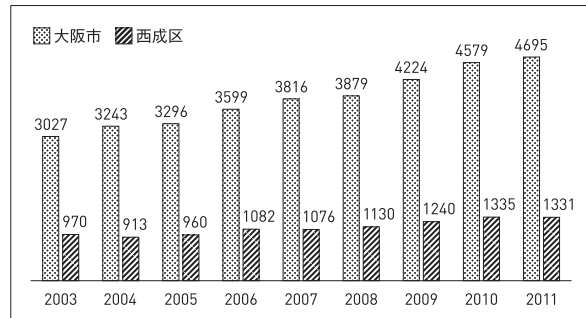
グラフ1 西成区保健福祉センターが取り扱う行旅死亡人件数  
（大阪市福祉局生活福祉部保護課に問い合わせ得た資料より作成）



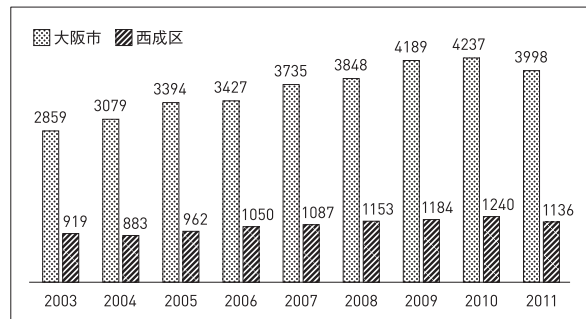
グラフ2 緊急入院保護業務センターが取り扱う西成区発生の行旅病人死亡件数  
（大阪市長生相談所に問い合わせ得た資料より作成）

## 2 「死亡」による保護廃止世帯数」と「要生活保護者の火葬件数」

大阪市では1990年代後半から生活保護受給世帯が急増しているが、それに比例して、「死亡による保護廃止世帯数」も右肩上がりとなっている。大阪市は釜ヶ崎の生活保護受給者の年間死亡者数に関するデータを独自に集計していないが、各区の「死亡による保護廃止世帯数」、「要生活保護者の火葬件数」は把握している。2011年の大阪市の「死亡による保護廃止世帯数」は4695世帯。そのうち西成区は1331世帯を数える。また、同年の大阪市の要生活保護者の火葬件数は3998件。そのうち西成区は1136件を数える。釜ヶ崎の生活保護受給世帯は西成区の3分の1以上を占めるため、同地域において1年間に死亡する生活保護受給者は実に400人前後であると推計することができる。



グラフ3 死亡による保護廃止世帯数  
（大阪市福祉局生活福祉部保護課に問い合わせ得た資料より作成）

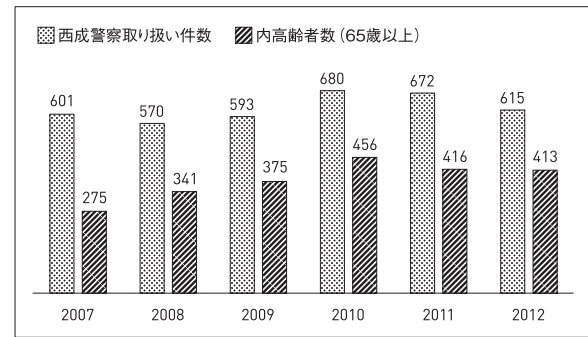


グラフ4 要生活保護者の火葬件数  
（大阪市環境局事業部に問い合わせ得た資料より作成）

### 3 変死者数

変死は亡くなった時点で死因が不明なもので、一般的に在宅死が多数を占めると考えられている。釜ヶ崎のように住民の大半が単身世帯の場合、在宅死は「孤独死」とほぼ同義である。筆者が大阪府警察本部に問い合わせ得た「西成警察署取り扱い変死者数」<sup>＊4</sup>「グラフ5」によれば、2007年から2012年にかけての変死者は年間600人前後で推移している。このうち、西成区保健福祉センターが取り扱う「行旅死亡人」<sup>＊5</sup>が占める割合は2%程度にすぎない。すなわち、変死者の大半は路上死をはじめとする身元不明者の死ではなく、生活保護を受給する単身者の在宅死だと推察される。

西成警察署が取り扱う変死者数はこの数年間、目立った変動はないが、そのなかに占める高齢者（65歳以上）の割合は上昇している<sup>＊6</sup>。このことは高齢者の在宅死が増していることを示唆している。大阪府警は釜ヶ崎の孤独死に関する独自のデータを集計していないため、ここで具体的な数を提示することはできない。とはいえ、釜ヶ崎は西成区のなかでも単身世帯率・高齢化率ともに突出して高い地域であることから、西成警察署が取り扱う変死者に占める「釜ヶ崎の孤独死」割合は相当に高いと考えられる。



グラフ5 西成警察署取り扱い変死者数  
(大阪府警本部総務部に問い合わせ得た資料より作成)

＊4 グラフ5は必ずしも西成区民の変死者数を意味しない。また、本データは交通死亡事故を含まない。  
＊5 西成警察署が取り扱った2007年の変死者の高齢者割合は45・8%だったが、2012年には67・2%にまで上昇している。

### 4 釜ヶ崎における弔い

以上で概観してきたように、釜ヶ崎は近年、「多死社会」としての様相を色濃く呈している。同地域に暮らす人々は、一般に葬送の主たる担い手として想定される親族とのつながりが乏しい。そのため、弔いのあり方も固有の特徴をもつ。以下では、まず、大阪市内における無縁仏に関する行政データを提示し、次に釜ヶ崎において多様に展開してきた弔いの実践に焦点をあてる。

#### 無縁堂における合葬

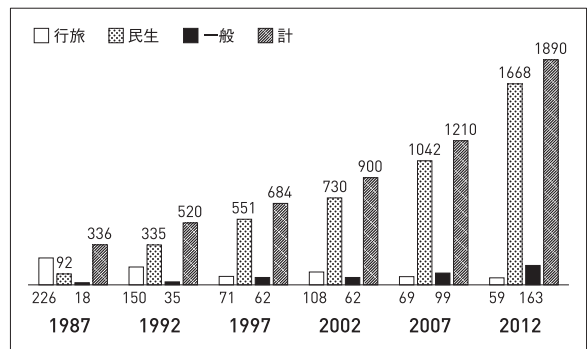
大阪市阿倍野区の大阪市設南霊園にある「無縁堂」では、大阪市内で亡くなり、引き取り手のない「無縁仏」が合葬されている。ここでは毎年9月中旬に慰霊祭があり、献花の後、遺骨が合葬されている（毎日新聞2008年6月14日大阪朝刊）。また、大阪市設南霊園のスペースには限りがあるため、身寄りのない人たちの古い遺骨は、大阪市平野区にある市設瓜破霊園の焼骨埋葬地<sup>＊6</sup>に移している。毎日新聞社の調べでは政令指

定都市でこうした措置を取っているのは大阪市だけだという（毎日新聞 大阪夕刊1999年3月17日）。

筆者が大阪市環境局事業部に問い合わせ得た「大阪市無縁仏合祀件数」<sup>＊</sup>によれば、行旅病人及行旅死亡人取扱法に基づき火葬された人々を意味する「行旅」が年々減少しているのに対し、生活保護の葬祭扶助によって火葬された人々を意味する「民生」と、上記2つにあてはまらない「一般」が年々増加していることがはっきりとわかる。1987年と2012年を比較すると「行旅」は約4分の1にまで減少しており、ホームレスをはじめとする住所不定者の減少を明示している。一方、「民生」は約18倍に増加しており、身寄りのない生活保護受給者の激増を如実にあらわしている。また、「一般」は9倍に増加しており、生活保護を受給していない人々のなかにも身寄りがなく無縁仏になるケースが急増していることを示唆している。近年、「無縁社会」という言葉が人口に膾炙するようになったが、そのことは大阪市無縁仏合祀件数の年次推移からもはっきりとかがえる。

大阪市内の無縁仏の慰霊祭は、先述した通り、大阪市設南霊園で毎年おこなわれているが、釜ヶ崎においても独自の慰霊祭がおこなわれている。釜ヶ崎の慰霊祭は行政主導のものと社会運動団体主導のものがある。釜ヶ崎では行政主導の慰霊祭が先行的におこなわれ、その後社会運動団体主導の慰霊祭がおこなわれるようになった。

＊6 焼骨埋葬地は火葬で出る遺灰や、骨あげの後に残る小骨を処分する場所である。



グラフ6 大阪市無縁仏合祀件数  
(大阪市環境局事業部に問い合わせ得た資料より作成)

### あいらん物故者慰霊祭

釜ヶ崎における行政主導の慰霊祭は「あいらん物故者慰霊祭」と呼ばれ、1966年から西成愛隣会主催のもと、毎年秋に実施されてきた。西成愛隣会は1960年に、「隣保共同の精神にもとづき、更生相談所周辺における環境の浄化をはかるため、関係諸団体と緊密な連携のもとに、地域住民の教養文化の向上をはかり、福祉の増進に勤め、もって隣保事業の推進を期すること」を目的に発足した組織である（『平成24年度西成愛隣会会則』参照）。同会の会長は西成区社会福祉協議会会長によって担われ、理事は西成区地域振興会会長、西成地区保護司会会長、西成区民生委員協議会会長、萩之茶屋小学校・今宮小学校・今宮中学校のPTA会長、西成区役所保健福祉課課長、大阪市立更生相談所所長などによって構成されている。これらのことから西成愛隣会が行政関係者と地元有力者による公的な性格を強くもった組織であることが容易に理解できよう。

西成愛隣会はこれまで日雇労働者やホームレスらを対象に、生活相談や小口資金の貸し出しなどに取り組んできたが、近年、その活動は縮小している。1992年度に2万5037件あった相談件数は、2011年度には2522件に減少。2011年度の大阪市からの委託費は約1360万円で、ピーク時の3分の1となった。西成愛隣会はこれまでゲートボール大会などの娯楽事業にも取り組んだが、資金難から徐々に廃止してきた（毎日新聞2012年10月13日大阪夕刊）。こうした状況のもと、西成愛隣会は2012年度をもって解散することが決定した。

あいらん物故者慰霊祭は大阪市から交付される補助金「西成愛隣会事業補助金<sup>＊</sup>」を主たる財源にして執りおこなわれてきたが、同補助金の大幅な削減<sup>＊</sup>と慰霊の対象である無縁仏の減少<sup>＊</sup>が顕著になってきたことが背景となり、2011年の第46回をもってその長い歴史に幕を下ろした。

先述した大阪市無縁仏合併件数が年々増加しているのに対し、あいりん物故者慰霊祭の慰霊対象が年々減少していることは興味深いコントラストとなっている。あいりん物故者慰霊祭における慰霊対象の減少は、大阪市内、とりわけ西成区内における「身寄りのない住所不定者」の大幅な減少とパラレルな関係にある。

「あいりん物故者慰霊祭」では、①西成区保健福祉センターが取り扱う行旅死亡人（西成区内で亡くなった行旅死亡人）のうち引き取り手のない遺骨、②緊急入院保護業務センターが取り扱う行旅病人の死亡者（大阪市内の住所不定者で病院死した者）のうち引き取り手のない遺骨、③大阪市立更生相談所が取り扱う死亡者（主に大阪市立更生相談所が措置した施設で亡くなった者）のうち引き取り手のない遺骨が慰霊の対象となっている。

筆者の行政関係者への聞き取りによれば、あいりん物故者慰霊祭は、かつて仏教式であったが、後に無宗教式に変わった。このことは、あくまでも伝聞であり、変更時期や理由は定かではない。近年のあいりん物故者慰霊祭は以下のような形式で執行される。萩之茶屋南公園（通称三角公園）の舞台上に祭壇が設けられ、その中央に無縁仏の過去帳が置かれる。西成愛隣会を構成する理事たちが列席し、西成愛隣会副会長による開会の辞をもって開始。その後、西成愛隣会会長（西成区社会福祉協議会会長）による弔辞が読まれた後、献花がおこなわれる。最後

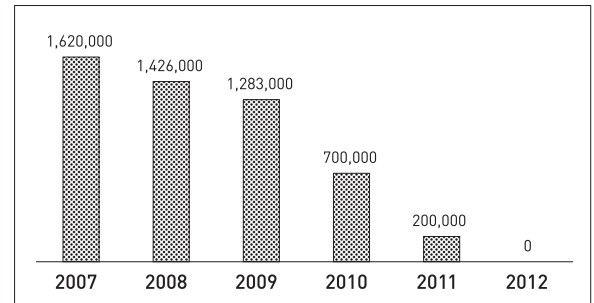


2011年のあいりん物故者慰霊祭

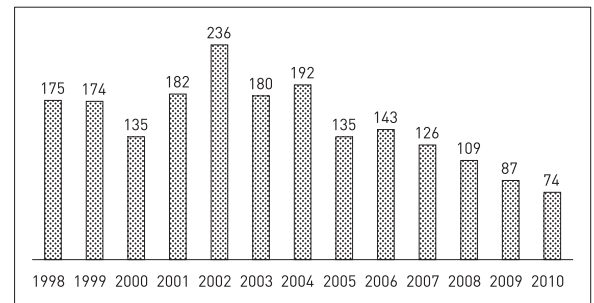
に西成愛隣会副会長による閉会の辞をもって終了する。この一連の儀礼が約30分かけておこなわれる。

筆者が西成愛隣会関係者におこなった聞き取りによれば、同会はあいりん物故者慰霊祭の実施案内文を日雇労働者が多く集まる、あいりん総合センターや萩之茶屋南公園に掲示し、参列を呼びかけている。しかし、実際に釜ヶ崎の日雇労働者、路上生活者、生活保護受給者が参列することはほとんどなく、遠くから眺めるだけの者が多いという。筆者がこれまで実際に観察してきたあいりん物故者慰霊祭においても、参列者の中心は礼服に身を包んだ西成愛隣会関係者の人々であった。

＊7 西成愛隣会は西成愛隣会事業補助金を通じて、日雇労働者、児童、高齢者等を対象にした「あいりん物故者慰霊祭」、「演芸会の夕べ」、「児童人形劇」、「児童音楽鑑賞会」等の事業を実施してきた。2007年頃からこれらの事業に対する補助金が著しく減少し、2012年度予算は凍結された。



グラフ7 西成愛隣会事業補助金（大阪市のホームページより作成）



グラフ8 あいりん物故者慰霊祭 祭祀物故者数（西成愛隣会に問い合わせ得た資料より作成）

行政主導のあいりん物故者慰霊祭には、釜ヶ崎に暮らす人々の参加がほとんどみられない。しかし、彼らは「仲間」の慰霊行為に無関心なわけでは決してない。そのことは毎年8月15日に実施される「釜ヶ崎夏祭り慰霊祭」を見れば明らかである。釜ヶ崎夏祭りは1972年に、暴力団による地域の支配構造に抗するために組織された社会運動団体「暴力手配師追放釜ヶ崎共闘会議」（通称釜共闘）によって始められた経緯がある。その後、釜ヶ崎夏祭りは「釜ヶ崎夏祭り実行委員会」の主催となり、主義主張を異にする多様な立場の人々が参画するようになった。釜ヶ崎夏祭りに古くから関わる複数の関係者への聞き取りによれば、1970年代から釜ヶ崎夏祭りで慰霊祭はおこなわれていたが、当時はあくまでも社会運動・労働運動に参画していた活動家たちが甲いの対象となっていた。1980年代になってから「釜ヶ崎キリスト教協友会<sup>[\*]</sup>」のメンバーらの問題提起により、甲いの対象が日雇労働者にまで拡大していった。

釜ヶ崎夏祭りの慰霊祭は、あいりん物故者慰霊祭と異なり、長らくキリスト教関係者が重要な役割を担ってきた。1990年頃からは、カトリック司祭の本田哲郎氏が慰霊祭の主たる執行者であったが、2007年からは浄土真宗大谷派僧侶の川浪剛氏が、2009年からは浄土宗僧侶の杉本好弘氏が参画するなど、仏教関係者の関与がみられるようになった。筆者が実施した釜ヶ崎夏祭り実行委員会関係者への聞き取りによれば、かつて慰霊祭は夏祭りのなかで大きな位置を占めるものではなかったが、近年は地域全体の高齢化により「死」が身近なものになっており、その重要度が増してきているという。

現在の釜ヶ崎夏祭りの慰霊祭は以下のような形式をもつ。萩之茶屋南公園（通称三角公園）の北側に祭壇が設けられ、そこに釜ヶ崎で活動する様々な団体から届けられた死者の名前が掲示される。このように釜ヶ崎夏祭り慰霊祭は甲う者と甲われる者との間に一定の人間関係があったことが前提となっている。釜ヶ崎夏祭り慰霊祭は、あいりん物故者慰霊祭のように「顔の見えない抽象的な死者」を対象としているのではなく、「顔の見える具体的な死者」を対象としている点に大きな特徴がある。祭壇には焼香スペースがあり、手を合わせる人が絶えない。また祭壇に設けられた献金箱に小銭を入れる者も少なくない。

2012年は以下のような流れで慰霊祭がおこなわれた。まず、「千の風になって」をギター伴奏で合唱した後、本田氏の司式のもと黙祷。この間、賑わいに満ちていた公園は静寂に包まれた。その後、本田氏が毎週、釜ヶ崎にあるカトリック系施設「ふるさとの家」で実施している「労働者のミサ」の一部を朗読した。

亡くなった人のために祈ります。

誰も看取る者なく、路上で、ドヤで、貧しいアパートで息を引き取った仲間たちを、あなたの懐に迎え入れてください。

引き裂かれた家族への負い目と、過酷な労働と、世間の差別の痛みのなかで生涯をおくり、その孤独な苦しみと死によって、主の受難と死に結ばれた者が、復活にも結ばれ、解放と安らぎを得て、地上の仲間を支える者となりますように。

その後、僧侶たちが阿弥陀経を唱えた。読経の間に祭壇に掲示された死者の名前を本田氏が読み上げた。死者の名前の読み上げ数は年によって異なるが、この年は100人前後であった。僧侶がメッセージを述べた後、再びギター伴奏で唱歌「故郷」を合唱し、約30分にわたる慰霊祭が終了した。

釜ヶ崎夏祭り慰霊祭は、あいりん物故者慰霊祭と異なり、礼服用者はおらず、釜ヶ崎のなかで日常を過ごしている人々の参加が目立つ。この夏祭りにおける慰霊祭は亡くなった「仲間」の死を可視化させ、集合的に弔う場として機能する一方で、釜ヶ崎に暮らす人々に、自らの「死」を強烈に自覚させる場としても機能している。

\*8 1970年に結成されたキリスト教の超教派組織。布教を目的としておらず、「人を人として」をモットーに釜ヶ崎の地域福祉に携わっている。

### 個別の弔い

先に挙げた2つの慰霊祭は死者を集合的に弔う行為であり、高度経済成長期以降の釜ヶ崎の死者供養の典型的な形といえよう。一方、近年は生活保護受給者が増加したことによって、死者を個別に弔うことが以前に比べると容易になり、新しい葬送のあり方を模索する動きが見え始めている。

カトリック施設「ふるさとの家」では、納骨堂を設けており、希望があれば、信仰の有無にかかわらず、誰でも納骨堂に入ることができ

る。しかし、実際にふるさとの家に納骨を希望する者は少なく、ふるさとの家が利用者に納骨を積極的に呼びかけることもほとんどないという。納骨件数は年間2〜3件で推移しており、2012年1月の時点で計143の遺骨が収められている。ふるさとの家は釜ヶ崎における主要な憩いの場として地域に暮らす人々に親しまれている施設である。このことを考慮すると、現在の納骨数は非常に少ないといえよう。ふるさとの家で毎週ミサを執りおこなっている司祭の本田哲郎氏は、筆者の聞き取りに対し、「死後の手厚い弔いよりも、生きている間のことがはるかに大事」であるとし、葬送や慰霊をそれほど重視していないと述べた。ただし、釜ヶ崎に暮らす人が自らの死後について要望をもつ場合には、できる限り応答するよう心がけているという。

このように本田氏は夏祭り慰霊祭のキーパーソンではあるが、自身は葬送や慰霊に強い関心をもっていない。対照的に近年、釜ヶ崎に積極的に参画するようになった仏教関係者は、誰にも看取られることなく死にゆく人々に並々ならぬ関心を有している。

先述した浄土真宗僧侶の川浪剛氏は日雇労働者の父をもち、自らは不登校や路上生活を経験するなど、釜ヶ崎における「生きづらさ」に対して当事者性を強くもつ僧侶である。川浪氏は1990年代から釜ヶ崎夏祭りに断続的に参加し、司会等の役をこなす一方、近年は毎年、慰霊祭で読経するようになった。このような関わりのおかげで、釜ヶ崎に暮らす人々や同地域で活動する支援団体等とのネットワークが形成され、個人の葬儀を依頼されることが増えた。



阿弥陀経を読む僧侶たち（右端が浄土真宗僧侶、川浪剛氏）



祭壇に向かって手を合わせる人々



カトリック司祭、本田哲郎氏による「労働者のミサ」の朗読



一般的に生活保護受給者が死亡した場合、福祉事務所が親族にその旨を通知し、葬祭に関する費用負担を求める。①死亡した生活保護受給者の葬祭をおこなう扶養義務者がいないとき、②死亡した生活保護受給者の遺留した金品で、葬祭をおこなう費用を満たすことができないとき、生活保護の葬祭扶助が適用される。大阪市内の生活保護受給者に葬祭扶助が適用された場合は、葬祭扶助で定められた範囲内の簡素な葬儀（通称福祉葬）をおこなう、大阪市の斎場にて火葬する。遺骨の引き取り手がない場合は斎場にて1〜2年間保管する。期間内に引き取り手がない場合は、先述した大阪市設南霊園の無縁堂に遺骨が収められる。このような半ば機械的ともいえる「死の取り扱い」に問題意識をもつ川浪氏は、2010年に複数の僧侶たちと「支縁のまちサンガ大阪」を結成。仏教を終末期や死後だけではなく、日々の生活に活かすことを模索している。その具体的な実践として、現在は戸別食糧支援をおこなっている。

また、浄土宗僧侶の杉本好弘氏も釜ヶ崎における死のあり方に強い問題意識をもっている。杉本氏が釜ヶ崎に足を踏み入れたのは2008年秋。特技のアコーディオン演奏を活かして、西成市民館のカラオケ事業



ふるさとの家の納骨堂

に定期的に参加したのがきっかけだ。釜ヶ崎において仏教の活動がほとんどおこなわれていないと考えた杉本氏は、2009年以降、春彼岸、盆、秋彼岸に法要を実施するようになった。はじめは参加者が少なかったが、2011年以降は毎回20人ほどが法要に参加している。以上の取り組みに加え、近年、杉本氏は個人の葬儀も依頼されるようになった。

一方、杉本氏は2012年に「仲間を独りで旅立たせない」とことを目的に、特定の宗教色をもたない「旅立ちと見送りの会」を賛同者とともに結成し、その代表も務めている。旅立ちと見送りの会は会員制で、会員証をもつ者が亡くなった際、その死が同会に通知される仕組みとなっている。同会は葬儀の実施自体を目的とはしておらず、生前に付き合いのあった人々を追悼する集会の開催を重視しており、これまでも数回、西成市民館を会場に「お別れ会」を実施している。

旅立ちと見送りの会は、会員に信仰する宗教を問わない。そのため会員は仏教関係者だけでなく、キリスト教関係者や特定の信仰をもたない者もいる。また、司法書士、ソーシャルワーカー、地元住民など、多様な人々によって構成されている。このように、近年は釜ヶ崎において個別の弔いに力点を置く実践があらわれてきているが、その活動は緒についたばかりである。

釜ヶ崎では身寄りがない状態で暮らす者が多くいるため、集合



浄土宗僧侶、杉本好弘氏による2012年の盆法要

的な弔いである慰霊祭が繰り返しおこなわれてきた。また、非親族を中心的な担い手とする個別の弔いが定着しつつある。こうした状況は、現代の日本のなかでは特異だといえるだろう。しかし、近年、全国的に親族規模の縮小や親族関係の希薄化は深刻の度合いを深めており、親族を主たる担い手とする葬送儀礼の維持が困難になっている。このことを考慮するならば、釜ヶ崎で展開されている弔いの実践は、日本における従来の葬送儀礼のあり方に再考を迫るインパクトがあるといえるだろう。

## 第2部 釜ヶ崎の事例―周縁を生きる

## 孤独の力―引き合う万有引力のように

上田假奈代

萩之茶屋2丁目にある「支援ハウス路木」(以下、路木)は10階建て45室のRC鉄筋コンクリートで2006年に建設された。茶色の煉瓦調の外壁、しっかりと造り、エレベーターを設置し、各部屋は12平米ほど、ユニットバスとミニキッチンがついている。家賃も4万2000円程度で他のアパートに比べて高いわけではない。このあたりに多い共同トイレ、3畳一間のドヤ転用型のアパートに比べると、路木が入居者に快適な空間を提供しようと考えられたことがわかる。

釜ヶ崎というまちが单身男性を中心とした超高齢化社会に突入し、まちの課題も変化していく。路木はそれに呼応するような形のマンションであることは間違いない。また、多くのサポーターハウスや支援付き住宅は経営者が運営管理も行っているが、路木は不動産を所有する会社とは別に、NPO団体が運営を担っている。そして、釜ヶ崎の人々に対し健康や歯、介護、法律などの相談会を実施したり、縫製の技術をいかし、「すそあげ事業」なども行なっている。一階の共有スペースを住人や地域の人たちのための居場所にしたいという希望を持っていたりする。(2011年より実現し実施)。この点においても、このNPO団体が、住宅の提供を行なうだけでな

く、就労、健康、居場所、つながりづくりなどの地域課題に対し、意識高く取り組みとうとする姿勢がうかがえるというのも、このNPO団体の構成員は古くから釜ヶ崎の運動に関わってきた人々であり、地域課題に対し取り組み意欲、ネットワークを多く持っていたからでもある。しかし、スタッフ体制は安定的ではなかった。

建物を24時間体制にするなどサービスを万全にするためには、よいスタッフの確保が何よりも重要であるが、そのためには十分な給料などの保障が必要になってくる。経営者の考え方にもよるが、例えば、建物に借金がなく、家賃がすべて建物の管理のために使えるのであれば、スタッフの人件費もそこから捻出できよう。しかし、建物に借金があり返済しながらマンションを運営していかなければならないとしたら。スタッフひとりを雇い外部の協力を得ながら、なんとか運営していくしか方法がない。スタッフは現場の管理業務をひとり任せられしんどかったのではないだろうか。路木はそんなマンションでもあった。

さて、2008年に釜ヶ崎に引越してきたアートNPOであるNPO法人こえとことばとこころの部屋(以下、ココルーム)が、なぜ2011年から路木の管理業務を担うようになったか。福祉や住宅管理の専門性もないココルームが何を思って、路木に関わっているのかを振りかえてみたい。

ココルームの背景を簡単に紹介する。2003年、釜ヶ崎に隣接する新世界フェスティバルゲートに大阪市の「新世界アーツパーク事業」として参画。まだ評価の定まらない現代芸術の拠点形成事業で、行政の施策としては例のない公設置民営スタイル(家賃、水光熱費のみ行政負担)は話題を呼んだ。事業は10年間の取り組みとしてスタートした。わたしはこの事業に誘われ、詩人として仕事をつくりたいという野心もあったので即座に返事をした。任された元中華料理屋のスペースを呼びかけに応えてくれた友人やボランティアとともに掃除はじめ、油まみれになりながら、はたと公共性とはなにか、と考えこんでしまった。わたしは自分の野心から公共や社会

というものを考えていくことになってしまった。このスペースをアートが好きならば十分に活用してもらおうではなく、いろんな人に使ってもらい、出会いの場になればいいと願って、舞台とカフェをつくり、事業を開始する。がむしゃらに働いた。

そんななか、建物の共有スペースを毎日ただ歩き回っている人がいたり、深夜の帰り道に、段ボールを積み大八車をひく男性、アルミ缶を山のように積んで走る自転車などをみる。大阪市の野宿者のピークは1999年頃で、わたしがホームレスの人々を目にしたのは自然な成り行きであった。けれど、わたしの周りではホームレスの話題などひとつも上がらない。アート業界も大阪に暮らす友達の間でも。むしろ、そのタブーさに違和感を感じた。ほどなくカフェには、釜ヶ崎で活動する支援者たちが訪れるようになった。わたしはコーヒーをサーブしながら、釜ヶ崎の歴史や現状について話を聞くようになった。当時はサポーターティブハウス連絡協議会が立ち上がった時期で、彼らは頻繁に会合を開き話し合いをしていた。その傍らで、高度経済成長のなかで育ってきたわたしが日本の近代化を底辺で支えてきた釜ヶ崎という寄せ場（寄り場）を全く知らなかったこと、そしてそれらの恩恵を受けて育ってきたことを知る。いま自分ががむしゃらに働いたところで、この人たちのお腹は膨れないことに気づいた。かといってこの仕事を辞めて、釜ヶ崎で活動したいとは思わなかった。しかし詩人として、アートNPOとして、寄せ場や野宿の問題にどのようにアプローチをしていいのかわからなかった。しばらくリサーチを続けた。

2004年ホームレスの仕事をつくる「ビッグイシュー」が創刊された。その情報を手に入れると、(アート系の)友人たちにヒアリングを試みた。「ビッグイシューを知っているか」。知る人はなく、その仕組みを話すと「一度買ってみるわ」と答える。すぐにわたしはビッグイシューの編集部に電話をかけ、「雑誌を知らせるイベントをしたい」と話した。賛同するアーティストを集め、ビッグイシューのロゴを受け取るとチラシをつくり、カフェ

やホール、ギャラリーなど、およそホームレス問題など語られないであろう場所に1万枚のチラシを送った。イベント当日、どれだけのお客さんが来てくれるか心配だったが大盛況で、ビッグイシュー販売員のTさんが来て、話をしてくれた。こころうたれる話だった。

そして二回目のイベントにはホームレスの方で舞台上がって表現してくれる人がいないものかと考えはじめた。それは、ときおり釜ヶ崎でみかける光景―大八車をひきながらハモニカを吹くおじいさんが小さなトンネルをくぐっていく―そんな姿に、このまちの「表現」のポテンシャルを感じ取っていたからだと思う。縁あって、野宿生活する詩人、ピアニスト、生活保護をうけている高齢者の紙芝居劇グループ（のちの紙芝居劇「むすび」）が出演してくれた。そのあたりから、わたしたちは釜ヶ崎、野宿、生活保護などといった事柄に関わっていくことになる。

舞台に立つときは、たったひとりだ。代わりに誰かが立つことはできない。わたしはそう考えていて、アーティストだろうと、ホームレスであろうと、ひとりであることは同じだと思っている。ホームレスと名乗り舞台にできることは大変だと思うが、だが決めたのなら、代わりのいないひとり。そう思って、つきあってきた。支援する／される関係とは思っていない。でもマネジメントした側からすると、舞台の本番の日を決めてしまうと、立派に出演を果たしてもらわないと困る。その日までは。そうすると、不安定な暮らしをしている人にケアのまなざしを向けることになる。福祉的なケアではなく（専門性もないので、そもそも出来ない）、自律をひきだすケアだ。ひきだされるケアと言ってもいいかもしれない。感情の取り扱い、依存（共依存）の問題、金銭の貸し借りについて、友情について、どこまで関わるのか、ひとつひとつ、スタッフたちと一緒に考え込み、話し合いをしていった。これらの関わりあいは、人生を深めるわたしたち自身の学びとなるものであった。

そして、大阪市の新世界アーツパーク事業は頓挫し、2007年末にフェスティバルゲートから退去し、

2008年1月には動物園前商店街に拠点を移す。行政のサポートがなくなったわたしたちが高い家賃を払うこともできず、舞台を持つことあきらめスナックだった空き店舗を居抜きで借りカフェを開いた。スタッフは全員退職した。それまで訪れていたアート関係者も来なくなり、6月に第24次釜ヶ崎暴動が起こるが、メディアが取り上げることもなく、釜ヶ崎というみえない塀を感じた。それでもスタッフが少しづつ増え、閉まった店の多い商店街のなかで明かりを灯し店を開けることで、地域の人を中心にいろんな人が訪れてくれるようになった。トラブルが絶えなかったが、噂を聞いて新幹線や飛行機で来てくれる方もあった。秋にリーマンショックがあり、年末年始に東京では年越し派遣村があり、日本が「貧困」に敏感になっていく時期でもあった。日本が釜ヶ崎化したのだろうか。そう考えてみると、釜ヶ崎は困難な状況を生き伸びるための豊かな資源をいっぱい持っている。さまざまな相談窓口、炊き出し、祭り、(いい意味で)おせっかいな人々、そのネットワーク、しんどい人たちがなんとかのびのび生きていけるまち。こんなまちを「行ってはいけない怖いまち」とレッテルを貼られたままにしておくのは、むしろもったいないと思い、2009年カマン!メディアセンターをココルームカフェの向かいに立ち上げた。

商店街にあって、珍しい外観のココルームには、さまざまな問題を抱えた人たちが飛び込んできた。わたしたちは自らを「素人のプロ」と呼ぶ。一緒になって「困ったねえ」と何やら頼りない。とはいえ、落としどころもないとしんどいので、地域内外のさまざまな専門性を持つ組織や人につながってきた。相談者が少し落ちついて、ココルームのカフェに来て顔をみせてくれたりする。そんな形で関わり合ったり、関係を築くなかで真剣におしゃべりしたり、絵を描いたり、俳句をつくったり、物をつくったり、表現し、人々が応答していく。

ココルームでは「生きてることが表現だ」と言う。呼びかける。応答する。循環する。そんな場を釜ヶ崎でつくりたいと思って活動してきた。そのために毎日扉をあけ、場をつくってきた。

ところが、2010年にさしかかったころ、ひたひたと高齢化という問題がしのびよってきていることを感じた。「むすび」のメンバーの死、そして葬送、ココルームに訪れていたおじさんたちがふいに姿をみせなくなり、現れるとすっかり歳をとった顔つきで「退院してきた」と言う。商店街を歩いているおじさんの数が減っている。しんどくて部屋から出られずひきこもりになっていたり、要介護になったり、入院しているのだった。

扉を開けているだけではココルームは仕事にならなくなってきた。死についても、看取り、遺言、葬送、遺品整理など、現実的な問題も気になる。終末に思いを寄せるのは、ココルームがひとりひとりとの関係を切り結んできたからでもあるが、アートが死に関心を寄せるのは珍しいことではない。葬送がアートの究極の有り様じゃないかと考える向きもある。

高度経済成長と同じくして、人の死は病院で医者が認めるものとなった。病院以外の場所で死ねば変死の扱いをうけてしまう。いつのまにか「死」はわけがわからないもの、遠くのものとして生活の場から出されてしまったと思う。今から20年程前、自宅で祖母を家族みんなで看取ったことをとても尊いものとして覚えている(当時はよくわからなかったが)。家族で看取ることが尊いのではなく、紡がれた縁のなかで看取り、死というものを学ばせてもらったと思っている。

後章で述べられる2009年の「むすび」メンバーの死は今も思い出される。お通夜、仕事を終えて深夜に何った。ポトポトと水滴が垂れ、棺が泣いているようだった。冷凍された遺体が空気に触れたためだ。死とはほんとうに水分が奪われるものなんだなとぼんやり思い、手をあわせた。そして翌日の告別式の「むすび」メンバーの悲しくもあるがどこか安心した感じは、やっと見送ることができる気持ち、自分もこうやって仲間たちに見送られるという気持ちなのではないかと思ひ、葬送の意味やあり方を思うようになった。その後も「むすび」事務所を訪れると亡くなったメンバーたちの写真に目がいく。そして、メンバーの何人かが亡くなり人数は減っている

のに、なぜか賑やかに思うことがある。亡くなったメンバーたちがそこにいるように感じるのは、今もみんなが彼らをよく思い出しているからかもしれないし、あの世からみんなを見守ってくれているからかもしれない。

そんな風に釜ヶ崎の死の出来事に触れていくなかで、行政から20数万円の葬祭扶助が支出されているにもかかわらず、火葬場直行というような、葬儀と呼べないような葬儀があることも知る。「むすび」の葬儀のときも家族でないことが理由にスムーズにいかなかった。でもし、住まいの管理者や運営者ならどうだろうか。

さまざまな可能性について考えるのは好きだ。そんなときに、路木が管理人をさがしている、という情報が耳に入った。スタッフと話したのは、このまちで仕事をさがしている人はたくさんいて、その仕事の口をコールドムが奪うのはよくない、むしろ働きたい人を路木に紹介するほうがいいのではないかとということだった。ちょうどコールドムにやってきた若者が仕事をさがしていたので路木まで案内したこともある。けれど若者は地元に戻り、新しい管理人がみつからないまま、管理人は辞めてしまった。一階の使われていない部屋を地域と住人のために開く場にしたいと路木の意向を聞いたり、またその給料の安さになり手がいないことも想像され、スタッフたちはチームであるコールドムで「やってみましょう」という気持ちになった。前年に定款を変更し、高齢者や障害者の生活支援などを事業に盛り込んでいたことも後押しとなった。

しかし、コールドムも苦戦することになる。引き継ぎのない慣れない管理業務、とくに住人同士のトラブルにどのように対処すればいいのか悩む。またわずかな管理費ではスタッフを何人もつけることができない。夜間の泊まり込みもできたらやってほしいと言われ、スタッフが住み込むが、だんだんとしんどくなってくる。スタッフが交代する。担当スタッフの短期入れ替わりは住人の信頼を失う。新しく担当になったスタッフへの風当たりが強くなってしまふ。当初は週に3回、1階のスペースを「えんがわ茶屋 ころろぎ」と名づけ、1杯100円の飲み物やモーニングを用意した。こうした活動も少しずつ定着するころ、住人の死に出会う。詳しくは後述する。

管理体制はかように不安定ではあるが、路木での取り組みが研究され早く社会化されることが、今後、無縁社会が流行語になる日本に必要ではないかと思いはじめた。また現場は他者のまなざしから自らを発見することもある。現場が誠実な研究とともにあることは、うれしいこともある。そんなことを考えているときに石川翠さんから路木をフィールドワークしたいと相談があった。彼女が大学院生になる前からコールドムを訪れ、釜ヶ崎大学という企画で発表していたこともあって、その申し出を快く受け入れた。

このようにして、現場はどのような状況であっても、なんとか運営していくしかないし、そのためにも研究者や地域の人、ボランティア、関わってくれる人、専門家などとともに取り組むしかない。もちろん当事者とも。それに、死というものを前に、当事者でない人などいない。誰もが死に出会い、死を受け入れるのだから。

## 第4章 生活保護のパラドクス——路木の事例をもとに

石川 翠

### 1 はじめに

釜ヶ崎では、労働者同士が関係を取り結ぶさいに「互いの過去に踏み込まない」という暗黙のルールがある。このことは社会学の先行研究では「不関与規範」と呼ばれてきた。この規範が醸成されてきたために、この街はどのような「過去」をもつ人でも受け入れる寛容さをもっている。

近年、「無縁社会」などといわれるが、釜ヶ崎で暮らす人びとの多くは、ここに至るまでに地縁・血縁といった伝統的な絆や、社縁といった結びつきから遠ざかっている事が多い。それゆえに、これらの縁とは異なる関係が釜ヶ崎で築かれることがある。無縁社会といわれる今日の社会状況のなかで、これに抗する実践がおこなわれてきたともいえる。

釜ヶ崎には、簡易宿泊所を生活保護受給者向けの住宅に転用させた「福祉アパート」がおよそ100軒ある。そのなかに入居者の生活をケアする「支援付き住宅」が十数軒ある。今回調査を行った路木もこの支援付き住宅の一つである。路木の住人のなかには、ここに入居する前に支援のない福祉アパートを利用していった者もいる。

生活に困窮する者が生活保護を受給すると、安定した収入と生活拠点を得て安心や安全を手に入れ、多少なりとも新たな社会関係を築いていくことができそうなものだ。だが実際には生活保護を受給し、住居を得た者がしばしば社会的孤立状態になるのである。現在、釜ヶ崎では住民の2.6人に一人が生活保護を受給している。加えて高齢化が急速にすすむこの地域では、社会的孤立の問題が今後ますます深刻になると考えられる。

にもかかわらず、このような現状に踏み込んだ研究はほとんどみられず、研究されても量的統計的なものに限られている。また、社会的孤立研究において貧困層に注目する必要があると指摘されることはあっても質的な研究はやはり少なく、さらには生活保護を受けることによって起こる社会的孤立まで射程に入れた研究はまだみられない。

「釜ヶ崎において、生活保護を受ける者がどのような経験をするのか」、「なぜ生活保護を受けることで社会的孤立に至るのか」。本章は、この問題関心に基づき実施した路木での聞き取り調査の成果をまとめたものである。

2012年6月、ココルームのスタッフに研究目的を伝え、路木の住人への聞き取りの協力をお願いした。それから約3ヶ月間、週に2回、半日のスケジュールで路木の談話室で開かれているカフェのボランティアスタッフをさせてもらいながら住人との顔つきをした。こうして11月頃まで聞き取りをおこなうことができた。

また、ココルームのスタッフの一人でもある路木の管理人が、通りかかった住人に私を紹介してくれるなど、きめ細かい配慮をしてくれ、住人たちと挨拶を交わし、話をするができるようになった。その後、一人ずつ時間をとってもらって談話室や部屋で聞き取りをさせてもらうことができた。



写真1 路木の入居者松本さんの部屋の内部

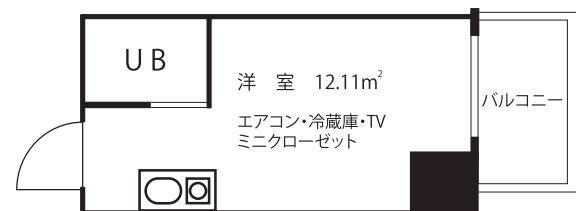


図1 路木の部屋の間取り



写真2 談話室にて一息つくボランティアスタッフと入居者たち

## 2 住人の生活史

聞き取りは7名の住人におこなった。まず、彼らがどのような経緯で釜ヶ崎に辿りつき、生活保護を受給して路木に入居したのかをみていく(名前はすべて仮名)。

### 東さん(70代)

東さんは電話局に勤める父と専業主婦の母親の比較的裕福な家庭に生まれた。商業大学に進学したが、「パチプロ」をやりはじめて退学した。家を出てから行くところもなく、神戸を拠点とする暴力団に入った。偽名で7、8年間続け、組同士の闘争のときは日本刀をもって真っ先に走って行った。「キョウダイ」とうまくいかず足をあらった。

一時は実家に戻ったものの、「仕事せえ」と母親から口うるさく言われて居心地が悪くなり、行く先も決めずに出た。野宿をしながら歩いて東北を放浪し、道端で休んだり風呂代わりに川に入ったりした。道中では地元住民に何度も声をかけられ、食べることができないほど大きな握り飯をもらうこともあった。3日くらい何も食べられなかったこともあったが、この放浪から帰ってきてからは「喧嘩もせんようになった」という。東さんは今でもあのときに世話になった人たちにお礼を言いたいと思っている。

それから釜ヶ崎にやってきた。金がなくなっただけ日雇い労働をした。4トントラックが止まり、次々に労働者が乗り込んでいく。その様子が滑稽にみえて「漫画みたいだな」と思わず近くの手配師に言った。ベテランの指導者は労働者の扱いがうまいが、若い指導者のなかには横柄な態度の者もいた。自分よりもひとまわりもふたまわりも年上の労働者たちをあごでつかう態度を叱ったこともあった。

手元に現金があるときはセンターの1階に集まっている労働者や野宿者たちに酒を奢った。たまに自分も奢ってもらうこともあった。自分よりも若く野宿をしていた人たちに、弁当を配ることもあった。「あんな一度やったら何回でもたかりにくるぞ」と知人に諭されたが、後から彼らが涙を流しながら弁当を食べていた、という話を聞いて、「金あるときだけ。金ないときはどうもできひんしな」とたまに持っていた。

釜ヶ崎で暮らし始めて、「大阪ってこんなええところあったんや」と感じる。三角公園に行けば炊き出しをして



いる。夏は外で寝て、冬はシェルター、お金があればドヤ（簡易宿泊所の労働者特有の呼び名）に泊まる。それだけではない。ふるさとでは、隣近所に「あそこの息子は放浪してる」などと言われるが、釜ヶ崎での暮らしはそれと対照的だ。「人が何しても、道に寝とっても誰もなんも言わん」と、どんな暮らしをしても放つておいてくれる、自由気ままにできる雰囲気には惹かれた。

50代後半のときに脳梗塞で倒れて入院し、支援者の勧めで生活保護を受給し始めた。路木に入居するまでは簡易宿泊所転用型の福祉アパートに住んでいたが、街のなかで知り合った人から金をせびられたり、部屋にありがこまれるようになったため、支援者に相談して路木に引っ越すことにした。

#### 多田さん（70代）

多田さんは8人きょうだいの6番目に生まれる。中学を卒業して集団就職で離島から大阪に出てきた。家電製品の配送をしていた。千里ニュータウンにカラーテレビを配送したこともあった。その後、製紙工場やパチンコ屋など仕事を転々としている。

多田さんが23歳のときに母親は亡くなっている。父親の法事で帰省したときは、きょうだいそれぞれ家庭をもっており、釜ヶ崎に住んでいることを知っていた姉に「帰って来るな」と言われて、それ以来帰っていない。

40歳になった頃、日雇い労働をするために釜ヶ崎にやってくる。しかし、それまで配送業に従事してきた多田さんは土木作業をうまくこなすことができず、仕事場では他の労働者と付き合うことはなかった。金があるときはドヤに泊まり、ないときはあいりん総合センターの1階部分で寝たり、四天王寺の境内や日本橋のあたりで野宿をした。1990年代終わり頃、仕事がなくなり大和川で野宿を始める。そこではすでに10人ほどが野宿生活をしている。日雇い時代の知人に木材をもらって小屋を建てている人もいた。当時の月収は「特掃」による1、2万円と

アルミ缶回収による2万円ほどで、それで生活を続けていた。また、ビデオや本などを売る露天商もしていたが、2011年1月に規制が強まり、摘発されたことを機に断念した。そのとき野宿生活は15年ほどに及んでいた。そして70歳手前で生活保護を受けることになった。

#### 鈴木さん（70代）

鈴木さんは関東の農家の長男として生まれた。中学を卒業するとすぐに家を出て建築現場で働きます。実家には15歳のときに家を出て以来一度も帰ったこともなく連絡したこともない。生活保護を申請したときに役所から弟に連絡が入ったと思うが、連絡がついたのかどうか詳細はわからずじまいだ。

関東の寄せ場である山谷や寿町で働き口を探し、20歳になったときに大阪の噂を聞いて、釜ヶ崎にやって来た。その後も北は岩手県から南は福岡県門司港まで全国に出張して働いている。新潟県の柏崎原発で鉄筋の仕事をしたこともある。富山県に出張したときは、景気の良いときで、旅館でたくさんの料理が出てきて、ビールを飲みながらでは全部を食べきれなかったと思ひ出を語る。

不況で仕事が少なくなってくると出張がなくなり、50代後半で釜ヶ崎にとどまる。その後も白手帳（日雇い労働被保険者手帳）を持って65歳まで働き続けた。その頃にアスベストを使った現場で働いたことが原因で肺が悪くなり、2ヶ月間入院することを余儀なくされた。しかし、鈴木さんは孫請け以下の会社に雇われていたため、労働環境と病気の因果関係の証明ができず、労災認定には至らなかった。

#### 松本さん（60代）

松本さんは1950年代に地方で長男として生まれる。高校を卒業後、先輩のついでで鉄工所に就職。2年で退

職したのちに地元に戻り、電気製品の運搬など小さな会社を転々とする。30歳頃に親戚にすすめられて見合い結婚し、3年後に娘が一人できる。

しかし、それから数年後に頸椎損傷になり、首から次第に足も体も動かなくなってしまった。一度手術を受けて体は動くようになったが、以前のように働くことはできなくなった。何年かの間、家で休養していたものの、入院費もきょうだいが負担してくれ、「がんばって復帰して」と言われたことが精神的に負担になっていた。近所の人から噂をたてられることでさらに居づらくなり、娘が中学生になったときに鞆一つだけで逃げるように家を出てきた。「もう、どないなってもええわ」という覚悟のもとだった。それ以来、妻にも娘にも会っていない。

実家を出て電車を降り立ったのは天王寺駅だった。駅周辺に数多くの段ボールハウスが並ぶ光景に驚いた。野宿者数がピークに近い1999年のことだった。大阪駅に移動したが、居眠りしている間に鞆を盗まれてしまった。鞆には娘の写真、会社の慰安旅行の集合写真、友達の電話番号を書いたノートなどが入っていた。ポケットの中のわずかな小銭で天王寺まで戻った。

野宿生活のなかで、週に一度必ず割引になった寿司を持ってきて、寝ている人のところには起こさないように枕元に置いていく男性や、食べ物や、食べ物の差し入れや少しのお金を渡してくれる外国人観光客などを覚えている。

体調が悪く、働くことができなかった松本さんを助けてくれたのは、隣で野宿をしていた野村さんだった。彼は自分が調達した食料を松本さんにわけてくれた。野村さんと同郷であることがわかり、それ以来出身の高校の話をすることもあった。

一度だけ数十時間かけて地元まで歩いて帰ったことがあったが、家に帰ることはできず、再び天王寺に戻ってきた。天王寺駅で生活する間に、周囲の人に釜ヶ崎のこと教えてもらい、三角公園の炊き出しに行ってみた。最初は「こんなところあるんや、怖いところやなあ」と思った。何度か足を運ぶうちに、「気楽で気いっかわんでもいい

し、ええ街やなあ」と思うようになり、食べ物がないときには炊き出しに並ぶようになった。

野宿をはじめて1年後、真冬に雨が降るなか倒れて救急搬送される。肺炎だった。最初に到着した病院から2度別の病院に移され、大阪府の南にある病院で入院する。3ヶ月ほど経って少し回復し、支援団体のスタッフにすすめられた生活保護を受給することした。50歳の誕生日を迎えたときのことである。

約2年半西成区の小さなアパートで暮らした。まだ稼働年齢であったため、ハローワークに通うなど、一定の就職活動をしたが、仕事は見つからなかった。次第に「自分よりも若い人で体悪い人でも働いてんに、金（保護費）もらうの悪い」という思いが強くなり、生活保護を辞退して再び野宿仲間のいる天王寺に戻った。

数年後、再び体調を崩し、2度目の生活保護を受けることにした。今度は新今宮駅の近くのアパートで暮らし始めるが、約1年後に再び天王寺の暮らしに戻る。

それから数年後、三角公園で炊き出しを食べているときに、頸椎損傷の後遺症でふらついて足に力が入らなくなり倒れ、入院することになった。退院後、釜ヶ崎の住所不定者を対象にした相談機関「大阪市立更生相談所（市更相）」を通じて無料の一時宿泊施設に約1週間入所することになった。その期間中に施設スタッフが路木を勧めたことがきっかけで入居するに至った。

#### 林さん（50代）

林さんは近畿地方の農村部に3人きょうだいの次男として生まれる。父親は大工をしていた。寮制の高校に入学し、卒業後も一人暮らしをしながら工務店に就職して大工を目指した。道路や河川などの立ち退きによる家屋の移動工事をした。特殊な工事で会社の経営状態もよかったため給料もよく、月に30万円ほどだった。10年ほど続けたときにけがを負ったことで、大手鉄鋼会社の下請け会社に転職した。日給制で1日8千円だった。そこで

も安全靴の靴先の鉄板が途切れたところに鉄鋼の板が落下して複雑骨折をした。40針を縫う大がかりな手術となったが、完治するまでに退職した。その後、運送業に就いたが、時間に間に合わせるために急いでいたところ、積載量超過とスピード違反で免許取り消しになる。トラック運送の規制緩和のために競争が激化した頃のことだった。職を失ったため、求人広告をみて派遣会社に登録すると、長野県の飯場に配置された。現場で鼻を骨折し、診察を受けると脊椎も悪くなっていることが判明した。思い返すと手が上がりにくかったり、体が動きにくくなっていった。そのため、大阪に戻って大阪社会医療センター付属病院（現）で入院することになった。

このときに生活保護と障害者年金を受けはじめた。入院は180日間続いた。退院後は車椅子での生活になることもわかっており、退院後の行き先がなかったためだ。その間に一度だけ兄が見舞いにやって来た。会うのは30年ぶりだったが、それ以降は会っていない。

路木が建ってすぐの頃、介護事業所のスタッフにバリアフリーだと勧められて入居した。3年前に父親が亡くなった。親戚が集まるので寝る場所がなく、また、車椅子の世話もみられないと断られたため葬儀には出席していない。路木の林さんの部屋には父親の写真が置かれている。

#### 井上さん（60代）

井上さんは4人きょうだいの末っ子として四国の田舎で生まれた。高校を卒業後に運送会社に就職した。働き始めた頃に喧嘩で目を怪我したが、運転助手として3年間勤めあげた。ギャンブル好きの父親に似て、井上さんもよく給料の多くを競艇につきこんだ。50代のときにギャンブルと酒で300万円の借金をしたことがもとで警察沙汰になり、家族と仲違いして地元を離れ大阪にやってきた。頼る人もなく、命を断とうと淀川に入水した。頭まで水につかるうというところを、偶然近くにいた人に引き留められた。その後、拘置所に1ヶ月半拘留さ

れる。拘置所は換気扇もなく10人ほどの狭いところで、じっと座っているか立っているしかなくて、みじめな気持ちになったという。その後、保護観察所に移動し、保護司に「西成に行きなさい」と6千円とテレフォーカーを手渡される。

周囲の人に尋ねると市更相の場所を教えられ、相談しに行く痛めていた足の診断をするために大阪社会医療センター付属病院に入院する手続きをしてくれた。2ヶ月半の入院後、保護観察官と相談ののち、救護施設に入所することになった。館内の拭き掃除も丁寧にやった。救護施設からの恒例の団体旅行では四国のふるさとを提案し、皆で行くことになった。地元で知り合いに会うのは気まずいと、実家は行くことはできなかった。それでも懐かしい気持ちになったと振り返る。

3年後に路木に入居した。救護施設を退所した今でも週に一度には屋上菜園の手入れなどを手伝っている。救護施設では退所した人びとに居場所を提供する「通所部屋」をもうけている。井上さんが加藤さんと知り合ったのもこの部屋である。一緒にごはんを食べに行ったり飲みに行ったりしている。最近では加藤さんが肝臓を悪くしたので、外に行くより家で飲むほうが増えた。井上さんも糖尿病なのでお酒は控えている。

昨年、社会保険事務所を調べると、運送業をしていたときに加入していた厚生年金が65歳から受給できることがわかった。その不足分を生活保護費で補っている。

毎朝6時頃になると路木の前の花壇に水をやる。他の住人に頼まれたことがきっかけで始めて、今では花に水をやるために朝起きようという気持ちになっている。9時半頃に朝食をとって、次は救護施設の植木に水をやりに行く。また少し休憩してから散歩をする。大阪に暮らす姉の手配で母親の遺骨が永代供養されている寺を散歩コースにしている。散歩に行き、手を合わせると少し落ち着く。ときどきふるさとに帰りたいと思うことはあるが、知り合いもできた今の暮らしには慣れたという。

### 田中さん（80代）

田中さんは戦前に生まれ、終戦後に父親が映画館の経営をはじめた。当時、映画館はめずらしかったため客は多く、家計は安定していた。田中さんも家業を手伝いながら高校、大学と進学した。30代のときに地元の女性と結婚し、娘が二人できる。しかし、49歳のときに映画館が廃業になり、警備保障会社に勤務しはじめる。出会った女性と「駆け落ち」をして仙台までいった。再婚してしばらく一緒にいたが、女性の両親に家の格が違うと反対されたため、離婚して地元に戻ってくる。地元で再び警備会社に勤めた後、従弟の経営する料理店で働いた。しかし、60歳のときに店が倒産する。

その頃には両親はともに他界していた。妹は実家を出て医者になり、姉は大企業に勤める夫のもとで専業主婦をしていた。実家に帰ることができず、大阪駅で野宿生活をはじめた。警備の仕事をしていたこともあり、「あのときは俺らは（野宿者を）追い出す側やったんや」と思い出すこともあった。市内の野宿者の多い場所を移動しながらの生活は8年間続いた。

野宿生活のなかでは、さまざまな場面で助けをもらうことがあった。田中さんは肉体労働の経験はなく野宿生活を始めた年齢も60歳を過ぎていたため日雇い労働はほとんどできなかった。同じ場所で野宿をしていた「おやっさん」が仕事を見つけてきてくれた。大阪駅で人を集めている手配師は条件がさらに悪い飯場に連れて行くことが多い、田中さんの場合もアスベストの吹付工事だった。それでも肉体的に負担はあまりかからずに「これならできるやろう」と「おやっさん」を選んでくれたものだった。

アスベストの仕事期間が終わると中之島に移動した。ここでは「アルミ缶集め大阪一の親方」と一緒にアルミ缶の回収をして収入を得た。「親方」がルールを教えてくれ、朝5時から夕方5時まで共同で集めにいった。マンションや大型施設などに目星がつけてあり、2mほどあるアルミ缶の山をベニヤ板で作ったリヤカーに積み、

梅田から阿倍野区の買い取り業者のところまでひいて行っていた。親方は口数の少ない人で、ふるさとや家族のことなども聞いたことがなかった。

親方のようにアルミ缶回収だけで生計を立てている人もいるが、田中さんは「要領よやらかなあかん」とさまざまな工夫をして食料を調達していた。教会から衣料品を支給されるときに、あえてスーツを選んで着た。スーツ姿だと声をかけられることがあり、鉄板焼き屋のおばさんが「食べていき」と店で食べさせてくれたり、飲食店の店主が料理屋に連れて行ってくれることもあった。

68歳のときに支援者に声をかけられて生活保護を受給することにした。一日をどうにか生きのびる生活は充実感があったが、ぎりぎりの生活は苦しいこともあり、受給をすすめられたときは、「ほんとはこっから出たかった」とも思った。その後サポーターティブハウスに入居するが、他の住人との関係が悪くなり支援者に紹介されて路木に引っ越してきた。

### 3 路木での暮らし

#### 東さん——住人との緊張関係と緩和

東さんは20代の頃から仕事を転々とし、その過程で家族との関係が希薄になっていく。暴力団で過ごしたこともあり、いつまでも定職に就かないと、近所の人にならざるを話してられ、地元にも居づらくなっていく。その経験があったため、釜ヶ崎での暮らしは誰にもとがめられずに暮らしていける「天国」のような場所だと感じた。

東さんは40代後半の1990年代初めに釜ヶ崎にやってきた。金銭がなくなったときだけ日雇いをし、稼い

だ金銭で生活していた。「俺はもうあれやで、知り合いはつくらんねん。付き合うとなあ、なんやかんやめんどくさいことも起きるからな」と話す東さんにとって、生活保護を受給する以前のドヤ暮らしをしていた頃の付き合いは心地よいものであった。当時の釜ヶ崎での日雇い労働者たちとの様子をこのように再現する。

（釜ヶ崎を歩いていて他の労働者と出会い）氣いおうて、わー言うて一杯飲んで、さよならー言うてな。何日ぶりとか何ヶ月ぶりとかで、またぱっと会うときもある。「おお、やるか」「ああ、やるか」って言うてな。「ああ今日も金ないしな、自販機行こう」ってな。自販機の前行ってな百円玉3枚か4枚で3、4本買ってやな、道端に座って酒飲んで。それで2、3杯飲んでわーわわーわ言うて。そーいうのが最高になあ、好きとか、こっちの人間の気性が知らんけど、後腐れのないな。あくる日会うとか3日後に会うとかも何も約束はないんやからな。みんなすつきりしてるいうか。あとは「もう帰るわ」ってそれで帰ってく。

名前も知らない相手と酒を酌み交わし、次に会う約束もすることなく別れ、同じ顔を見かけるとふたたび「2、3杯飲んでわーわわーわ」と盛り上がる。出身や、生い立ち、家族のことなどは互いに知らず、尋ねることもしなかった。東さんはこのような「後腐れない」関係を心地よく感じており、「その場限りの付き合い」を思い出しながら意気揚々と語った。

「西成」の気楽さを語るときには実家にいたときの息苦しさと対比して語られる。

ほんまこんなええとこないわ。天国やわ。家におった頃は、やいやいやいやいやい近所の人もうるさいし、付き合いもあるし。西成来たらそんなが全然ないやろ。ほんっと、こんなええとこないああって。

話したり一杯飲んだりしたりはするんやで。ほんでも誰もそんなこと言うたりせーへんもんね。そういうことと一切聞かへんやろ。他人のことも何とも言えへんからな。

こうした「一切聞かへん」「他人のこと何とも言えへん」という不関与規範があったために、釜ヶ崎での関係は成立していた。現金がないときはシェルターや路上で寝泊まりしたりしながら、その生活は十数年間続いた。

60歳を過ぎたときに脑梗塞で倒れたことをきっかけに、支援者の提案を受けて生活保護を受給することとなる。それまではドヤやシェルター、路上で寝泊まりをしていたのが、病院を退院後には福祉アパートへ入居することとなった。路木に引越してくるまで4、5年間そのアパートで生活していた。

そこでは生活保護を受給したことによる、他者との緊張関係が生まれる。今までのように外を出歩いて顔見知りになった人々が、東さんの部屋まで酒を持って来て大騒ぎをした。酒の代金も東さんが出した。

前のアパートのときも、ツレに「あっこに住んでる」ってこと言うったんや、そしたら「おい、飲もうぜ」って一升瓶手にぶらさげてくるんや。「隣近所に迷惑やからやめておこう」って言うてもおさまらへん。

このようなことが何度か起こり、金を持っていることと、近所にも迷惑となるため、路木に引越しすることに決めた。

もう「ここに住む」って言わへんで、前のところからほんっとここ来たんや。外もうろろせーへん。

東さんが彼らに今の住所は教えずに、「ほんっとここに来た」のは、できる限り「後腐れのない」関係性を保つためだったといえる。彼らに会いそうな場所には出歩かないようにした。

生活保護を受給している者と、していない者の間には、経済的な差が生まれる。それゆえ、常に奢る側に立つことになる。しかし、これまでの関係性のあり方のなかでは、金を持っているにも関わらず奢ることを「断る」ということはルール違反となる。そうして「断る」という選択肢がないため、「避ける」という行為を選択することが多い。

東さんの入居後に生じた関係性の変化とは次の通りである。生活保護費が手元にある状態でこれまで通りに外を出歩いて「後腐れのない」付き合いを実行しようとする、金を持っているほうが奢るために、奢ってくれと言われると奢る立場となる。しかし、今月分を使い切ってしまうことを危惧し、断りたいと思ったとしても断ることはできない。これまでは金があればある分だけ使うといっても限度があり、「もう帰るわ」と付き合いを終了することができたが、帰る場所も特定され、金を持っている方が持っていない方に奢ることが内面化されていくため「断る」ことはできない。こうして「避ける」という選択肢を選ぶこととなるのである。つまり、生活保護を受給したことが、アパート外の他者との関係性を変容させ、東さんを「後腐れのない」付き合いから遠ざけるように作用したのである。

その後、東さんはケースワーカーの判断で西成区社会福祉協議会の「あんしんさぼーと（日常生活自立支援）<sup>※</sup>」の金銭管理を受けることとなり、東さんの手元に現金はなくなる。こうして「断る」という選択肢を選ぶことができるはずであったが、東さんは「後腐れのない」付き合いからますます遠ざかることとなる。金銭管理の担当者とのやり取りを次のように再現している。

今まで好き放題やってきたんやからな。それがこないしてね「はい、ごはん」「はい、ごはん」って弁当渡される。「酒飲みたい」って言うても、スタッフが「あっ、酒はだめ」「これはだめ」って止めるから、なんにも俺のしたいことできひんやろ。ただ生きていくだけ。……（外を歩いていて）あそこのうどん、うまかったなあ、食いに行こかなあ、って思っても銭がない。せやからなんにもできひん。「何したいの?」「なんか欲しいもんある?」って言われたって、困るわけよ。「あんたがしたいこと言いなさい」って言われても、できひんのや。

「後腐れのない」付き合いは、ある意味で現金のルーズな使い方によって保たれてきた。スタッフは東さんの希望の品物を買ってしようと「なんか欲しいもんある?」と尋ねる。しかし、何か品物を購入するために現金が必要なのではなく、現物支給では補えないような「後腐れのない」付き合いをするために、手元にある程度現金が必要なのである。「断る」選択肢を選ぶことができる状態になったにも関わらず、担当者との認識の齟齬によって全額が管理されることになってしまう。また、自身が保護を受けているため、他者から奢ってもらうことはできず、結局付き合いは実行できなくなってしまう。つまり、ここでは別の方向で他者との関係性は変容させられることとなり、「後腐れのない」付き合いを遠ざけるよう作用したことになる。

一方で、東さんは担当者に直接文句を言うことはない。それは生活保護を受給することに対して負い目を感じていることがひとつの要因となっていると考えられる。

……一番嫌なことを、今やっとなのやな、俺。だから生活保護受けるのはほんっまに嫌やってん。やろ。

自分働かんで、何もせんとな、暮らしていくのが嫌やったんや。自分仕事してないやろ、何もしてないやろ。……自分が仕事して、金が入ってきて、飯を食い、酒も飲めるんやから。それができひんのに、生きててもしゃーないやろっちゅって。……ただ空気が吸って生きてるだけや。なんにもできひんやんか。人のためにもならん。生きてたら人のためになるんちゃうくて、人に迷惑かけてるんやでって。

これまで金がないときには食べ物や酒をもらったりしたこともあったが、自分も金があるときは奢っていた。パチプロや暴力団、日雇い生活など、「自由に生きてきた」が、どの場面でも自分で稼いだり、何かをしてもらったときにはお返しができていた。それが、「自分が仕事をして、金が入ってきて、飯を食い、酒を飲める」生活から一変、「働かんで何もせん」と生活することとなる。このことに耐え難いほどの負い目を感じるようになった。生活保護を受給していることが負い目となり、現状に対して担当者に不満をぶつけることはしない。こうして、「その場限りの付き合い」から遠ざける現状に不満をもつものの、受給に対する負い目の影響のため、現状を変えようとするのはしない。

東さんは路木に引越してきてから、昼の2時から3時の間に散歩をすることが日課となっていたが、足の調子が悪い日や雨の日には、散歩をする代わりに路木の談話室を利用するようになった。

ちなみに、東さんの1日は次のような流れである。11時頃に昼勤のヘルパーが来るまでに起床し、食欲のあるときはヘルパーが買ってきた弁当を食べ、ヘルパーが掃除や洗濯をしている姿を見ながら壁にもたれてベッドの上で話しかけられると答える程度で静かに座っている。ヘルパーは1時間ほどで帰り、その後も同じ体勢でしばらくくいる。夜中に寝つけず、1日中テレビをつけっぱなししているため、うつらうつらしていることもある。3、4時間後に夕勤のヘルパーがやって来て、食欲があれば弁当を食べる。散歩をする日は近くの公園に行き、野宿

をしている人に弁当を渡すこともある。

管理人に声をかけられたことがきっかけで、6月頃から談話室を利用しだし、呼び止められると「ほなコーヒーもらっていいかな」と中に入っていくようになった。同席になった他の住人と話すことはなく、コーヒーを少しずつすりながら座っている。

こうしてほぼ毎日談話室に来ていた東さんが、8月の後半頃からは管理人に声をかけられても入って来ず、すぐに部屋に戻るようになった。その理由は、「『こちゃこちゃ』と言うてくる奴」がいるからだという。『こちゃこちゃ言うてくる奴』とは玉木さんのことである。彼は路木の住人ではなく、釜ヶ崎から自転車で10分ほどのアパートで生活している元日雇い労働者である。路木の談話室は外にも開かれているため、最近ではほぼ毎日自転車で通って来ている。陽気でスタッフや住人によく話しかけている。用もなく名前を呼んだり、声をかけたりすることもあり、東さんにも「東さん足の爪切れよ」と何度も言っていた。その場では「ああ」とだけ返事をしていた東さんだが、「文句言うたらあかん、俺も言いたいんやけど、あんまり言うたらな、昔の癖が出たらあかんからな」と言う。これまでに喧嘩をして関係が悪くなることもあったようで、トラブルになる前に避けることにした。東さんは玉木さんのことを同じ住人だと思っており、談話室を利用しないということも、アパート内でのトラブルを避けようとする行為であった。これまでのドヤ住まいのように住む場所を変更することが容易でないために自分が身を引き「避ける」ことを選択した。

こうして、定住することによって住居内で緊張関係が生じ、トラブルを避けるために談話室から撤退するといふように新たな関係を結ぶ可能性を狭めたのである。

しかし、1ヶ月ほどのちに管理人に声をかけられると、談話室のなかに入ってくることはないが、談話室の入り口付近の廊下に置かれた椅子に腰かけるようになった。椅子が置かれているのは通路の玄関横であり、エレベー

ターまでの住人の通り道となっている。東さんは散歩ができない日は人が出入りするのを眺めながら1〜2時間この椅子に座っている。

「「こちゃこちゃと言ってくる奴」との緊張関係によって新たな関係性が断たれたが、こうして、他者とのほどよい距離の関係を模索することになったといえる。談話室の設置に加え、管理人の存在によって引き起こされた行為であり、支援付き住宅の効用といえる。

こうした支援付き住宅の効用を確認できる事例はもう一つある。東さんの隣人が隣の部屋のテレビの騒音で迷惑をしていると管理人に苦情を申し立てたことがあった。管理人がヘルパーに確認してみると、東さんは夜間には必ずイヤホンをつけてテレビを見ていることを知っていたので「東さんはとても気をつかう人なので、そういうことはしれないと思う」と管理人に弁解した。こうして、東さんのことをよく知っているヘルパーと管理人の仲介によって、住人とのトラブルを避けることができた。管理人のいないアパートであれば、住人同士のトラブルの元になりかねない状況であったが、管理人の存在とヘルパーとの連携によって、緊張関係に発展することがなかった。

このように、支援付き住宅においては、管理人が住人間の緊張関係を緩和したり、防止したりする存在となっていることがわかる。

#### 多田さん——アルミ缶回収と猫の餌やり

多田さんは毎日遠出をしているため、路木に戻って来る頃には疲れて、少しお酒を飲んですぐに寝てしまう。2時間ほど昼寝をして、夕方頃に起きると、散歩に出かける。特掃のときに知り合った人とは、今でも外で出会う。特掃は登録をすると、輪番制で番号が振られて数人グループで区切られるため、行くたびに同じ人と顔を合わせていたという。とはいえ、顔見知りには4、5人程度で、名前もどこに住んでいるかも知らない。会っても話すのは「5

分か10分くらいや。向こうかて、かなわんがな」と、負担にならない程度の言葉数をかわすのみでその場を去る。毎回の会話の内容は、体調を尋ねるなどのあたりさわりのない挨拶くらいで、個人的なことを話すことはほとんどない。

生活保護を受給し始めたばかりであり、15年ほど野宿生活を続け、アパートでの生活は1年足らずである。10年ほど前に特掃で知り合った人が先に受給することになり、それ以降も特掃とアルミ缶回収で生活を続けていた多田さんだったが、彼の強い勧めで自身も受給するようになった。けれど、「わしもな、受ける気なかったもん」と受給することには抵抗があった。

多田さんは第2、第4の週は月曜日から土曜日、月に12日間はアルミ缶の回収を続けている。毎朝4時に路木を出て行き、一日中決まったルートで自転車でアルミ缶を集めて回っている。回収分を清算して得た収入は毎月、役所のケースワーカーに自己申告する。申告すると支給される保護費からその分が差し引かれることになるため、アルミ缶回収の収入があっても全体の金額はさほど変わらない。したがって、生活費の確保という面では必要性が低い労働といえる。しかし、このアルミ缶回収をおこない、これまで通りに働いて生活することで、社会参加の意識をもって尊敬を保っていると推察することができる。生活保護を受給している現在の生活に対して否定的な自己評価を下しており、その感情のなか、自尊心を維持するためにやっている行為と考えられる。

多田さんのアルミ缶回収にはもう一つ重要な点がある。このアルミ缶回収で得た収入は、猫の餌代となっているということだ。毎朝自転車を1時間こぎ、以前野宿をしていた場所まで行って餌をやっている。雨で濡れたリ、カラスやハトに食べられることを防ぐために、数日分まとめて餌を置くことはせず、毎日一日分を持って行く。3つで170円ほどの安売りの缶詰。ペットフードだが、乾燥ペットフードは栄養失調になると気を使っている。猫は増え続け、現在では8匹になっているため、一回で500円ほどかかる。



この猫は、かつて隣のテントで野宿をしていた人が飼っていたもので、多田さんは彼が実家に戻る期間だけ世話をするはずだった。しかし、依頼した人はそのまま帰ってこず、それ以降、餌やりは3年間続いている。

彼とはあいさつをしたり、たまに缶コーヒーをあげたりもったりする程度だった。それでも、「毎日行くで。ほっとけへんやん。わしは頼まれたんやし、その時点では頼まれとったんやさかい」と、猫の世話を頼まれたことは信頼されている証しとして受け取り、約束事を守っている。

支援者に猫の処分をすすめられ、自分自身もそうしたほうがよいと話す。

猫処分したら缶(＝アルミ缶回収)行かんでええわけや。そやからな、NPOもな、猫処分せえ言うわけや。役所もっていけ、って。そうや、処分せなあかん。……いや、処分したほうがええ。

しかし、処分したほうがよいと口にしながらも、翌日も餌をやりに行った。生活保護費ではなく、アルミ缶回収の収入という自分自身の力で、約束を守り通そうとする。

経済的には必要ないことと認識しながらも、アルミ缶回収を継続し、しかもその稼ぎを猫の餌に費やしている。生活保護を受給することに負い目を感じるため、受給以前の暮らしぶりを継続しようとしていたり、昔の約束事を守り続けたりすることで、自分というものを維持しようとしているのではないだろうか。それほど、生活保護を受給するということは「分相応」な生活をしなければならぬという思いと、これまでの自分の暮らし方との間で葛藤を感じさせるといえる。それは結果的に、受給生活において新たな人間関係を築くことを難しくさせ、さらには孤立の可能性を高めるのではないだろうか。

#### 鈴木さん——将棋盤上の付き合い

もちろん生活保護を受給すると全員が関係を断たれるわけではない。鈴木さんは50年間続けてきた日雇い労働時に知り合った知人と今でも関係が続いている。彼とは15年前に釜ヶ崎にとどまったときに日雇い労働の現場で知り合い、将棋をするようになった。現在も毎週月曜日と金曜日の午前中に鈴木さんの部屋にやって来て、朝9時から12時まで将棋をするのが習慣になっている。知人は近くのマンションに住んでおり、彼の部屋から鈴木さんの部屋が見えるため、明かりがついていることを確認してやってくる。日雇い時代から使っている将棋盤をベッドの上に置き、勝負は始まる。将棋をしているときは、「おねんね(成ること) しょ」「角ちょーだい」「あ、また王手だよ」と、将棋盤の上で起こっていることだけが会話になっている。そうして休憩もせずに勝負は続く。そして、4、5回戦終わると「さあ昼ごはん食べよ」と彼はさっと帰っていった。10年以上の付き合いであるが、昼ごはんを一緒に食べることはない。「知り合いと飯食いに行くの嫌いだから、ほとんど行かん」という。

このように、二人の関係は目の前の将棋についての話のみであり、「将棋盤の上の付き合い」である。他の話はほとんどすることはない。

新潟の柏崎。鉄筋の仕事してた。原発の話は滅多にしないね。そういうこと言ったら、頭おかしいんじゃないかかって思われちゃう。なんもわかかんねーから。……将棋は無言だよ。話したらあかんねん。過去の話とかそういうことは、あんまり聞きたくないからね。話したってしょうがないんだ。

鈴木さんは原発で働いたことがあるため、原発事故のニュースを見て思うところがあるが、ニュースの話など

をすると、「頭おかしいんじゃないか」と思われるだろうと話をしたことはない。自分自身について話もすることはない。「話したってしょうがない」と思っている。

「将棋盤の上だけの付き合い」は徹底している。知人は鈴木さんの体調が悪いことを以前から気付いており、今年の夏の入院日も知っていたが、見舞いに行くことはなかった。部屋の明かりがついているのを見て、退院したことを知り将棋を再開してきた。

鈴木さんは彼と将棋をすることについて、時間をつぶすためだと言い、「将棋できてもいいことないよ。好きとかじゃない。まあ特にすることないし」と消極的な言い方をする。それでも、何も話さなくても誰かと時間を過ごすことができ、部屋の明かりを確認されることも嫌ではない。

この二人の関係は、生活保護の受給とは関係なく継続している。鈴木さんが5年前に生活保護を受給し始めたのに対して、知人は2年前に受給した。その間の3年間は生活保護受給者と日雇い労働者として立場が異なっていた。それでも、関係が継続していたのは「将棋盤の上の付き合い」であるためだと考えられる。現実の日常生活では経済的な格差が生じることとなるが、将棋盤の上では対等な関係であったため、安心して関係を継続することができた。生活保護受給後に関係を断つ行為を選択し、孤立する可能性もあるなかで、孤立の方向に向かわないための実践ともいえる。



写真3 ベッドに腰かけ将棋をさす鈴木さんと知人

釜ヶ崎の街のなかでは「あいりん総合センター」の一階で将棋盤を囲む人の輪など、将棋をしている姿が多くみられるが、鈴木さんらと同様の関係性が存在していると考えられる。また、コールドが習字や詩の作成などアートを媒介とした活動をおこなっており、このような文化的な活動が、この街では他者との関係を保ったり築いたりするうえで重要な役割を担っているともいえる。

#### 松本さん——二度の生活保護の辞退と談話室での知り合い

「いつ死んでもええわ」と思って野宿生活を始めた松本さん。現在では路木での生活を送っていることを「幸せ」という。路木では談話室を積極的に利用し、他の住人とも関係を築いている。そんな松本さんであるが、路木にくるまでに二度、生活保護の受給をとりやめて野宿生活に戻ったことがある。

やっぱり、はじめに（保護費を）もらうようになった時はまだ50すぎで若かったやろ。だから、そんなしとって、ええんかなって。自分と同じように体悪い人でも働いてる人がようけいるのに……

持病を抱えていた松本さんだが、症状が少し回復した頃、ケースワーカーに就労を目指すようにと指導された。そこで、ハローワークに通ったが就職先を見つけないままだった。稼働年齢での受給という負い目に加え、傷病が回復したのだから働かなければならないという意識と、就職活動がうまくいかない状況が続くことで、生活保護の受給に関して負い目が増幅していったのではないかと考えられる。

彼は、若いときに家族をおいて故郷を出てきたのだが、そのときも同じ心境を抱えていたようだ。

入院しても金があらへんやろ。それ、みなきょうだいにしめてもってな。ほんで、がんばれとかいろいろ言われたんや。それでもどないしても田舎やから、目つけられるやろ。すぐわかるやんか。ほなずーっとこで生きていくのに、もう、かなわんって思って。目つけられたりしたって生きにくいやん。ほんでもう、どないしてもええわって気で飛び出て。

きょうだいが入院費用を負担してくれたものの、働くことができなかった。励ましの言葉もプレッシャーになってしまい、田舎の町内では噂をされる。このような経験が、生活保護を受けたさいも期待に応えられない状況と重なり、受給が彼にとってさらに大きな負荷となっていたのかもしれない。

3度目の受給のさいは60歳近くになり、病気も悪化していたためケースワーカーに就労努力を要請されることなどがほとんどなくなっていた。今回、再び野宿に至らなかったのは、身体的な限界と、稼働年齢であることによる負い目が減少したためであろう。

それに加えて、同じように生活保護を受給しながら暮らしている路木の住人との交流も彼の心境に影響しているようだ。路木以前に入居していた2軒のアパートでは、いずれも、談話室などの公共スペースはなく、新たな関係をもつことはなかった。そのため、アパートに入居することにより孤立が顕在化し、知人との関係があった野宿生活のほうがましだと、再び野宿生活に戻った。

釜ヶ崎で生活保護受給者の約2割が再び野宿生活に戻っていると報告されている(生田2012)。それは松本さんのように、生活保護受給に対する負い目と、定住先の住環境が大きな要因となっていると考えられる。

松本さんは路木では1年前に談話室ができた当初から利用し始め、今ではほぼ毎日利用するようになった。談話室を利用するようになったきっかけは、管理人の呼びかけだったそうだ。談話室では他の住人と話すことがで

きるという。

(はじめて路木に来たときは)そんなん、どんな人かも全然性格もわからへんしな。……そやけど、ここです座っとたりしたらどんな人かだいたいわかるしな。……独りぼっちというのはやっぱりあれやんか、誰か一人ツレがおったら全然違つし。……ここ(路木)でこないして生きとるだけでも幸せや思てんねん。いっつ死んでもええわって気で(家を)出てきて、ほんでこういう生活しとんのが信じられへんもん。

2012年の秋頃に、部屋で柵の上の物を取ろうとして、踏み台にしていた椅子から転倒し、動けなくなった。転倒して手の届くところにあったコップのわずかなお茶を飲んだほかには何も口にしないで4日もの間じっと耐えていた。偶然階下の部屋から聞き覚えのある声がしたので、ベランダまで弱りきった身体を必死に這わせて声にもならない声をふりしぼり、助けを求めた。その声に気づいた住人が松本さんの部屋にやってきて、救急車を呼んでくれたおかげで危機を脱することができたという。松本さんを発見してくれたのは、談話室で知り合いになった住人だった。

他の住人と話をするようになったのは、談話室ができてからである。談話室では、そこで知り合いになった他の住人から声をかけられることがある。また、談話室に知り合いがないときでも1日に一度は必ず利用している。コーヒーを頼み、しばらく座っていると一人は顔見知りになった人がやってくるという。路木では、同じ住人同士で異変に気付いても、部屋に入っていくことをためらう人は多いようだ。そのような中、松本さんの場合は、談話室の頻繁な利用が今回の転倒事故の助けへとつながったと捉えることができる。松本さんの事例では、談話室で他者との関係を持ち、路木の談話室で他の住人と話すようになり、現在の暮らしを肯定的に受け止めてもよ

いのだという気持ちになっていったと考えられる。

### 林さん、井上さん、田中さん——多様な場での関係

#### 林さん——病院での関係

林さんは入院が6ヶ月にわたる長期間だったため、何人もの人と話すことがあり、同じ病室だった人との関係が路木に定住後でも継続している。

知人が訪ねて来るさいに金を貸すことが多い。みんな金を貸してくれと言ってくるため「あんなんツレちゃう」という。それでも頼まれると貸す。車椅子がないと外出が困難な状態にある林さんは金を借りることを目的に部屋に人がやってくることを自覚している。

たとえば、9歳年上の山内さんである。隣の区に住んでいる彼は週2〜3回電車に乗ってやって来る。彼は、林さんの一週間のヘルパー訪問時間を把握しており、ヘルパーのいない時間帯にやって来て、慣れた手つきで車椅子を押して外出する。近くの喫茶店に行くことが多い。8月中頃に、林さんから管理人室に電話がかかってきた。「今日の昼頃に山内が来るんやけど、金を貸してくれて頼まれるだけやから留守や言うてほしいねん」と頼む。しかし、山内さんがやって来たとき、ちょうど林さんを迎えにきた介護事業所の車が路木の前に停車したため、結局金を貸すことになった。11月末にもやって来て、ヘルパーが帰るのをタバコを吸いながら路木の外で待っていた。この日は保護費の支給日であり、いつも通り喫茶店まで車椅子を押していき、1万5千円を借りて帰った。返ってこないことのほうが多いが、頼まれると断らない。

そのようななか、橋本さんだけは金を貸してくれと頼んでこない。彼は毎週土曜日と日曜日の朝五時半に自転

車で10分ほどの家からやって来る。必ずカップ酒を2本、土曜日と日曜日の分を買ってきてくれる。橋本さん自身は糖尿病を患っているため飲むことはなく、林さんのためにカップ酒を持参するのだ。二人で歌謡番組のDVDを見て過ごす。新しいテレビやDVDプレーヤーは以前露天商をしていた橋本さんが安く手に入れてきてくれたものだ。家にいるときには、林さんは地元のことを話すこともあり、温泉が有名だから一緒に行かないかと提案したこともあった。

こうした橋本さんとの関係が築かれているのは、林さんが不関与規範を強く内面化していないためだと考えられる。このことはヘルパーとの関係からもみることができる。一人のヘルパーと一緒に、釜ヶ崎の三角公園でおこなわれた夏祭りや、高校野球の観戦をしに甲子園球場まで行った。談話室も毎日一度は利用し、ヘルパーにもコーヒーをすすめてしばらく話すこともある。

このように、林さんは、定住したことによって、車椅子での生活ということもあり金銭トラブルに巻き込まれやすく、金を貸すことで継続している付き合いがある。その一方で橋本さんとは旅行に誘ったりするほどの仲であり、安定的な関係も築いている。

#### 井上さん——救護施設での関係

井上さんもまた新しく関係をもったひとりである。彼の場合は、「通所部屋」という救護施設の退所者が利用できる共同スペースで、加藤さんと知り合った。月に1、2回晩ごはんを食べに行ったり飲みに行ったりすることもある。8月中にも何度かやって来ており談話室とともにコーヒーを飲みながら休憩していた。

また、アパート内においても他の入居者との関係ももっている。毎朝6時頃の花の水やりを欠かさない。始めたきっかけは談話室で知り合った他の住人に頼まれたことである。

こうして、救護施設の「通所部屋」と談話室の利用が、あらたな関係をもつきっかけとなった。

田中さん——支援者との関係

田中さんは生活保護を受給して野宿生活からアパート暮らしに移行したのちに、支援者にすすめられてサークル活動に参加するようになった。また、街歩きのボランティアをおこなっており、釜ヶ崎の説明をすることが上手で、支援者たちからもよく頼まれごとをされている。やって来た学生にも自分が野宿生活をしてきた頃の話をする。このように、さまざまな支援団体の人びとと付き合いができた一方、サークル活動やアパート内では「人間関係がうまくいかん」と、活動から一時期離れたり住居の引っ越しをしたりしている。

路木では他の住人と顔を合わせると必ず自分から挨拶をするが、積極的に話をしたり、談話室を利用したりすることに積極的ではない。それは、釜ヶ崎に暮らす人びとと自分がここに至った経緯が異なるから話が合わないと思っただけである。

他の人とちやうくて、歩んできた道がちやうんや。田舎から出てきて、一旗立ててお金貯めて帰るか、っていうので来てる人が多いんか。……仲ようやってける人は得やわな。ほんで（自分は）金の貸し借り一切せーへんやろ。そういうことできる人のほうが友達付き合いできるやろ。ほんで俺タバコも吸わんねん。何も付き合いもないもんな。……だから生まれてきた環境とかな、生活してきた環境が全然違っやん。……話が合わんねん。映画とか本とか見てる人おらへんもん。

彼には日雇い労働の経験がほとんどなく、長年釜ヶ崎で日雇い労働をして暮らしている「他の人」とは「話が

合わん」と感じているため、他の住人とは距離を置くことにしている。この田中さんの語りからは、不関与規範というよりも、自分とは異なる他者とは話が合わないだろうという想像が、田中さんが他の住民と距離をとる大きな理由となっていることがわかる。

この3名が生活保護受給後に新たな関係を築いているという点は共通している。林さんは病院で同室になった人と、井上さんは救護施設で同じフロアになった人と知り合い、それぞれアパートに入居後も付き合いを継続している。また、田中さんは支援者やサークル活動との関係をもっている。

#### 4 まとめ——釜ヶ崎における社会的孤立を考えるにあたって

不関与規範の内面化の度合い

以上、7人の事例から生活保護を受給して定住するようになったことにより、どのように他者との関係性が変化し、またつくり上げられるのかをみてきた。ここでは事例を振り返りながら、釜ヶ崎における社会的孤立について考えていきたい。

生活保護受給後の関係をみると、林さん、井上さん、松本さん、田中さんの4人は、新たな関係を築き保っている。他の住人や、救護施設や病室で同室になった人、または支援者との関係が主な関係性となっている。一方で、東さん、鈴木さん、多田さんの3人は生活保護受給後に新たな関係をもっていない。

林さん、井上さん、松本さん、田中さんの4人は不関与規範をあまり強く内面化してはいないのでないかと考えられる。松本さんは「誰かひとりツレがおったら全然違っ」と話し、積極的に他者と関わろうとする様子がみ

られた。井上さんは救護施設の入所者との旅行先に自身の生まれ故郷を提案しており、林さんは友人に温泉に同行こうと誘っている。また、田中さんはボランティアとして学生へ野宿経験のことを教える話し手を引き受けている。これらの行為は、互いに過去に触れ合わない、深く関与しないという不関与規範を強く内面化しているとは考えにくい。

一方で、東さん、鈴木さん、多田さんの3人は他者と積極的に関わろうとはせず、親密になる状況を避けようとしている行為がみられる。

たとえば、林さんと東さんのヘルパーとの関係と比べてみると違いがみられる。林さんが一緒に甲子園に行ったり談話室でのコーヒーを誘ったりする一方で、東さんはヘルパーの訪問時間には部屋に戻っておくものの、弁当の要望を伝えることもなく、受け身で待っている。

また、野宿経験のある松本さんと多田さんも他の野宿者との関係が異なっている。松本さんは野宿を続ける友人のところに差し入れを持っていき、故郷の話をして懐かしむことがある。このようなことは多田さんにおいてはみられなかった。多田さんは近くに住んでいた人の数や苗字は把握しているものの、名前や出身などを話すことはなかった。このことは、松本さんが、親密な関係を求める傾向が強いことに対して、多田さんは不関与規範を強く内面化しているためだといえる。これまでの釜ヶ崎に至る経緯や釜ヶ崎に暮らしている期間などが、不関与規範の内面化の度合いに結びついていると考えられる。

### 住宅外での関係性の変化

生活保護を受給することによって、他の(元)労働者同士の関係から孤立するのは、寄せ場内で他者との関係を築く土台となってきた不関与規範の変化を迫られるためだといえる。生活保護を受給がそれまでの他者との関

係性を変化させることについて、住宅の内外に分けてみていきたい。まず、住宅外においては生活保護を受給していない者との間に経済的な差が生じ、対等な関係ではなくなってしまふ。

東さんや林さんの事例のように、定住することで金を貸してほしいと頼まれやすくなってしまう。東さんが以前のアパートを誰にも告げずに引っ越したことも、このような関係性の変化が要因であった。生活保護費が毎月手に入るために、外で酒を飲んだ人に家まで押しかけられて「酒を奢ってほしい」「金を貸してほしい」と頼まれる。その対応策としての引っ越しであった。

このような行為がときとして孤立することにつながると考えられる。

「釜ヶ崎のまち再生フォーラム」代表理事で生活保護受給者の支援をおこなっている織田隆之氏が筆者のインタビューにおいて次のように説明している。

簡易宿泊所では、帳場で管理人にストップされるから、知人は部屋に入ることができない。でも、その辺のマンションの何号室に住んでるって言ったら、知人が部屋に入ってくることができる。金貸してくれって言うたり、遊びに来たりする。そこで断れるかというと、なかなか断れない。断れないから、自分がどこに住んでるかを教えないことにする。そして「どこに住んでるんや」って聞かれるような知人の集まる場所には行かない。それならどうなるかって言ったら、孤立しますよね。それは自分の生活を守らないと、という思いでしょう。

ドヤで暮らしていた頃は、生活圏内に他者が踏み込むことがなく、それゆえ不関与規範を土台とした付き合いができた。しかし、生活保護を受給してアパートに定住すると、生活圏内にまで入ることが可能となる。そして、

生活保護を受給して安定した収入が得られるようになるため、金を貸すように頼まれ、「断る」ことができない。それゆえ金を貸す状況をつくらないために、身を隠したり、外に出歩かなくなるのである。

ただし、これまで対等であった関係から、経済的な差が生じた場合において、関係が断絶するわけではない。以前から続く関係が不関与規範を土台とする関係性を継続される場合もあるということが鈴木さんの事例から読み取れる。この場合、経済的な差が生じたとしても継続されるのは、その差とは無関係に対等に付き合うことができる媒介―鈴木さんの場合は将棋―が重要な要素となっている。

#### 住宅内での緊張関係

次に、住宅内での他の住人との関係性について考えてみたい。

東さんが他の住人の行為にストレスを感じながら、トラブルになることを予期して談話室を避けるようになったのは、他者と安全な距離をとるためである。アパートでの定住生活では、これまで保っていた他者との距離の変更を迫られる場面に何度も遭遇することになるだろう。このような場合、行き先を告げずに転居するか部屋に引きこもるか、あるいは余力があれば生活保護を辞退（廃止）するなどの方法で不関与規範を保持するのである。だが高齢者が辞退という選択肢を選ぶことは難しい。

不関与規範を土台とする関係から、一歩踏み込んだ関係になれば、「過去」に触れられる恐れがあることに加えて、定住生活ゆえにこれからも何度も顔を合わせることになるだろうことも意識せざるをえない。それゆえトラブルになれば、これからのアパート内での生活がしにくくなるだろうと先取りして考えるのである。このように住宅内で関係規範の変容を迫られると、転居したり引きこもったりすることによって社会的孤立に至ることが少なくない。生活保護受給によって生じる社会的孤立はこのようなプロセスで現れるのである。懐が深くて寛容

な街をつくってきた要因である不関与規範が、生活保護を受給してアパートに定住するようになると社会的孤立の要因として作用するのである。

#### 支援付き住宅の影響

不関与規範を強く内面化している人のほうが、定住することによって他者との関係性が変更されることになって孤立に至りやすいと述べたが、それと同時に、支援付き住宅の影響が現れるのにも長い時間が必要となると考えられる。

たとえば、談話室の利用方法の違いがある。松本さんは談話室ができた当初から積極的に利用し、そこで他の住人5人ほどと同じテーブルに座りコーヒーを飲みながら話をする仲となった。当初はスタッフに「コーヒーを飲んで行かないか」と声をかけられたことがきっかけだったが、今では声をかけられることがなくとも利用するようになってきている。互いの部屋を行き来する関係の同居者があり、松本さんが部屋で転倒したときの発見者になった。このような他の住人との新たな関係の構築は、定住して毎日顔を合わせるようになったために生じたものであり、支援付き住宅の影響のひとつである。

一方で、東さんも談話室を利用している点では松本さんと同じだが、利用し始めた半年になっても毎回声をかかれることがなければ入ってくることはない。特に同席になった他の住人と話すことはなく、他の住人とのいざこざを避けるために自ら談話室の利用を避けることにしている。東さんは以前住んでいたアパートで他人に訪ねられることを重荷に感じ、引越した経緯からもわかるように、定住によって、ときとして耐えがたい緊張関係を感じとる。不関与規範が強く内面化されている場合、定住することによって緊張関係が生じやすいのである。こうして苦痛を伴って不関与規範が揺るがされることとなる場合、規範を保とうとしてアパートを引っ越したり、

他の住人との接触を避けるという選択をとりうる。

談話室の利用を避けていた東さんであるが、スタッフが繰り返し声をかけていると、入って来ることはなくとも、談話室の外の廊下に置いてある椅子に腰かけていくことを日課とするようになった。これはストレスの原因となる存在から一定の距離を置きながら、他者との関係を構築しようとする兆しのようにみえる。そこにいざとなれば仲介してくれるであろうスタッフが常時いるため、廊下の椅子にも座っていられるのだろう。

不関与規範と孤立は結び付きやすいと考えられており、実際に東さんの事例のように、アパートに定住した暮らしで生活様式が変化したとしても、強く内面化された規範は変容しにくいために孤立する可能性が高いことが示された。しかし、一方で住人との関係を断つのでなく、かといって無理に規範を変えることなく、関係を構築しようとする日常的行為をみることが出来る。他者に深く踏み込まれることなく心地よい距離を保ちながら定住後の関係性を模索しているのではないだろうか。

また、もう一つの事例として、隣人から騒音の苦情があったときにヘルパーが管理人に伝えることによってトラブルを回避できた出来事が挙げられる。もし、間に第三者が介入していなければ、再び引っ越しをする可能性や閉じこもる可能性も考えられる。

このように、支援付き住宅においては、管理人の存在が緊張関係を緩和させる、または予防することが出来るのである。ドヤや一般のアパートでは、管理人は部屋代の徴収だけであるのに対して、支援付き住宅にはスタッフが管理人として常駐し、相談事を受け付けたりトラブルに対処している。

支援内容としては生活相談などを受け付けるのだが、目に見える以上の支援となっていることは重要である。織田氏は筆者がおこなったインタビューに対し、サポートティブハウスを例に次に指摘している。

サポートティブハウスはスタッフががいるから、一对一の関係性じゃなくて、誰かが仲裁してくれる関係性ができる。もし喧嘩になって、誰も仲裁が入ってくれなかったら、勝つか負けるか、嫌な思いをするでしょう。一対一だったら引くに引かれない。だから、逆に喧嘩をしないようにする。ストレスを感じる前にどちらかが引いてしまう。でもスタッフがいると、仲裁してくれるという安心感を感じますよね。だから、ストレスを感じるかもしれないけど、もう一步踏み込むこともできる。

支援付き住宅における管理人であるスタッフの、第三者としての住居内における存在は、住人同士の緊張関係を緩和するという重要な支援となっている。さらには、第三者の仲介を住居に組み込み、一つの支援として存在させることは、孤立を防ぐ機能を発揮することがある。談話室とスタッフの存在が、新たな関係の構築や緊張関係の緩和などに向かわせたという点で、支援付き住宅としての路木の特徴が、これらの特徴をもたない他のアパートとは異なる影響として現れたのである。

## 5 おわりに

生活保護を受給することによって、どのような経験をするのか、なぜ孤立するのかを、少ないながら事例を通じて仮説的に述べてきた。加えて、小さな事例であるが、孤立に向わない可能性をもつ状況も示唆した。

社会福祉の制度が、それを利用する者を生きづらくさせるというパラドクスが生じうるのは、わたしたちの社



会が、人が生きるうえで何が大切なのかを共有する知を形成しきれていないからではないだろうか。

ここであらためて「定住」ということについて触れておこうと思う。「定住」とは、単に雨風をしのぐ住処を確保するとか、制度を利用するために必要な住所を得るということ以上の意味合いがある。それは自分自身がここに住んでいると認識し、周りの住人からも認識されている状態である。多くの支援者が築き上げようとしている「安心して暮らせる」という状況も、防犯的な意味合いだけではない。それぞれにとって心地良い程度の他者の存在を感じながら日々を送ることができる、ということも含意しているにちがいないのである。

さて、路木の7名の聞き取りだが、時間の制約から生活史を十分に聞き取ることができたとはいえず、ここでは仮説的な結論である。とりわけ彼らが釜ヶ崎に至るまでの経験、周囲の反応や自分自身の気持ち、あるいは生活保護を受給するまでの釜ヶ崎での生活が、受給してアパートで暮らすようになってからの生活や意識にどのよう影響しているのかなどは、さらに丹念に聞き取る必要があるが、今後深めていければと思う。

\*1 無料定額診療施設。健康保険に加入していない場合でも、病院独自の貸付制度により、治療費の一部または全額を保留して医療が受けられるようになっている。

\*2 厚生労働省の管轄のもと介護認定の申請時の手続きの支援や、家賃支払いの代行、通帳などの重要書類などの管理サービスを提供しており、生活保護申請時にケースワーカーの紹介などによってこれらのサービスを受ける人は多い。

#### 《参考文献》

生田武志. 2012. 「釜ヶ崎と『西成特区』構想」『現代思想』40(6) : 130-138.

## 第5章 起こってしまった孤独死

「えんがわ茶屋 ころろぎ」オープン / 小手川望

ココラムが管理人として運営に携わる「支援ハウス路木（以下、路木）」では、2011年11月、2012年10月に住人の孤独死が起きてしまった。この章はその経緯についての報告となるが、それに先立って、路木の交流スペースオープン当初の話をしておきたい。

ココラムは、2011年5月から、路木の管理人を引き受けることになった\*1。ほぼすべての入居者は単身男性で、65歳以上の高齢者が多い。生活保護受給者も多い。

路木の1階には、18畳ほどのスペースがある。以前は、事務所として使用され、路木の就労支援事業である「すそあげ事業」の作業場だったこともある。管理人業務の引き継ぎから2ヶ月後、「えんがわ茶屋 ころろぎ」が喫茶店としてオープンした。

わたしは、2011年6月に埼玉県から当時小学校2年生の子どもをつれて路木に引っ越してきた。路木に住まわせてもらい、交流スペース立ち上げのお手伝いをする事となった。

オープン当初の営業は月、水、金の週3日、10時～13時。「ころろぎ」のメニューは、インスタントコーヒー、紅茶、

昆布茶など、飲み物はすべて100円。一人暮らしの入居者のために、モーニングもはじめることにした。高齢の方に配慮して「ごはん、インスタントみそ汁、一品」で250円。「パン、飲み物、一品」で200円。周辺の喫茶店\*2のモーニングがだいたい350円前後なので、それよりも安い設定とした。

「ころろぎ」オープン当初、わたしは毎朝路木の掃除をして、麦茶をわかし、冷蔵庫で冷やし、通りかかる人に声をかけて、お茶を飲んでいってもらった。

急に、引き継ぎもなく管理人が変わったことで、入居者の中にはココラムに対してころろよく思っていない人もいたかもしれない。最初は、「ころろぎ」の前を通り過ぎるばかりで、中に入ってお茶を飲んでくれる人は多くはなかった。それでも、毎日扉をあけていることで、次第に立ち寄ってコーヒーを頼んでくれる人、家賃の支払いの帰りにちょっと立ち話してくれる人が増えていった。だんだんと営業日には必ず1杯はコーヒーを飲んでいく人、「ころろぎ」にくると他の住人を電話で呼び出して、おしゃべりする人が出てきた。ここでコーヒーを飲みながらしゃべることで、今まであいさつはしても名前を知らなかった入居者同士が顔見知りになり、常連の人はお互いに電話で誘い合って、おしゃべりに花を咲かせるようになった。

「ころろぎ」には古い時代のレコードが集められて、リクエストに応じて好きな音楽をかけることもできる。鍵盤ハーモニカの演奏会や健康体操、釜ヶ崎関連の本を読む会など、関わるスタッフが特技をいかして、入居者が参加できるイベントも定期的に開催するようになった。

2012年からは、訪問看護ステーションが入居して、定期的に健康相談を開催し、日常的にも入居者の健康サポートを行なっている\*3。

## 富田さん(仮名)のこと

富田さんは、路木の住人で2011年11月に孤独死された。九州出身で亡くなられた当時は77歳になったばかりだった。

富田さんは、いつもドアに鍵をかけておらず、毎日くるお弁当の配達人の方がドアをあけたときに、部屋で倒れているのを発見してくれた。死後1日経過したところだった。

富田さんは、アルコール依存症で毎日ワンカップ焼酎を7〜8本飲んでいました。お酒の飲み過ぎで食事をとらないことが多かったが、2011年7月に、1階の「こころぎ」がオープンしてからは、週3回の営業日には欠かさずモーニングを食べにくるようになった。

3人の子どもがおり、末の娘さんとは路木で同居していたこともあったそうだが、前年に結婚して引っ越していた。事情によって、配偶者に父親が釜ヶ崎在住であることを伝えておらず、父親である富田さんのもとにも結婚後はなかなかくることが難しかったようだ。

「おっちゃん馬鹿だから文字も読めない」というのが口癖だったが、本当は、東京の大学を卒業しており、新聞社の校閲部にもつとめていたことがあったそうである。無学を装っていたが、「以前、娘から、お父さんは漢字をよく知っているから漢字検定の1級を受けてみたいいい、といわれたことがある」とうれしそうに語ってくれたこともあった。

富田さんは新聞社を退職したのち職を転々とし、奥さんとも離婚。釜ヶ崎には52歳のとき、1986年にきたそう。だ。「ネクタイも会社勤めも大嫌い」だったため、釜ヶ崎での日雇い労働は性分に合ったそうである。その後、

事故で足を骨折したことをきっかけに松葉杖が必要となり、高齢とあいまって仕事に就けなくなったようだ。詳しいことはわからないが、姉夫婦と金銭を巡るトラブルで財産を失い、生活保護受給者となったらしい。

ほとんど食事をとらずに焼酎を飲む富田さんに、わたしをふくめた路木住人も介護担当者も「毎日8本は、いくらなんでも飲み過ぎだ」といさめたが、「早くあの世にいきたい」と笑って答えていた。亡くなる前の夏には、介護担当者の説得でアルコール依存症専門病院に入院したものの、1週間で逃げ帰ってきてしまった。こころぎにモーニングにはくるものの、その他にはほとんど食事をとらず、やせ細り、もともと不自由な足がますます弱ってきたので、秋頃から宅配のお弁当業者を頼むこととなった。このことが結果的に、富田さんが亡くなったとき、翌日に遺体を発見できたことにつながった。

その後、富田さんの親族に連絡が届いたものの引き取りを拒否したので、大家である路木が葬式を出すことになった。葬儀の担い手がいない状態では、西成区指定の、路木とは遠くはなれた葬儀場での式となることだったが、管理人が交渉して路木から近い葬儀場での葬儀開催となった。自宅での孤独死は、警察の検視と解剖が必要で、その後富田さんの遺体を引き渡してもらい、近くの葬儀場に運んだ。

お葬式の執り行ないは、釜ヶ崎で活動されている僧侶の杉本さんにお願した。

遺影もなく、梵字の書かれた紙が貼ってあった。杉本さんは、当時の路木担当であった筆者に電話で30分ほど、富田さんのことをお尋ねになり、その内容をお経にして読んでくれた<sup>【\*】</sup>。

親族の中では、娘さんだけが参列してくれた。夫には内緒で出かけてきたそう。部屋の遺品整理をし、「愛読書だったから」と広辞苑を棺の中に入れてよとしたが、辞書は燃やすときに大変だから入れられないと断られてしまった。代わりに、富田さんの離婚した奥さんが編んだというセーターがそっと棺桶に入れられた。管理人であるわたしたちには選択できなかった物がおさめられ、娘さんがきてくれてよかったと思った。

前に住んでいたドヤから一緒に路木にうつってきた人のほかに、1階の「こころぎ」で親しくなった人も参列してくれた。「礼服もないが……」とおっしゃる住人に、わたしたちは平服での参列をうながした。「なによりも見送ってくれたら、きっと富田さんもうれしいとおもいますよ」と。路木の住民やスタッフだけでなく、以前のドヤで親しくしていた人もご夫婦でできてくれ、小さいが温かいお葬式となったと思う。

娘さんは式の間ずっと泣いておられた。富田さんの最後は、アルコールの飲み過ぎと食事をほとんどとらない生活で、ゆっくりとした自殺ともいえるものだった。もし、娘さんが結婚後も家族に父の存在を隠すことなく、以前のように会いにくることができていたら、富田さんの最期はもっと変わったものになっていたのではないか、これは今さらいっても仕方のない想像なのだが、思う。そのことが娘さんにもわかっていたからこそその涙だったのではないか。

式が終わった後、交流スペースの机の上に富田さんの遺品の一部が並べられた。富田さんが大事にしていた、大正時代につくられたオールカラーの日本昆虫図鑑、美しい活版の源氏物語、広辞苑、その他の蔵書。この、小さな祭壇のようなものに焼酎やお菓子が供えられて、後から亡くなったことを知った友人が、ぼつぼつと訪れて手を合わせていってくれた。

路木住人も「こころぎ」で富田さんの思い出話を語り合う姿がみられた。そして自分の方が一の時を思っ、スタッフに冗談まじりに「俺のときも頼む、遺影のために写真撮るといた方がいいんちゃうか」などといっていた。同じマンションに住みながら、いつ亡くなったのかも知らずに終わるよりも、こうしてお葬式に参列して思い出を語ることができてよかったと思う。そういった縁が取り結ばれたことは、交流スペースがひらかれたことのひとつの意味であろう。

富田さんは重度のアルコール依存症であったが、釜ヶ崎に住んでいた間にそれぞれの場所で周囲の人と友好的

な関係を結んでいたため、このように温かいお葬式が行われ、亡くなった後も思い出を語る友人の訪問があったのではないか。

### 田崎さん(仮名)のこと / 上田假奈代

2012年10月9日、路木8階の住人、田崎さんが自宅で遺体となってみつかった。「ちょっとおいもするし……」というこ、オーナーと路木の管理に関わるYさんがマスターキーで扉をあけた。わたしのところにYさんから電話があり、スタッフふたりを連れていくことにした。

廊下には、2匹のしろいウジ虫がはいでいた。

警察官は「着物ににおいがつくよ」と牽制してきたが

「いいんです、捨てますから」と答えた。

じっさいは、部屋のとびらをあけて、ちらっとみただけ。においがつくというようなことはなかった。

みえただけ。

あおむけになった、まっくろな、腫れたからだ。

いまだに、その姿がふつと脳裏にうかび、瞬間、ほんの一瞬、音が聴こえなくなるような、そんなかんじがする。遺体のある部屋のなかを捜査するマスク姿の警察官のかた。

災害や震災で、たくさんの遺体をみた人たちのことをおもいだし、ことばもない。

死にまつわる研究をしていて、なんとまあ、孤独死をだしてしまった。

もし、もっと住人の人たちの動向に、ところをくばっていたら……こんなことが起こらなかったのではと、スタッフたちは自分を責めているのではないかと心配になる。

人事でのごたごたしていたことや、直前にコールドームが研修旅行にでてしまっていて発見が遅れたのではないかと、わたし自身もそんな気持ちをもってしまふ。悔やんでもしかたのないことを悔やむ。

翌日、スタッフWとYさんは部屋の片付けにはいった。

片付けにはいる前、

「だいじゃぶ？」と声をかけると、

「吐いたら、またそのぶん食べます」と答えるW。

その後、Wに尋ねると、「おもいのほか静かな気持ちです」と返ってきた。Wは住人たちと日常的な関係のなかに、田崎さんを悼む気持ちを織り込んでいるのではないかと思う。

田崎さんのご遺体は遺族がすぐに引き取りにこられ、そこで葬儀が営まれたようである。遺族に遺品をお渡ししたかったが、路木のほうに連絡はなかった。

介護サービスがはいっていない住人に対し、訪問看護ステーションのUさんに頼み安否確認についての声かけをしてもらった。ひとりだけ、「余計なことだ」と拒否の返答が came したが、紹介者に再度調整に入ってもらうことになっている。現場は粛々と仕事をする。

今日が昨日になり、明日が今日になるように。

\*1 詳しい経緯は、「孤独のカー引き合う万有引力のように」を参照のこと。

\*2 とはいえ、萩之茶屋には喫茶店はわずかにしかない。そのことも、「ころぎ」でモーニングをはじめきつかけとなった。

\*3 現在は、訪問看護ステーション運営団体が交流スペースの運営も協力する体制となり、「おしゃべりサロンHESSO」としてスタートした。モーニングはメニューから無くなって、カンパ制で飲み物が飲める仕組みになっている。週5日、10時〜16時の営業。管理栄養士による食べ物の会や「ふるさとの家」の本田神父によるお話し会、僧侶の杉本さんによるアコーディオンの会など定期的にイベントの企画しており、好評である。近隣からの常連客も増えている。

\*4 富田さんの人生や、路木での生活を聞き取ってくださり、わかりやすい言葉でお経の中に取り入れてくれた。杉本さんが葬儀の際にこころがけていることだそうである。

## 第6章 高齢生活と向き合う実践から——さいごの人間関係・紙芝居劇むすび

石橋友美

### 「死」に後押しされる「生」

「紙芝居劇むすび（以下「むすび）」は、仕事をリタイアしたひとり暮らしの高齢男性たちが集う紙芝居劇団である。劇団とはいっても、社会との接点としての活動は必要に迫られているという意味で、趣味の世界とは一線を画している。紙芝居のメンバーは日常を共に過ごし、年に1回の旅行や誕生日会、季節の年中行事などを行う疑似家族のような間柄であるが、「何でも話し合える」「始終一緒にいる」というような濃密な関係にあるわけではなく、普段はそれぞれが支援付住宅の個室でひとり過ごす時間の方が多い。買ってきた惣菜を自室で食べ、テレビを見て、買い物や散歩に出かけるなど、きわめて独立した個々の生活が存在し、それが「むすび」においてかろうじて交差しているといった風である。それでも自分が老後を分かち合い、死に旅立つ時に喪主の代わりをつとめるのはその仲間。その仲間たちとは、必ずしも釜ヶ崎に住む紙芝居のメンバーだけではない。活動に伴走する外部地域からのスタッフや見守る人びと、世代や地域を超えて複雑にゆるやかにまとまっている集合体。それが「むすび」である。

私はこの「むすび」が自立し活動を始めた2005年からマネージャーとして週2回事務所に出勤し、別途、紙芝居公演や年中行事を行ったり、メンバーに何か問題が起こった時には支援者として対応したり、友人としてまた家族の気持ちで仲間たちと一緒に時を過ごすのを楽しみとしてきた。週2、3回の出勤が当初からの私と「むすび」の距離感である。地域外から来る人間としてメンバーたちの自主性や日常生活、他の人間関係を妨げずになおかつ部屋に籠りがちなメンバーたちを社会生活に引き付けておきたいとの思いで、そのバランスはいつも悩ましく揺れ動いている。

「むすび」に出会ったのは勤めていた仕事を退職し、生き方や仕事について考え直す頃である。初めて訪れた事務所、あるメンバーが「わしらは、食って寝て、死ぬのをただ待ってるっっちゃうわけや」と、失業後野宿に至り生活保護を受けて暮らすようになった身の話を自嘲するように語ったことに衝撃を受けた。多くのメンバーは紆余曲折の人生の中、高齢になるまで条件の悪い日雇い仕事に従事し、高齢を理由に解雇され、野宿生活を経て生活保護を受けて暮らしている。「死ぬのを待っている」そう言いながらもその目には「このままでは死ねない」という悔しさも垣間見え、決して軽いものではなかったはずの人生をどのように終えるのか、迷っているように見えた。私がさらに深く惹きつけられたのは、メンバーたちが拍子抜けするほど穏やかで明るく見えたことだった。「孤独死」「無縁社会」と世間が怯えるような悲壮感はなく、淡淡とした日常がある。浮足立った世間のほうがむしろ殺伐として見えるほど、当たり前の感情や当たり前の人間関係があり、次々と問題が起こり、どちらかというと「生きる」ことに奮闘している「むすび」のメンバーたち。「いかに死ぬのか」という問いが、「いかに生きるのか」という現実問題に置き換えられる。そういった土壌をもつ「むすび」において、「いかに生きて死ぬのがよい人生なのか。またそれをどう受け止めるのがよい社会なのか」という素朴かつ難解な疑問に向かい合う。それが私の「むすび」との関わり方であり、本稿のテーマである。

「むすび」の成立には、2000年頃から急増した单身男性の生活保護世帯の存在が背景にある。「むすび」が活動の拠点を置く「釜ヶ崎エッグス」は、2000年、NPOである「釜ヶ崎市民活動センターかまなび（以下「かまなび」）や「釜ヶ崎のまち再生フォーラム（以下「再生フォーラム」）」がまちづくりや、高齢の生活保護受給者の居場所や生きがいづくりの拠点として開いた合同事務所である。隣接する支援付住宅「マンションフレンド」オーナーの山田和英さんの協力を得て、もとはコインランドリーであったというプレハブ1階建の事務所を地域住人が無料で憩うことのできる寄合所として整えた。

最初は「かまなび」の取りまとめで、「マンションフレンド」の住人たちや前を通りかかる高齢者などを呼び入れ、一緒にコーヒーを飲んだりソフトボールやトランプをしたりして、支援付住宅等で生活を始めた高齢者たちを孤独から引き離す活動に取り組んでいた。「再生フォーラム」では、地域通貨の創設や釜ヶ崎を訪れる人たちの街案内など、生活保護を受給する高齢者たちが地域に根ざし社会での役割を取り戻す試みも行われていた。2004年には「かまなび」から「ごえん」という紙芝居グループが生まれ、世話役の女性が紙芝居に歌や朗読スタイルを取り入れて、高齢者施設等で上演する活動がはじまった。

紙芝居を始めたのは「自分が生活保護を受けられるということを知らなかった」と7代になっても野宿を続けた結果、体調を崩し入院した男性をはじめ、多くが高齢になっても働きながら野宿を経験した男性たち。仕事に代わる「何か」を得て、それを生きがいにしていく。こうして数十人の生活保護受給者が活動に関わりはじめ、活動も軌道に乗りつつあった2005年春、突然「かまなび」は解散してしまう。資金繰りの問題など理由はさまざまに憶測されるが、メンバーである高齢者たちが取り残されるという事態となる。若い頃は戯曲を書き、裁

判所の書記官も務めていたというグループきってのインテリ肌で当時のリーダー格だった浅田浩さんは、誰かに依存するということは、いつも弱い立場に置かれてしまうということを当初から危惧していた。そして「誰の世話にもならず、自分たちで紙芝居活動を続けたい」と関係者に相談してまわった。グループ名も新たに「むすび」と名付けた。それに応えて「こえん」とここの部屋（以下「コールドーム」）の上田假奈代さんは「むすびプロジェクト」を立ち上げ、自立支援プロデューサーやアーティストを派遣し「紙芝居劇むすび」として再出発したグループの基盤を整えた。また「かまなび」時代からの支援者たちも、継続的に見守る姿勢を見せた。2005年7月の「再生フォーラム」定例会で「むすび」は紙芝居を披露し、自分たちで活動を続けていく旨を地域の関係者たちに宣言した。その年、浅田さんにより今までの既成の昔話から歩を進め、「むすび」オリジナルの紙芝居「文ちゃんの冥土めぐり」が書かれた。2007年にはイギリス・ロンドンで行われたホームレスアウトの祭典「TEN FEET AWAY FESTIVAL」に参加し、その後「コールドーム」のバックアップを事実上離れ、マネージャーともども自立の道に進んだ。2010年には東京のホームレス支援NPOの「もやい」のイベントに招待されたり、2012年には宮城県にある「穂波の郷クリニック」から生まれた「ほなみ劇団」を訪ねたりと、地域を超えた交流が広がっている。

2007年頃よりメンバーに認知症の症状が現れたり耳の遠いメンバーが参加したりと、活動にもゆるやかな介助が必要となり、いわゆる黒子が出現する。2011年1月には「むすび研究会」が発足し、自治はメンバーたちに委ねつつも、運営やサポート体制を話し合うサポーター集団が形成された。

紙芝居公演数は当初より徐々に増え、2009年には年間39公演、観客動員数は2000人近くを数えるようになり、現在も年間30公演ペースを維持している。公演先は保育園、大学、福祉施設、地域のまつりやイベントと多岐にわたっているが、メンバーが高齢化した今日では公演数よりもその質を重視し、公演後もつきあいが続

くような相互的な関係を紙芝居公演に求めている。

## 2 対等と相互扶助―しあわせと折り合っ

自分たちの日々の居場所や人間関係を確保し、活躍の場もあり、新たな出会いに恵まれ、ステージで輝いて見える劇団のメンバーたちだが、はたして彼らは外から見ると「しあわせなおじいちゃんたち」なのだろうか。私は何人かのメンバーに、「現在しあわせか」と尋ねたことがある。「今は食い物の心配をせんでもいいし、しあわせや」と答えたメンバーもいるが、「今のこの状態が、しあわせなわけがない」と言い切ったメンバーも数人いる。「やはり自分で仕事をして稼いでいた時がよかった」「しあわせなあ：飲み屋で女性とカラオケを歌っていた頃かな」という意見もある。そしてよく使われる言葉が、「この状況を抜け出せるものなら」というものである。自分が特別な「状況」下に置かれているという認識であり、当たり前前の日常を生活しているという実感の薄さがかがわせる。

「しあわせ」と言いきれない個人の心の内ははかりしれないが、重要な理由のひとつに生活保護を受けていることへの肩身の狭さを挙げることができるだろう。老いも相まって、自分の力で状況を打破することは困難になってくる。「みなさんのお世話になっていて、えらそうなことは言えないけど」と、社会のお荷物になっているという呪縛に捕えられてしまう。多くが人をだましたり、だまされたり、利用されたり、逃げたりしてきた人生。「自分のせいだから仕方ない」と諦める傾向もあり、追い打ちをかけるように、病院では「たらいまわし」や不必要と思われる検査など疑問の残る処置を受け、支援付住宅の一部でも抑圧や搾取を彷彿とさせる出来事が起

る。「自分がちゃんと生きてこなかったから」という言葉がよぎって、文句が言えない。

そうした精神状態で、健全な人間関係を築くことは想像以上に難しい。ちょっととした会話の中でも敏感に「自分は攻撃されている」「また利用される」「どうせ、この関係は続かない」と怯え、反撃に出ようとしたり、そこから立ち去ったりする。「むずび」でも、これまで多くのメンバーが去って行った事実がある。相性の悪い人同士のがみ合い、スタンドプレー、そして突然の脱退。常に心休まることなく問題が起きる。ましてや一匹オオカミとして生きてきた単身の男性ばかりの集まりであるため、自分の気持ちを表現することや相手の話を聞くといったことが不得手と見え、話し合いもできないうちに、ぶつかり、逃げるの繰り返しである。

金銭の貸し借りで居づらくなった人も多く、人間関係の問題が金銭に占められていることが多い。単純に金銭を貸し借りする場合もあるが、食事、タバコ、酒など現物による貸し借りや、奢り奢られもある。それは体ひとつで生きる男性たちの相互扶助のシステムでもあり、一方でそのやりとりがうまくいかなければ誰かに何かを負ってしまい、地域社会で肩身が狭くなる。そうしたつながりは、彼らを金品で縛るような厳しい人間関係のようにも見える。

助けを求めているのは、釜ヶ崎の高齢者たちだけではない。「したいことが見つからず、自信がない。毎日が



毎年訪れる保育園での紙芝居劇



バタバタと過ぎていく」子育て中の女性、「入院した。仕事が見つからずいいことがないが、商品券送ります。返事はしないで」などと時々手紙をくれる女性。常識にとらわれない高齢者たちの言動に驚かされたり、違う観点を与えられたりして「久しぶりに腹から笑った」という人も少なくない。「褒められるようなことはしたことがない」と、89歳で入団し93歳になった今でもステージに上がる佐野善雄さんは語る。「さんざん親不孝をしたから、これからの人生は世の中のお父さんやお母さんを応援したい」「今は、ちょっとはいいことができていると思います」と客席に向かって語ることができる、こうした姿は年月を生き抜いてきた高齢者だからこそその説得力があり、聞く者の心に訴えかけてくる。

助けることで救われる、というのは活動の中で実感してきた思いである。助けたいのは支援者側だけでなく、支援を受けるべきと思われる人の側もまた誰かを助けたいのだ。「お役に立てたなら、うれしいです」と言葉からもわかるように、「むすび」のメンバーも紙芝居を演じ、観客の笑顔を見たり、お礼を言われたりという手ごたえが自分を支えている。「むすび」においては高齢者側も、支えようと集まってくる人たちも、双方からの相互扶助が存在することで関係が成り立っていると思われる。

「老い」にはネガティブな側面ばかりではなく、人生の知恵を授け、失敗や困難の先に待つ円熟を予見させて後進を励ます存在になるという側面もある。高齢者は、現役世代が与えるものに匹敵するものを十分持ち得ている。しかし社会に対等で相互の関係が築ける場所がないかぎり、高齢者の生きる力は次世代に引き継がれる機会を失ってしまう。対等とは言葉やルールとして規定するのはとても難しい人間関係であるが、相互扶助の前提となり得る。しかもそれは時間の経過とともに常に変動し、つかみどころのないものである。向かい合う相手と呼吸を合わせながら対等を維持するには、成熟した感受性や意志のあり方が必要となってくるだろう。

### 3 老いと死に際しての実際

2009年に初めて現役メンバー（以下の例、相田さん）が亡くなった。日々を共にしていても、血のつながった親族ではない「むすび」の仲間であるが、葬儀会社との交渉次第では生活保護の葬祭扶助で行われる葬送の主導が行えることがわかった。通常申し立てる者がいない場合、身寄りのない死者は形だけの告別式を経るか、または直接火葬場に送られるなど、旅立ちもまた寂しいものとなっている。「むすび」と親交があり、すべての葬儀や法事に協力をくださっている僧侶の川浪剛さんは「仏教の場合であればきちんとお通夜、告別式と段階を経て送るべき」と、お通夜や僧侶による読経など経済的に「無駄」と思われる部分を削って、葬儀会社の利益を増やそうとする風潮に警鐘を鳴らす。

葬祭扶助による最低限の葬儀では、遺影も祭壇を飾る花も存在しないことが多い。「むすび」では、自分たちで遺影を準備し、皆で持ち寄った花や供物で棺を飾り、故人の思い出の品と一緒に茶毘に付して、でき得る限り「普通」の葬儀を行うよう努めている。また、事務所に亡くなったメンバーの遺影を飾って日常的に線香や花を供し、毎年命日には事務所に縁者が集ってささやかながら法要を行っている。このように仲間の死に際し葬祭を行うことで、



関係者が集うメンバーの葬儀

死者そのものの尊厳を守るという意味もあるが、より重要視しているのは、生きている者を失望させないための葬祭が持つ意味である。ある葬儀に参列した男性が言う、「供物のミカンがプラスチックだし、遺影がないから誰の葬儀かわからない。参列者も自分だけだった。嫌だった。行かなければよかった」と。こういった寂しい葬儀の印象は、自分が生きる社会の印象として立ち会った者の心を脅かしかねない。一生懸命に生きた人生が自動的に「処理」される姿を見て、元氣が出る人はいない。その人生が労われ、死が悼まれて送られる姿を見てこそ、残った人たちは命を大事に生きようと思える。葬送は、死ぬまで尊厳を持って扱われる社会そのものを象徴しているとして、その重要性を強調したい。

### ① 葬送や病院における4つの事例

◇ 相田さん（享年74歳、仮名）

↳ ドヤでの孤独死、身元不明扱いとなり葬送に手間取った

幼いころから貧しい家庭で育ち、働きづめで成人した後、東大阪で研磨工として働いた相田さんは、持病のせみそくなどで入院を繰り返しているうちに実家とも音信不通となり、野宿生活を余儀なくされるようになった。生活保護受給後は釜ヶ崎で民間のパートに暮らし、友人に誘われて「むすび」にも関わるようになっていた。「わたしにはこしかない」と毎日「むすび」に通い、小道具を作るなど手を動かし、「いつか絵の個展をしてみたい」と夢を持ち、毎日何枚も絵を描いていた。しかし幻聴の症状があり心療内科にもかかっていた相田さんは、常に架空と思われる隣人とのトラブルを訴えていた。そのため自宅に帰ることが困難になり、荷物も持たずにドヤに泊まっているところ急死したので、変死、身元不明扱いになった。遺体は警察の検視を受け、数日後西成区にある

葬儀会社に送られた。相田さんの生活支援を請け負っていた介護事業所を通じ、遺体に面会できるという連絡を受けたので5日後に「むすび」のメンバーで面会に行った。棺の名前を記入する欄には身元不明者という表示があった。「自分たちで葬送をしたい」とこちらの連絡先を伝え、親族の身元確認がとれるのを待っていたが、葬送までにさらに日数がかかる。仲間から「早く葬儀をしてやりたい」との声があがり、関係者が集まり「徳ぶ会」を開催。それから10日ぐらい経って葬儀会社から告別式と火葬を行うと連絡があった。僧侶の川浪さんを介して葬儀会社と交渉、通夜、告別式を執り行うことが決まった。葬儀は10人も座れないような小さな部屋で行われたので、参列者が入りきらなかった。日数が経っていたので遺体にも変形があり、仲間は見るのがつらい様子だった。それでも仲間たちが「ようやく務めを果たせた」「肩の荷が下りた」「いい葬式だった」と、晴々とした顔をしていたのが印象的だった。その後僧侶の川浪さんが相田さんの妹と面会したが、ずっと疎遠だった兄の遺骨を引き取らないとの意志ははっきりしており、川浪さんの寺で預かってもらうことにした。

◇ 石山さん（享年83歳、仮名）

↳ 脳梗塞で倒れ、不十分な環境ながら多くの人に見守られて亡くなった

快活で地域のボランティアに関わるなど多くの人との深いつながりをもった石山さん。地方公務員として20年働いたが、女性との駆け落ちを経て大阪に来る。原発や電気会社の下請け会社などで70歳を過ぎるまで働いた後リストラに会い、野宿になる寸前のところで釜ヶ崎の支援付住宅にたどり着いた。83歳の3月下旬、部屋で動けなくなっているところを仲間に見送られた。脳梗塞を起こしており、そのままA病院に運ばれた。石山さんは認知症を発症しており、脳梗塞の影響で歩行もままならなくなっていた。カーテンもひかれていない10人部屋。動いて転倒しケガをしたらしく、その後は手や胴体を拘束されていた。病院に通い室長に何度か状況を聞いている

うちに「今は軽いリハビリをしているだけだが、この段階でのリハビリで今後の歩行や自立生活ができるかの瀬戸際。もうじきB病院に転院になるだろうが、そこでも満足なりハビリは期待できない。いいところがあれば転院させてあげたほうがいい」と、現場で働く医療スタッフとして矛盾に対する戸惑いも含め話を聞く。石山さん担当のケースワーカーに連絡をとるも、「役所の立場なので、病院の対応が悪いとかいう患者側の「苦情」には関わることができないし病院の斡旋もできない。介入するには明らかに違法行為が行われているなどの理由が必要」と言われ相談はできなかった。知人を頼ってC高齢者施設の入居を探したが、家族の同意が必要ということで断念。A病院の室長に紹介状を手配してもらい、リハビリの手厚いD病院、E病院と当ててみるが空きがなく、結局4月下旬に退院後、石山さんの入居している支援付住宅の系列の介護付マンションFに受け入れが決まった。Fのスタッフは石山さんにやさしく接しているようだったが、真夏だということに水分補給やきちんとした栄養管理の様子は見られず、オムツ交換も少ないのか、糞尿の臭いが部屋に充満していることが多かった。閑散としたひとり部屋で寝ている生活。認知症が進んだ石山さんを訪ねると「来てくれてありがとう」と泣いていた。そのうち脱水症状で8月初旬に入院し、そのまま病院で9月半ばに亡くなった。石山さんの最期を看取ったG病院では看護師が「むすび」の新聞記事を壁に貼ってくれたり、紙芝居の話をしてくれたりと和やかな雰囲気だった。石山さんの見舞いに来る人が絶えないので「すごい人なのですね」と大事にしてもらった。病院の出入り業者だった葬儀会社が親切で、会社は大阪市の北部にある旭区だったが、釜ヶ崎にある集会所に会場を移すなど対応してくれ、通夜・告別式とも50人ほどの参列者が訪れた。「ここでこんなに人が来る葬式ははじめてです」と葬儀会社の人が言っていた。親族とは連絡が取れず、遺骨はいまだに引き取り手がない。

◇内海さん(享年77歳、仮名)　　「むすび」と離れてからの入院、そして死

内海さんは、70代になってから宮崎県から大阪にきた。浪費が原因で家族から離縁されたようで、知人を頼って大阪に出てきて、そのうち釜ヶ崎にたどり着き、「道を歩いていると痰がたくさん落ちている。汚いし、嫌なんです」と慣れない環境に戸惑いながら暮らしていた。「自分はまだ元気だし、働きたい」と就職活動をしていながらなかなか仕事が見つからず、そのうち「何かしたい」と75歳の時に支援付住宅の社員に勧められて「むすび」に入り活動を始めた。豊かな声量と感情豊かな表現で、紙芝居でも活躍していた。その頃から大腸癌を患っていたらしく、いつも「おなかが痛い。医者から入院を勧められているが…」と言いながらも入院を避けていた。金銭管理がうまくいっていないようで、それが他のメンバーたちとの信頼関係を阻んでいた。「むすび」とも距離を置くようになり、内海さんが西成から車で1時間ほどの狭山市にある病院に入院したことを仲間が知ったのも日数が経ってからだだった。内海さんの住む支援付住宅に聞いても「すぐ退院されますから」と詳しいことは教えてもらえず、「そのうち退院して来るだろう」と思っていた矢先に死亡の知らせを受けた。狭山市からさらに南に離れた貝塚市にある病院に移された後だった。病院で亡くなった場合、葬儀の仕切りは支援付住宅の管轄ではなくなり病院の手配する葬儀会社に委ねられる。葬儀が泉佐野市で行われるというところを「仲間が参列できるように、なるべく近くで」と釜ヶ崎から近い場所に会場を移してもらおう。再び僧侶の川浪さんの協力を得、通夜と告別式の読経をお願いする。後になって荷物とともに出てきた入院に関する書類から、「隔離を行うにあたってのお知らせ」という書類が見つかった。亡くなる1週間ほど前の日付で、「他の患者との人間関係を著しく損なうおそれがある」という理由から隔離されていたと思われる。知らない土地で隔離された中で死であり、そこにリーチできなかったことが大変悔やまれる。

◇江口さん（当時81歳、仮名）は骨折して行路病院『\*1』に入院、その後活動に復活

「むすび」の初期から活動を続け、今では一番の古株である江口さん。手の骨折で入院したが個人情報や壁や役所の連絡ミスが重なり、住んでいた介護付住宅にも連絡が来ず、3日間行方がわからなくなる。A病院に入院して数日後にB病院に転院。これは、前出の石山さんの時にも話が出ていたルートだ。急な環境の変化のためか認知症を発症していた江口さん。医師から「あなたは認知症ですよ」と告げられ、ショックを受けていた。見舞いに行くと面会者は病室には入ってはならず、面会室に通される。江口さんによると、カーテンもない8人部屋で気をつかってテレビも見られない、下（しも）の失敗を看護師に大きな声で叱責されて、「みんなの前で、恥をかいた。死にたくなるわ」と嘆いていた。ナースステーションで江口さんの状態を尋ねると、「なんでそんなこと知りたいの」「家族でもないのに」と拒絶されたが、江口さんが紙芝居の活動をしていること、支援者が多く見舞いに訪れていることなどがわかると、看護師の態度も少し和らいだ。2カ月近く経ち骨折した手はギブスが外れ、内臓検査も異常なし、リハビリも特に行われていないようだったが退院の許可が下りず、病院に尋ねると「退院はまだ」との一点張りだった。看護師の患者に対する尊厳を無視した態度や殺伐とした病院の雰囲気、江口さんも気弱になっており、人の話し声に怯え、幻覚や幻聴を聞くようになっていた。また入院したまま歯科や眼科を受診させられ、「なんのために入院しているのかわからない」という声が本人からも聞かれた。そしてある日自分で「もう退院する」と荷物を持って病院を出て、西成に帰ってきた。病院からは「自主退院されました」という報告があっただけで、その後の連絡はない。江口さんは退院後むすびの活動に復帰。当面心身が弱っていたが次第に回復し、1年近く経った現在では以前と同じぐらいに回復し活躍している。「みんなが見舞いに来てくれたのが、とにかくうれしかった」と話す。

## ②その他社会的サービスの弊害

このように独り身の高齢者は直面する病気や死に際しても、社会からの相応な扱いが期待できないことがあり、生活保護受給者という偏見や見守る家族がいらないという弱みも相まっている。非常に脆弱な立場に置かれているということであり、ともすれば搾取や虐待の対象にもなりかねない。個人の入院生活の様子をチェックし、適正な治療が行われているか、本人の意思が尊重されているか、公正な判断をできる立場の人間がいらないというのが現実である。

高齢にともなう社会サービスとして、介護ヘルパーの派遣や、デイサービスの利用もある。生活支援や身体介助など、独居の高齢者には不可欠なものだが、弊害も起こり得る。以前は「むすび」のメンバーではない高齢者などが時間をつぶすために事務所に立ち寄りしていたものだが、今ではデイサービスの車が迎えに来て、ヘルパーの訪問があるのでその必要が少なくなり、見かけなくなってしまう人も何人かいる。以前デイサービスに通っていたあるメンバーは「行ってもごろんと寝ているだけ。耳が悪いからみんなに混じって遊ぶのもしんどい」と、デイサービスを辞めて「むすび」で毎日を通すようになった。デイサービスにいるのと、「むすび」のような私設寄合所にいる違いは、高齢者が誰にも気遣わずに自由に行動を選択できるという点と、事務所にいれば様々な年代の人が出入りし、高齢者が高齢者だけの世界で孤立することがなくなる。しかし、設備の不備や場の確保の問題、人員の不足等があり、重度の病気や認知症などの症状を抱える人の場合は自分の意志で通い、日中を快適に過ごすことが難しくなるのが問題点だ。

介護サービスを受けている人の声を聞いてみる。「本当は風呂ぐらいひとりで入りたいが、ヘルパーさんも仕事だから断れんしなあ」「買い物も自分で行けるし、やってもらうことなんてそんなにないけど」と本音を漏ら

しながら、何曜日は何時から何と「介護」そのものに生活を合わせるリズムが生まれつつある。また手厚いサービスにどっぷり浸かると部屋から出る必要がなくなり、自分でできることを認識し、実行しようという気持ちが出られる上、外部との接触がますます減少していく。プランそのものが介護事務所の需要を満たすために本人の自主性や自立や出会いを阻むものとなっていることもあるだろう。自分の意思決定や自己主張が難しい独居高齢者の場合、受け身一辺倒となりがちなことにも目が配られなければならない。

しかし、介護サービスは体調の悪い時や誰とも会わないとき、命の綱となる。実際、独居高齢者の生活は、介護サービスが定めた内容を受けるだけにとどまらず、多くのヘルパーの善意や機転に支えられ、生活らしく、便利になっていくという事実もある。独居で暮らす高齢者たちにとって、プライベートな空間と事業所等を行き来するヘルパーの存在は、見守りや情報共有の有効手段でもある。したがって、入居している支援付住宅や、「むすび」のような社会活動の場所などと横のつながりをもてたら、個人の健康問題や孤独をもっと安定して受け止められる網目が結べるだろう。

#### 4 世代をつなぎ生きる力を伝承する

最初はソフトボールをしに公園まで自転車で出かけていたメンバーたちだったが、活動も10年を越えると70代前半だった平均年齢も80代となり、杖や車椅子が必要となり、グループは少しずつ変化を遂げている。新しいメンバーも参入し顔ぶれも変化するが、基礎となっているのは長く歳月を共に過ごした最初の頃に入ったメンバーたち、彼らが共有してきた時間である。他人同士、個性的に生きてきた面々が「むすび」という接点で、あやう

くつながっている。互いに対する反発も時間が経てば腐れ縁となり、一緒に歳をとる仲間となる。そこに新しい仲間が加わったり、去っていったりする。

そうしたメンバーの最後の社会活動を見守る目は多く、「むすび」が高齢化して顕著になったのは、そこに寄り添う子供世代の出現である。視力や認知力が低下し紙芝居の台本の朗読が難しくなると、横でそっと指し示してくれる人。足が悪くなり杖や車椅子が必要になると、一緒にゆっくり歩んでくれる人。その若い世代にも子供が生まれ、「むすび」のメンバーが幼子を抱く場面も見られる。血縁でなくても、自分の存在を知り、思いを理解しようとその姿を胸に焼き付けてくれる若い世代。メンバーの生きた情報が共有され、亡くなったも思い出として語られ、故人はその中で生き続ける。それどころか、そうして思い出を語れる人たちをつなぎ続けてくれている。

野宿生活を経て生活保護を受給し孤独と思える境遇から一歩出て、小さな接点で社会生活を営むメンバーたちの姿は、出会った人の多くに他人事ではない問題意識を蘇らせる。そして、多様な人間が集うことができる絶妙な距離感からは、学ぶことが多い。それはメンバーたちが体ひとつで世の中を渡り歩き、多くがその場限りの人間関係の中、過酷な労働現場で力を合わせて何かを成し遂げる「仕事」から身につけたものだろうと推測する。なにより注目すべきなのは、そこに豊かな生活の知恵や人間同士の



一緒にいれば表情がほぐれる

コミュニケーションがあり、それを楽しむ力が備えられていることだ。現在の社会環境では得難い経験と技術であり、いびつな関係社会の中では身につけるべき知恵として、伝承されていくべきである。

「むすび」ではどうしても他の仲間と折り合って活動を続けることが困難な人も多い。飲酒、金銭の貸し借り、依存、暴力、精神的に無理ができず去って行く人もいる。しかし退いた後も部屋に仲間との集合写真を飾ったり、誕生日の時にもらった仲間の寄せ書きを貼ったりしているメンバーもいる。多くのメンバーが「誕生日を祝ってもらったのは初めて」「長い間写真を撮ってもらったこともなかった」と、自分が写った写真や誕生日カードを見て感慨を深くする。一線を退いたメンバーや近隣に住む男性たちが、故人に線香をあげさせてくれ、としばしその場に縁を結ぶこともある。亡くなった人のことを誰かと一緒に語れることは縁であるし、思い出の中に蘇ってくる人たちとも深い縁で結ばれている。縁というものは自分がその場にいる理由みたいなもので、結ぶのも解くのも自分次第ということなのだろうか。

## 相互扶助型社会へ

「むすび」というごく小さなコミュニティの中で、人生をより良く充実させていく人もいれば、うまくいかずにはみ出てしまったり、未練を残しても去っていかざるを得なくなったり、そこから新たな道に踏み出せる人もいるだろうが、それは人が集まれば生じる、どこか共同体でも見ることでできる現象である。誰かが去って行くたびに問題は何だったのか反省も交えつつ振り返るが、実際、考えてもどうにもならないことも多く、去っていった彼らがまたどこか安住できる場所を見つけることを祈るしかない。

小さく、特に声をもたない、どちらかというと「面倒なことになったり誰かに迷惑をかけるなら、自分が身を引いたほうがいい」と思いがち人が多いグループでは、強力なリーダーシップや主張が強すぎるメンバーがいると、全体の輝きは一気に衰えてしまう。小さな点で支え合い、「お互いさま」が言える関係。社会の暴力の中で身を潜めて生きてきたような人たちにとっては、こういったグループとしての立ち位置が必要と思ひ、活動を進めてきた。「むすび」は今こうであるが、違う人たちが集まれば、また違う立ち位置ができるのだと思う。社会の中に、自分が等身大で人と関われる居場所がたくさんあること、そこから漏れてしまっても別に行ける場所があること、柔軟にひとりひとりのケースが検討してもらええる地域社会であればと願う。

「むすび」の紙芝居は、メンバーたちの生きる姿そのものが魅力となっている。だからこそ観客は現実の苦悩や、そこから生まれる希望を見出す。紙芝居の活動がメンバーたちの望んでいた老後かどうかは定かではないが、それを理由に日常的な寄り合いが生まれ、心身の痛みを紛らわせているのは事実であろう。人生のさいごに出会う仲間と、当たり前の日常を築き、人間らしい感情や自尊心、思い出を育む。最後まで欲や嘘もついてくるが、そういった人間の生の姿を若い世代に見せることが「むすび」のメンバーたちが生きる役割にもなっており、自分たちのみならず接した人たちの生きる力につながっていると信じる。先にも述べたが、助けることで救われる、そのような相互扶助型社会に届くには課題も多いが、無縁と見られる人たちの中にも縁は多様に息づいているのである。それはメンバーの葬儀で泣いていたヘルパーや、行きつけの喫茶店で「最近あのおじいちゃん元気？」と聞くマスター、メンバーが語る過去の思い出や、漏らす言葉の奥にも生きる支えとなっている誰かを見つけることができる。現在、問題なのは、それを対等な関係において分かち合える人が圧倒的に少ないことである。そして、誰もが孤独とは無縁でないという前提と共感を抜きにして、一方向にしか進まない人間関係の未熟さがあると思われる。自称「支援者」たちが人間としてより成長し、権力や経済力、体力や発言力、あらゆる力関係を

超えて、互いのしあわせをより具体的に想像できるようになる。そのような成熟した社会で血の通った相互扶助を築いていくこと。ここに希望を育む第一歩があるのだと、自分にも大きく喝を入れて本稿を終える。

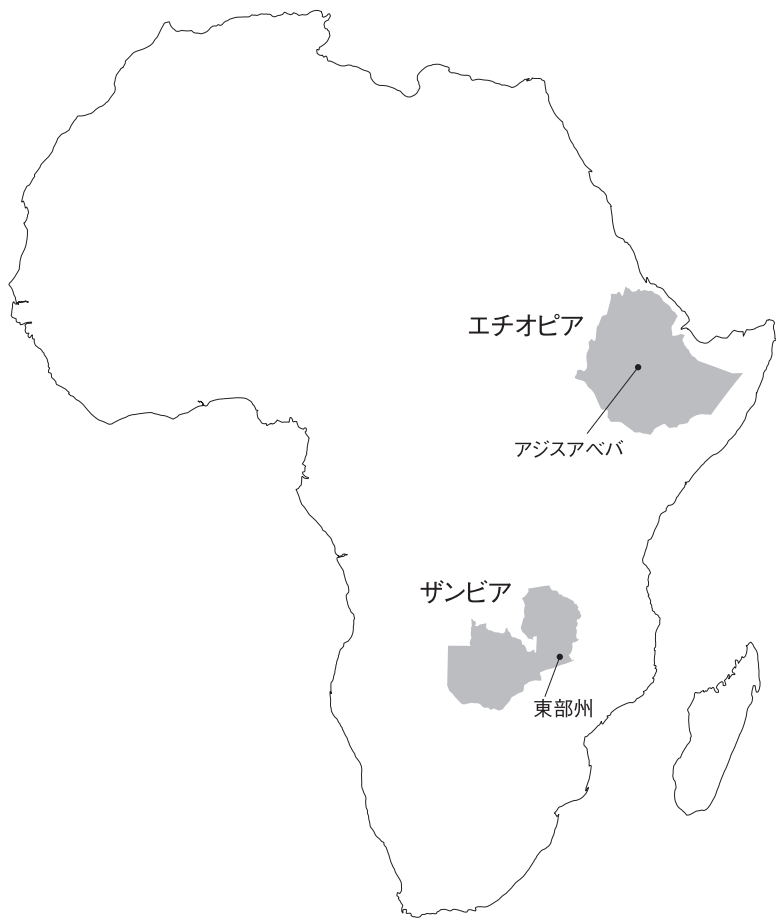
\*1 住所不定者を多く受け入れる病院。

### 第3部 アフリカの実践から

釜ヶ崎の面積は、約0.6平方キロメートル。新今宮の駅から、西成警察署やら三角公園の横を通り抜けて今船のロータリー跡まで、15分もあれば歩いてしまう。これに対してアフリカ大陸は、中国とアメリカ合衆国とヨーロッパ諸国を合わせたのと同じくらいの面積があり、エジプトから南アフリカ共和国まで、大陸を南北に縦断するフライトは、直行便で8時間も要する。

アフリカは多様性の大陸である。アフリカ大陸には50を超える国があるが、そこで話される言語は、一説には3000を数える。なりわいも、文化も、信じる道徳も異なる人びとが、ときにぶつかりながら共存する場所である。アフリカと釜ヶ崎のどこが似ているのかと尋ねられれば、それは多様な生き方を飲み込む、ふところの深さだろう。その限りにおいてアフリカは釜ヶ崎と比較できるのであり、釜ヶ崎は日本社会のなかで例外的にアフリカ的な場所だと言える。

福島第一原発の事故が伝えられたとき、アフリカの友人が「日本に住めなくなったらこちらに来て暮らしたらいいよ」と言ってくれたことがある。「どうするかはあとで考えたらいいから、うちの長屋、うちの村においてよ」ととっさに言えるのがアフリカである。とはいえ、アフリカに社会的な孤立や排除の経験がない、というわけでは決していない。続くふたつの章は、ザンビア東部州の村とエチオピアの首都アジスアベバで、孤独に直面しながらあらたな連帯を築く営みを続けてきた人びとについて、書き留めたものである。(西真如)





## 第7章 ザンビアのハンセン病回復者村における生活―病いと生きるコミュニティ

姜明江

### 1 はじめに

「あの村にいったらみなさい。ハンセン病だった人たちの村だ。まじめでとてもよく働く人たちが住んでいるから。外国人の君が住むにも安全だろう」アフリカのザンビアという国で、調査の拠点地をさがしてはうまくいかず途方にくれる私に、友人になったザンビア人がくれたアドバイスだった。

ザンビアは、アフリカ大陸の南部に位置する内陸国である。日本の約2倍の国土に1340万人が住んでいる。首都ルサカの発展はめざましく、中心部の朝夕の渋滞は毎日のこととなり、最近新しくできた大型のショッピングモールは華やかに飾りつけられている。一方で、ルサカから少し足を延ばすと、トウモロコシ畑や雑木林が広がり、牛やヤギが草を食み、重そうな薪の束を頭にのせた女性の姿がみられるようになる。さらにその先を進むと、車の数もめっきり減って、ときおり小さな農村があらわれるだけとなり、一本道の道路が地平線までつながる広大な大地が広がっている。

筆者はこのザンビアで、2007年から地域医療に関する調査をはじめた。調査地は農村部にしようと決めてお

り、いくつか候補の地域はあったものの、一つ拠点となる調査村を決めなければならなかった。人づてにさまざまな土地を訪れるうちに、ザンビア東部州にたどりついた。そこには、あるキリスト教の病院があり、そのスタッフを紹介してもらったことができたため、ずうずうしくも訪ねて行ったのだ。東部州の州都から、舗装されていないでこぼこ道を車で1時間くらいいくと、トウモロコシ畑と森の間に、その病院、ムロンガ病院はふとあらわれた。

病院の事務長のはからいで、非常にありがたいことに、その病院のゲストハウスに住まわせてもらえることになり、そこから調査地となる村をさがしはじめた。病院のスタッフはとても親切で、暇な時間に村につれていくてくれたり、農村への訪問診療の際には一緒にいって声をかけてくれるようになり、いくつかの村を訪れることができた。しかし、時期はちょうど8月の乾期。農村では、雨期は主食であるトウモロコシの栽培で非常に忙しいのだが、乾期に入ると農作業もすこし楽になるせいもあって、男性たちが朝から飲んだくれている。村を訪ねていても、村長含め、男性たちはすでにできあがっていて、なかなか話が進まない。いくつか候補地はしぼったものの、ことが進まないことを心配した友人が言ったのが、冒頭の言葉である。そして、その村、ウモヨ村に何度か通い、なにかの縁なのか、村長とも村の人たちとも話がうまく進み、なにより、女性たちが明るく私を受け入れてくれたこともあって、私はその村を調査の拠点にすることに決めた。このウモヨ村が、過去にハンセン病をわずらい、治療によって回復した人たちがつくりあげた村（ハンセン病回復者村）だったのである。

回復者村は、ザンビア各州に点在している。このような回復者村は他のアフリカ諸国やアジア、南米でもみられ、そのほとんどが、ハンセン病療養所が存在した場所の近隣につくられた。ウモヨ村も同様に、療養所を退所し、故郷に帰らないことを決めた、もしくは故郷に帰ることができなかった回復者たちがつくりあげた村である。医療基盤の乏しいザンビアで、ハンセン病を発症した者は、医師にみてもらうことも難しく、多くの場合は村で症状を悪化させるしかなかった。治療が遅れることによりおこる見た目の変化は、ハンセン病について知識を

もたない人びとに恐怖を与えた。そのため、ハンセン病の症状をみせる人は、他の村人たちから強く排除され、村での自分の居場所を失い、つらい日々を送ることになった。そのようななか、ハンセン病療養所で治療を受けることができるようになった。そうして治療が求めたザンビア各地、時には隣国のマラウイやモザンビークからもムロンガの療養所に集まってきた。そうして治療が終わったのも、この地に残ることを選択した人たちが、ウモヨ村に移ってきたのである。

そのような、ザンビアのハンセン病回復者である人びとの、過去から現在をこの章ではとりあげる。まず、次節でハンセン病という病気について概観し、3節ではザンビアにおける過去のハンセン病の認識と、治療に関する歴史について古い文献からふりかえる。4節では、ウモヨ村に住む回復者の女性レニの語りを紹介したい。彼女は故郷で病者としていかに扱われ、どうやって治療にたどりついたのか。ハンセン病という病いのせいで、少女の生活は一転したのである。次の5節と6節では、ウモヨ村の歴史をふりかえる。回復者村ウモヨは、誰がどのようないきさつでつくったのか。そして、村に移り住んだ人たちの生活のようすについてとりあげる。つづく7節では、現在の回復者たちの生活に焦点をあてる。後遺症をもち高齢化の進むこれらの生活や生計を支えるものは何なのか。筆者がかれらと



ムロンガの療養所：レンガ造りの平屋で、男女別の大部屋と食堂がある。

ともに生活し、そこで出会った村人たちの姿を掘りさげたい。

かれらひとりひとりが、故郷で心をひどく痛めるような経験をし、治療にたどりつき、現在ウモヨ村で後遺症を抱えながら生活している。しかし、現在のウモヨ村では、少し眺めただけでは他の村となんら変わらない、のどかな風景が広がっている。20世紀のザンビア社会を生きてきたかれらの経験や生活実践は、なにをうつつしんでいるのだろうか。そのようなことを考えながら、筆をすすめたい【\*】。

## 2 ハンセン病の歴史

ハンセン病は、「らい菌」と呼ばれる細菌によって引き起こされる慢性の感染症である【\*】。1873年にノルウェー人のアルマウエル・ハンセンによって発見された。日本では古来よりハンセン病を「癩(らい)病」と呼んでいたが、現在では彼の名をとり「ハンセン病」と呼ぶように改められた。

らい菌は非常に弱い菌である。そのためこの菌の感染力はとても弱く、感染しても、症状もでないまま自然に治ることがほとんどである。また、有効な薬剤が発見されたことにより、現在では確実に治癒する病気となった。そして、ひとたび飲み薬による治療をはじめれば、数日でその感染性は失われる。

ハンセン病は現在では、早期発見と適切な治療により、後遺症を残さずに治すことが可能である。しかし、発見が遅れたり、適切な治療がおこなわれないと、身体障害を残す場合がある。とくに治療薬がなかった時代に発症した人たちのなかには、ハンセン病は治ったとしても、重い身体障害を残す人が少なからずいた。また、治療法が確立したあとも、医療基盤の充実していない国々、たとえばここでとりあげるザンビアを含むアフリカの国

や、紛争などで医療へのアクセスが難しい地域では、誤った診断やすぐに薬が手に入らないといった問題により、症状を悪化させ障害を残してしまうことがある。

障害の多くは、顔や手足といった目に見えやすい部分におこる。最初の兆候は、皮膚におこりやすい。斑紋（白や赤褐色のあざ）がおこったり、顔が腫れあがったりする。末梢神経が侵されると、眉や頭髮が抜け落ちたり、失明や手足の変形をおこすといったさまざまな障害が残される。感覚の障害が進行すると、痛みや熱さ、冷たさなどを感じるができなくなる。そのため、けがややけどをしてしまっても気づかず、手足の指を失ってしまうなど、二次的な障害を引き起こすことも少なくない。

1940年代から有効な薬剤プロミンの開発が進み、1981年にはMDT（多剤併用療法）と呼ばれる、飲み薬を組み合わせた簡便な治療法が開発された。このような治療法の開発やWHO<sup>\*)</sup>やNGOの活動の成果もあり、新しくハンセン病を発症する人の数は減ってきている。MDT普及前には世界で1000万人以上いたとされるハンセン病患者も、2011年の新規発症者は22万人弱まで減った（WHO 2012a）。日本においても新規発症してハンセン病と診断される人は激減しており、毎年数名ほどとなっている。2011年には日本人では2名であった（厚生労働省 2012）。

治療法が確立される以前には、世界の多くの国で、ハンセン病の根絶を目的とした隔離政策が導入された。患者や回復者を療養所や定着村に送り込み、社会から隔絶した生活を強要した。外来治療が可能になると、各地で隔離政策が廃止されていったが、療養所や定着村に住んでいた人たちが故郷に帰ることは簡単なことではなかった。そのため、療養所や定着村が今でも回復者やその家族の居住区として残されているところも多い。

日本でも、隔離政策がおこなわれた。ハンセン病患者の隔離に関する法律は、明治時代以降、100年の間に改定を受ける度によりきびしく強制的なものに姿をかえていった。ひとたび療養所に入るとそこからすることは

許されなかった。ハンセン病は遺伝しないとわかってからも、断種や墮胎（妊娠中絶）が強制的におこなわれ、結婚しても子どもをもつことは許されなかった。その結果、ハンセン病は一度かかると故郷にも帰ることのできない恐ろしい病気という誤った認識を国民に植え付けることとなり、差別や偏見を助長することにもなった。

この隔離を定めたら予防法が廃止されるのは、時を経て1996年（平成8年）4月のことであった。ここまでのどりついたのは、療養所で暮らす人びとの長きにわたる正当な権利を求める運動によるところが非常に大きかった。しかし、そのときすでに療養所の入居者の平均年齢は70歳を超えていた。療養所のなかで失った時間を取り戻すには、この廃止はあまりにも遅すぎたといえよう。国の謝罪はすでに亡くなった人たちには届かない。また廃止されたからといって、すぐさま社会に残るこの病気に関する誤った認識がなくなるわけではない。回復者である平沢保治氏は著書のなかで、故郷のことを「世界でいちばん遠い場所」とたとえ、また「ハンセン病は治る病気になっても社会的にはまだ治る病気とはなっていない。社会的に治る病気にならないといけない」と記している（平沢 2005）。2012年5月1日現在で、国立のハンセン病療養所は全国に13か所、2134人の入所者がいて、その平均年齢は82・1歳であると報告されている（厚生労働省 2012）。

### 3 ザンビアにおけるハンセン病治療

世界の多くの地域で、ハンセン病は身体におこる疾患としてだけでなく、きわめて特異な意味づけをされてきた。「前世の悪行の報い」や「天刑」のためにハンセン病にかかる、といった考え方はアフリカ諸国にもあり、ザンビアも例外ではなかった。20世紀初頭のザンビアにおけるハンセン病観について書かれたレポートによると、

しかけ畏に特別な薬がしこんでありそこから動物や魚を盗むとかかるとか、妻を寝取られた夫が、敵の男性にハンセン病になる魔法をかける、カバや赤い魚を食べるとハンセン病になる、などという認識もあったという。発症時、肌が赤くなることから、赤いものを食べることは病状を悪化させると思われていたようである。

上記のようにハンセン病は罪悪と結び付けられたと同時に、他方で人びとはハンセン病が「感染」するとも考えていたようである。ザンビア北部のある村では、ハンセン病の症状を呈する者は、村から遠く外れたところに小屋を構えなければいけなかったという。食料を与えることができるのは結婚していない女性のみで、小屋までの道を後ろ向きに歩かなければならなかった。さらに、小屋まで食事を運ぶのではなく、小屋と村の中間地点に食料を置き去りにした場合もあったという。患者は、劣悪な生活環境のなかで、飢えのために亡くなることもあったとも、このレポートには記されている。1915年から1920年頃になると、ハンセン病療養所が少しずつ増えてきたこと、また中央政府のハンセン病患者の管理が強まったことにより、そのころから人びとは治療を求め、近代医療を頼るようになったという(Griffiths 1965)。

ザンビアのハンセン病治療は、欧米からやってくるキリスト教のミッション(伝道者のグループ)がその多くを担ってきた歴史がある。ザンビアは20世紀はじめにイギリスの植民地となり、そのころにはミッションが多く布教に訪れるようになった。かれらにとって病院経営は布教活動の一環であった。ミッションが経営する病院のなかにはハンセン病の治療施設をそなえるものもあり、各地からハンセン病と診断された人たちが治療を求め訪れた。1959年にはハンセン病の治療施設が30か所あったと報告されている(International Journal of Leprosy 1961)。

ミッション系の病院にハンセン病治療ができる療養所が併設され、その情報が広まると、患者たちは地元の治療院から療養所に送られたり、また各自うわさを聞きつけて療養所にやってきた。転院はときに医療者や行政、民

族内の権威者により半ば強制的におこなわれることもあったそうで、日本の状況に似たこともおこなわれていたようだ。一方で、療養所ごとの決まりは各ミッションが決めていて、日本のような厳しい隔離政策をおこなっているところはなかったようである。1960年頃、ザンビアがまだイギリス領だった時代のいくつかのハンセン病病院や療養所の患者リストには、治療が終われば退院となった様子や、入院中でも一時的に故郷に戻ったり親戚を訪れたりといった治療の中休みをとっている患者の名前もそこに記録されていた。しかし、やはり故郷には戻れないという患者や回復者も多く、そのような患者や回復者を受け入れる回復者村が、療養所の近隣につくられていた。治療施設周辺に一つもしくは複数の回復者村がつけられたと考えると、1960年代頃には数十の回復者村があったのかもしれない。

現在は、公立の病院や診療所すべてでハンセン病の診断・治療ができるとされており、ある特定の医療施設を「ハンセン病専門病院」や「ハンセン病療養所」と位置づけることを、国としてはおこなっていない(Seshamani et al. 2002)【\*4】。しかし、実際は、どこの病院や診療所でも治療薬が手に入るわけではないようだ。そのため、専門スタッフがいたり薬の確保されている、療養所を併設している病院に通うケースが多いようである。

WHOの発表した統計データでは、2011年に登録されている患者数は620人、新規に発見された人数は376人と報告されている。そのなかには、子どもの患者や、治療の遅れから障害を重くしてしまった患者も含まれている(WHO 2012b)。

ハンセン病以外にも、エイズや結核といった感染症問題を抱えるザンビアでは、ハンセン病対策に高い優先順位をつけることはむずかしいかもしれない。また、ザンビアの医療は財政をふくめ、国際機関やNGOなど外部からの援助に支えられているのが現状で、海外の経済状況に影響を受けやすい。そのため、ハンセン病対策に関しては後手に回されがちである。回復者へのケアについては、とくに行政による対策はとられておらず、関心は

極めて低い。障害者対策自体も進んでいないのが現状である。

では、重い障害が残った回復者たちは、どのような暮らしを現在送っているのだろうか。次節から、ウモヨ村に焦点をあて、ザンビアにおけるハンセン病回復者の生活についてみつめていくことにする。

#### 4 発症、故郷での生活、そして療養所へ

レニはムロンガ病院の療養所で治療を受け、その後ウモヨ村に移り住んだ女性である。夫も以前ムロンガで治療を受けていて、コロニーで出会って結婚した。この病気のために、手足の指を一部失っており日常生活に不自由があるものの、70代になった今も家事や畑仕事に精をだす毎日を送っている。娘家族もすぐなりに住んでいて、やんちゃな孫たちの世話も日課となっている。

レニは、独立前のジンバブエで生まれ、幼いころザンビア東部の小さな村に家族で移り住みそこで育った。葉ぶき屋根と土壁でできた小さな住居が集まった、平凡な田舎の村である。その村で、レニは家族や親せきたちと穏やかに暮らしていた。ところが、まだ10歳になるかならないかのときに、皮膚に異変が起きた。ハンセン病を発症したのである。

村人たちは、レニの状態を知るやいなや、彼女を村から追い出した。村から離れた森のなかに小屋をつくり、そこにまだ幼い彼女を追いやったのである。食事をつくるにも道具もなにも持っておらず、割れて捨てられている土器の破片を拾ってきては、それを使って調理した。お皿も持っていなかったから、その破片に食べ物をのせて食べるしかなかった。残したご飯は、かぼちゃの葉にのせて保存した。そんなレニの姿に気づいたある村人は、

皿を森のなかに投げ込んできたという。夜寝るときは、木から葉をむしりとってきて、身体の下に引いて寝るような生活だった。現在のウモヨでさえ、夜になるとハイエナなどの野生動物があらわれ、それを追い払おうとする村飼いの犬たちの雄叫びで目が覚めることがある。幼い少女が一人きりで、森のなかで暮らすのは、恐ろしくつらいことだっただろう。

村人は、レニが病気に侵されていく様子を、民族の王であるパラマウント・チーフ（\*）に報告した。「誰も彼女を助けることができない。病気がひどすぎる」と。しかし、病いに侵されたレニを看護する者は村には一人もいなかった。

そのようなつらい生活を幼い彼女が送っていることを、あるミッションが知ることとなる。ひょっとすると、パラマウント・チーフから、話が伝わったのかもしれない。ある日、ミッションの白人がやってきて、食べ物と服や毛布をくれたという。それは、その後何度か続き、村人たちの知るところとなった。ミッションから渡される服や毛布は、当時のその地では、簡単に手に入るものではなかった。すると、一度は彼女を追い出した人びとが、彼女が白人からもらっている物資を手にいれようと、近づいてきたのである。彼女が外出する時には、服や食べ物盗みに入る始末だった。

そうするうちに、パラマウント・チーフの使者がレニのもとに送られてきた。彼女の様子を調べにやってきたのである。彼女は使者に病気の状態や、森でのつらい生活について説明した。そして、その状況を知った使者は、彼女を病院へつれていった。レニが森へ追いやられてから、半年が過ぎていた。レニは、村をでて治療を受けることになったのである。

その病院は、彼女の住んでいた地域にあったキリスト教系の病院で、そこにも療養所があった。そこで彼女は治療を続けていたのだが、ムロンガ病院でより専門的な治療を受けるよう告げられ、この地にやってくることに

なったのである。彼女のいた村から、ムロンガまで約200km、政府とミッションの車を乗り継ぎ送られて、若い彼女はムロンガに一人でやってきたのだった。

ウモヨ村に住む回復者はみな、故郷では治療を受けることができず、ムロンガ病院の療養所までやってくることになった人たちである。あるときには、300人以上がこの療養所とミッションの用意した住居（後述するコロニーのこと）に住んでいたという。1960年ころのムロンガの療養所に関する記録によると、治療を終えて、出身の村に戻る回復者もいた。ただ、やはり、当時のザンビアにおいても、世界各地や日本でおきていたことと同様に、ハンセン病を発症する前の生活に戻ることは難しかったのである。

## 5 ハンセン病回復者村ウモヨのはじまり

ウモヨ村は、ザンビア東部州の州都から40kmほど離れた、トウモロコシ畑が広がるのどかな丘陵地にある。森をぬけて小高い丘に登ると、地平線まで広がるサバナを見渡せる、解放感のある場所にある。

ウモヨ村はこれまでも述べてきたように、近郊にあるムロンガ病院のハンセン病療養所を退所した回復者によってはじまった。ウモヨ村の住民とムロンガ病院スタッフからの聞き取りをもとに、療養所とウモヨ村の歴史についてまず記したい。

1920年頃、この東部州の地にあるキリスト教系ミッションが訪れるようになり、ムロンガ病院とハンセン病療養所を設立した。当時のザンビアでは、ハンセン病発症者を治療する医療施設は数少なく、この療養所には治療を求める患者、また後遺症に対するケアを求める回復者が各地から集まってきた。東部州のみならず、ザン

ビア各州、さらには隣国のモザンビークやマラウィからも人びとは治療を求めこの療養所を訪れた。療養所自体は20人ほどで満床になるくらいの規模であるが、療養所の建物の横には、治療が必要であるが入院するほどではなく、自身で、もしくは家族の手助けがあれば日常生活を送ることが可能な患者や回復者が住む住居群が整備されていた。この住居群はレパコロニー（以下、コロニーと記す）と人びとに呼ばれ、療養所はレプロサリウムとよばれていたという。コロニーはひとつの村ほどの規模がありながらも、ミッションが整備し管理する病院の一部であった。当時は、失明など身体障害を抱える発症者も多く、身の回りのことを手伝ってもらうために、療養所に家族を伴ってくるケースが少なからずみられた。そこで、コロニーに家族とともに住む患者や回復者も多かった。コロニーでは、患者や回復者たちとその家族が利用できる学校、商店や畑も提供されていた。日本のハンセン病政策とは違い、ここでは結婚し子どもをもつことに問題はなかった。療養所やコロニーに住む患者、回復者やその家族がここで出会い結婚し、子どもをもつことはむしろ自然なことであった。そうして、家庭を築き一家でコロニーに住む者も多くみられた。

多くの患者や回復者が治療を求めて集まってきた一方で、治療を終了した者は退所することになる。しかし、治療が終了した人たちにも、きわめて強い差別が襲いかかった。故郷の人びとが戻ることを許してくれない、戻れたとしても、社会行事に参加することができない、共同の井戸を使わせてもらえないといった困難に直面した。ハンセン病からは回復したものの、手足の障害や皮膚の潰瘍、失明といった後遺症に悩まされ、医療施設から離れることに不安を感じる人たちも多かった。

そこで、退所を言い渡された患者や回復者たちは、ミッションの医師に自分たちの苦しい立場を訴えた。パラマウント・チーフに移住できる場所を与えてくれるよう頼んでほしいと願い出たのである。

「私たちには戻るところがありません。治ったから家に帰りなさい。ドクター、あなたはそう言う。でも、私たちには戻るところがないのです」

「どうか、パラマウント・チーフのところを訪ねて、私たちが住むことができる土地をお願いしてください」私たちの訴えを聞いて、ドクターはパラマウント・チーフのもとを訪ね、私たちの窮状を説明した。

そして、パラマウント・チーフにより、ウモヨの土地を使うことが許された。1954年のことだった。それ以来、多くの家族がこの村に移ってきた。私たちは幸せだ。ここでは差別されない。もとい村には戻らないことを決めた。いま、ここが私の故郷、そして生きる場所なのだ。

ウモヨ村の古老たちが語ってくれた、村の歴史の一部である。医師からかれらの苦しい状況を聞いたパラマウント・チーフは、彼の部下が住んでいた土地を患者や回復者も利用できるように手配し、またその場所に新しい村をつくることを許した。この地に残ることを選んだ回復者たちが、ウモヨ村に移り住むようになったのである。

## 6 ウモヨ村の生活

定住地をようやく手にした回復者たちはウモヨ村に移り住むことができるようになった。一方で周辺の村の人たちはウモヨ村ができることに反対しなかったのだろうか。ウモヨ村の隣村「\*」の長老たちに話を聞いたところ、「私たちはウモヨの住民を恐れたよ。同じ水を飲むのも拒んだ。かれらの見た目は怖かったから。病気がうつるのが怖かったからね」と語っている。一方でこの地を治めるパラマウント・チーフの命令には背けなかったよう

である。元来、この地域はンゴニという民族が大部分をしめており、ウモヨ周辺の村の住民のほとんどがンゴニであるパラマウント・チーフはその民族の象徴でもあり、その権威は絶大である。そのため、「ウモヨ村ができることに問題は起きなかった。私たちはチーフを尊敬している。彼の言うことに私たちは従わなければいけない」とも語っている。このようにウモヨ村の住民に恐怖心を抱きつつも、パラマウント・チーフの命令であったために、ウモヨ村ができることを認めた背景が隣村の住民の語りから浮かびあがる。

ウモヨ村に移り住んだ回復者たちはどのような生活を送っていたのだろうか。ウモヨ村ができた当時は、欧米のキリスト教団体が熱心にハンセン病対策をおこなっていた時期でもあった。そのような背景もあり、療養所とコロニーの入所者やウモヨ村の住民に対し、手厚い援助がおこなわれていた。主食となるトウモロコシ、塩や食用油、また薪や衣服なども支給されていた。コロニーでは、畑仕事が可能な軽傷者には畑が与えられた。そこで収穫された作物は自分で食べてもよかったし、ジャガイモなど一部の収穫物はミッションに売ることができたという。そして、その買い取られた野菜はミッションがコロニーの住民に無料で配布した。コロニーの住居はミッションによって建てられていたが、ウモヨ村にも建材や建築のサポートがあったという\*。

このような暮らしは、この地域では恵まれたものだった。農



ムロンガ病院とウモヨ村をつなぐ道：  
牛車は収穫、引っ越し、病人の搬送という色々な用途で使われる。

業に頼るこの地域での生活は天候の影響を受けやすく、すべてが手作業の肉体労働である。また、衣類や食用油といった品物は高価で、なによりこの地ではなかなか手に入りにくかった。そこで、周辺の村の住民のなかには、ウモヨ村の回復者のもとで働き、対価として食料や衣類を手にいれたり、買い受ける者がでてきた。たとえば、回復者の住居周囲の草刈りや、家の土壁を塗りなおすといった日雇い労働をし、援助物資を手に入れるのである。ただ、ウモヨ村の住民が単純に他村より裕福だったため、労働力を雇ったのではなく、援助物資を提供することとひきかえに、後遺症や高齢などの理由により自分たちが働けない部分を補うという意味もあったと考えられる。ウモヨ村の回復者の一人は「かれらは最初私たちを差別した。でも、かれらは私たちに食べ物をくれとやってきた。そうするうちに私たちを怖がることはなくなった」と言う。また隣村で暮らすある男性は「昔は怖かったけど、今は大丈夫だ。かれらは治療を終えた。ドクターもそう言っている」と語っている。

故郷に切り離され、最初は周りの村の住民たちに恐れ避けられたウモヨ村の回復者であったが、時の流れとともに周囲の村とも交流が生まれ、この地の一つの村としてその存在を確立していったのである。

かれらは、病気に対する偏見からつらい生活が待ち受けていた故郷を離れ、ウモヨ村に移り住みようやく安住の地を手に入れた。また、コロニーやウモヨ村で結婚し、子どもをもつ回復者も多くなった。そのためウモヨ村には回復者だけではなく、その子孫も多く住み、一つの村としての形をつくりあげていった。もちろん、新しく移り住んでくる回復者は毎年いたし、さまざまな後遺症をもつ回復者の日常生活は、常に困難をとまっていた。こここの生活はほぼ自給自足であり、農作業が困難な回復者たちの援助にたよる生活は続いていた。

しかし、その生活を大きくゆるがす出来事がおこった。ミッションが、コロニーの閉鎖と援助の打ち切りを決定したのである。1980年代はじめのことである。コロニーに残っていた患者や回復者は、ミッションの用意したウモヨ村内の家に移動させられた。

コロニーが閉鎖されたこともあり、ウモヨ村に移り住む回復者は減った。コロニーが閉鎖された理由は、定かではない。しかし、その背景には、ハンセン病を新しく発症する人が減ったこと、発症しても薬の開発により障害が重症になることなく治療を終えることができ、入院や療養所での治療が不要になったことがあげられるかもしれない。

## 7 ウモヨ村の現在

ミッションからの援助が打ち切られたあとも、回復者たちはウモヨ村での生活を続けてきた。ウモヨの世帯のほとんどが畑を持ち、主食であるトウモロコシを栽培しながら、自給自足に近い生活をしている。後遺症を抱え、高齢となった回復者たちは、どのようにして暮らしを成り立たせているのだろうか。このことを説明するまえに、現在のウモヨ村の人口構成をみておきたい。2008年の調査では、この村では80世帯、約400人が生活しており、うち回復者は33人であった。また回復者の平均年齢は60・8歳であった<sup>[\*]</sup>。

ウモヨ村で生活する回復者の平均年齢が高いのは、ムロンガ病院に併設されたコロニーが1985年に閉鎖されたのち、新たな回復者の流入がほとんどなくなったためである。そして現在では、村の人口の大半をハンセン病回復者ではない者（ハンセン病をわずらった経験のない者）が占めている。その多くは、回復者の子孫である。日本の隔離政策とは違い、療養所やコロニーにおいての婚姻や子どもをもつことは自由であった。そこで、回復者どうし、また回復者と回復者の子どもといったカップルの婚姻が頻繁にみられた。私の面倒をみてくれた家族は、お父さんが回復者、お母さんは回復者どうしの夫婦の娘であった。コロニーで出会い、コロニーの教会



で結婚式をあげ、その後ウモヨに移ってきたそうだ。年齢が高いカップルでは、このような回復者とうだったり、回復者とその家族といった組み合わせがよくみられる。

加えて、回復者ではない者がウモヨ村に移り住んでくる場合もある。たとえば他の村で生まれ育った女性が、回復者子孫の男性と結婚してウモヨ村に入ってくる場合がある。そのほか、ウモヨ村の住民とは血縁も婚姻関係もない家族やカップルが、ウモヨ村に引っ越してこくることもある。この村はムロンガ病院に近く、病院での日雇い仕事に就きやすいため、収入を求めてやってくるのである。またウモヨ村では、飲酒やたばこが宗教上禁止されていることや、この章のはじめにも記したが、「仕事に熱心なまじめな村」という見方をされていることから、これらを理由に流入してくるカップルもあった<sup>\*)20</sup>。

### (1) 回復者(う)の連帯

ウモヨの世帯のほとんどが主食であるトウモロコシを栽培し自給している。おかずとなる野菜は現金で購入することもできるが、多くの世帯で自給用の野菜も栽培している。農作業は、鍬や鎌といった農具をもちいて手作業でおこなう。水汲みや薪集めは若者であっても重労働である。食べ物を調理するときは、もちろん細かい手作業も必要となってくる。

療養所を出てこの村に移住してきた回復者たちの多くは、ハンセン病治療が確立される前に発症し治療を受けたために、なんらかの後遺症を抱えている。手の指をほとんど失ってしまった、足の裏に深い潰瘍ができてしまい痛くて歩けない、といった症状を訴える回復者も多い。回復者が村での生活を続けていける理由の一つは、回復者がお互いの生活を支えあってきたからである。

ズルーは、ウモヨ村で一人暮らしをしている81歳の男性である。ハンセン病の後遺症を抱える彼は、歩くには杖が必要で、また手の指も動かさづらい。彼は農作業がほとんどできず、食料の入手が難しい。息子家族は同村内に住しているが、息子自身も生活は安定しておらず、ズルーへの十分なサポートはできていない状況である。

そのようななか、彼は隣人であるピリと共同生活ともいえるような密接な関係をつくりあげている。かれらは、ズルーはザンビア出身、ピリはマラウィ出身で民族も違う。ピリは、77歳の男性で、彼もまたムロンガ病院で治療を受けた回復者である。ピリは数年前に妻を病気でなくし、一人で暮らしている。

ズルーは先ほど述べたように農作業ができないため、食料を手に入れることができない。そこでピリが自分の畑から収穫された食料を提供し、それをどちらかが調理して、一緒に食べることにしている。

ピリは自分の畑の一部をズルーの息子に与えるなど、世代を超えた関わりもみられた。ピリの亡くなった妻には、前夫との間にフェイスという名の息子がいる。フェイスの妻が毎日ピリを訪れ、水汲みを手伝い、おかずをわけにくる。ピリがそれをズルーとわけていることを彼女もよく知っており、「二人でわければいいよ」と気前よく配達している。



畑仕事を終え、ウモヨ村に戻る女性たち：  
頭の上には早採りのトウモロコシが。焼いても茹でてもおいしい。

またズールーとピリは村内で、共同して軽作業をおこない、その収入を分けあっている。写真はふたりでトウモロコシの貯蔵庫をつくっているところである。これは、村に住む高齢の女性から作製を依頼されたものである。この仕事は、畑のように離れたところまで歩いていく必要もなく、1日に自分たちの好きなだけ進められるので、体調をみながら、またお互いにできないことをカバーしあいながら仕事をこなすことができる。このような回復者どうしの連帯は、他の回復者どうしでもみられ、お互いの生活をサポートしあっている。

回復者どうしのつながりは、時として次の世代にも引き継がれる。チョカは68歳の男性で、一人で暮らしている。チョカは高齢になり、畑をすべて耕すことが大変になってきたため、野菜畑の一部をクリスという若者に譲った。クリス自身はハンセン病の病歴はないが、彼の父であるンジョブは、チョカと同様にムロンガ病院で治療を受け、ウモヨに移住した経緯がある男性である。ンジョブはすでに亡くなっているが、クリスをはじめ彼の子どもたちは、現在でもウモヨ村で暮らしている。

チョカとンジョブはかつて、同じ時期にムロンガのコロニーに住み、治療を受けた経験がある。チョカは、両手の指の多くを失ってしまい、重い障害をもっている。チョカは家族がおらず、コロニーでも大変な生活を送っ



トウモロコシの貯蔵庫をつくるズールーとピリ：木の枝を集めてきて、上手に編みあげていく。

ていたのだが、ンジョブはそんな彼をよく手助けし、よい友人どうしでもあったという。その関係はお互いがウモヨに移り、ンジョブが亡くなるまで続いた。現在では息子のクリスが、何かとチョカの生活を助けている。何年前か前、チョカが故郷に戻らないといけない、のっぴきならない用事ができたことがある。しかし、彼は足にも重い障害をのこしており、数十km離れた彼の村まで、歩いて行くことは不可能である。そこで、クリスがチョカを自転車の後ろに乗せ、故郷の村まで連れて行ってあげた。クリスは、父親とチョカのつながりの深さを知っており、「父の友人だから」と、なにかと手助けをしてくれるという。

回復者たちは、療養所での治療終了後、それまでと生活環境の異なるウモヨ村という新天地で生活をはじめることとなった。そのようななかで、かれらはユニークなつながりをつくりあげていった。ムロンガでの治療経験をもとにしたケアのつながりは、回復者どうしだけでなく、世代を超えたつながりにもひろがっていたのである。

## (2) 援助をもとめる連帯

回復者が一対一でつながるだけではなく、回復者どうしが集まって行動をおこすこともある。援助のこない近年の状況に悩んだかれらは、政府からの援助を現実にしようと行政へ乗り込むことにした。2007年に州都の省庁へ請願にいったのだが、その際には全員ではなく、5名の代表者が赴いた。この5名は回復者のなかでも重い後遺症（とくに手足指の欠損、歩行困難）をもつ人たちで、あえて選んだそうだ。省庁の役人に、後遺症の問題を視覚的に訴える目的もあったのだろう。しかし、後遺症と高齢化に悩む回復者たちにとって、とりわけこの5人のように障害の重い者にとって、ほとんどが未舗装の道を自転車で40kmも離れた州都まで行くことは困難である。州都まで乗り合いタクシーに乗る手段があるが、その値段は安いものではなく、資金の捻出が難しい\*1。そこでムロンガ病院の事務長（ザンビア人）に交通手段の相談にいったところ、事務長が個人所有している車を

貸してくれることになった。また、運転手は病院のエンジニアの男性が引き受けた。

しかし、一度目の訪問では、思わしい返事が得られなかった。そのため、日をあけて再度、回復者たちは事務所を訪れ、援助を願い出た。しかし、そのときの回答は「州都の中心部から障害者支援の制度を整えていく。一足飛びに一つの農村だけとりあげて、援助することはできない」「ムロンガ病院のメンバーがあなただけの地区の福祉を担当しているから、彼に頼んでみればいい」と答えるのみで、願うような援助の約束はできなかったという。そこで代表者が病院に赴き、その福祉担当者に請願した。しかし、村人たちいわく、「考えてみようと云ったきり彼はなにもしない」という結果におわった。

結局、2007年10月に一度州都から援助が届いたきり、以降滞ったままである<sup>【\*註】</sup>。このようなかれらの行動は、村長が中心となり2012年になっても継続されている。ちなみに、ウモヨ村には村長が第一村長から第三まで3人いて、かれら3人ともが回復者である。

### (3) 教会のサポートグループ

これまで、回復者どうしの連帯がつくり出す助け合いについて記してきたが、回復者のなかには、そのような連帯をつくりあげることが苦手な人や、すでに療養所時代の友人を失くしてしまった人もいる。

バンダは70歳になる回復者の男性である。彼は、重度の後遺症を持ち、手足の指に変形があり、歩くときは杖を必要とする。村のなかに家族も近い血縁者もおらず、一人で生活している。

2008年、彼の畑にはトウモロコシが育ったものの、体力的にトウモロコシの収穫作業ができる状況でなかった。しかし、手伝う家族もおらず、人を雇うお金ももっていなかった。そこで、バンダは教会の若者たちに手伝ってもらえないか、村長に頼み込んだ。そこで村長がこの女性グループに話をつけ、彼女たちが収穫をおこなった。

しかし、収穫時期はだれもが忙しい。そして、自分の畑を優先したいものである。収穫時期を迎えたトウモロコシは盗難にあう可能性があるし、またこの地ではトウモロコシをお金の代わりとして物々交換に用いることができるので、トウモロコシの収穫はお金を手に入れるのと同じ意味をもっているのである。それゆえ、誰だってできるかぎり早く収穫物を手に入れたいのである。そのため、バンダの畑の収穫は、村人すべての収穫が一段落した最後におこなわれ、早い人に比べると1か月以上も遅れてようやく収穫物を手にすることができたのである。

ウモヨ村の教会にはいくつかの奉仕グループがあり、なかでも活発に活動しているのがバンダの収穫を手伝った女性グループである。ほかに、若者グループや、男性グループもある。女性グループのメンバーは、障害をもつ回復者や高齢者のために、草刈りや家の土壁の修繕などもおこなっている。必ず全員参加するわけでもなく、その日に集まれるメンバーがやってきては、回復者の生活を手伝っている。



高齢者の家周りの草刈りをする女性たち：  
自分たちの畑仕事が終わったあと、毎日すこしずつおこなう。

いくら回復者の連帯や村の女性たちが、回復者たちの生活をサポートしているとはいえ、日常生活においてかれらはまだまだ多くの問題に直面していることもここで追記すべきだろう。最後のバンダの例では、収穫はでき

たものの、その時期は遅くなるという不利な状況がおきた。また、ここで暮らすには水汲みや薪集めといった重労働がつきまとう。しかし、障害をもった高齢の回復者には大変な仕事である。手や足の神経に障害がのこり、温度や痛みを感じることでできない回復者が、調理をしようとして火傷をおってしまう例が頻発している。また、家事以外でも、二次障害が起こりうる。たとえば、最初の例にできたズールーは、以前、マリリアになったとき、悪寒がひどかったため焚火にあたって身体をあたたためていた。しかし、温度を感じることでできない足を火の近くにおいてしまい、すねに広範囲の火傷をおってしまった。

若い村人たちは、あれこれ回復者の身の上を案じ日々の生活を助けている。高齢で一人暮らしの回復者たちがこの村で、なんとか生活を送ることができているのは、かれらが子孫を持ち、その子どもたちが血縁関係なく回復者たちを手助けしていることも関係しているのだろう。ただ、やはり、回復者もある程度の日常生活上の自立が必要とされており、生活のなかの多くの危険と、つねに隣り合わせにしているのである。

## 8 おわりに

ウモヨ村からムロンガ病院まで、ゆるやかな坂道を歩いて1時間ほどの道のりである。しかし、ムロンガまでの1時間は、足の悪い回復者にとっては歩いていくのは困難だ。後遺症の治療を求めて療養所にとりついたとしても、常勤の医師や看護師はおらず、手当てをしてもらえるのはたいがい、一人の掃除夫である。

後遺症をもつ回復者にとって、日常生活はつねに危険をはらんだものであって、実際に二次的な外傷を起こす回復者はあとをたたない。しかし、適切な治療やアドバイスをおこなえる人材も資材も整っていない。回復者

は後遺症のケアに関して、医療に頼る気はとうに失くしたようで、我慢の限界まで症状を悪化させては、自己流のケアをおこなって治療を遅らせている。

ウモヨ村がつくられて年月がたった。すでに地域の村々のなかの一つとして溶け込み、回復者は子どもや孫の世代に囲まれて日々を送っている。かれらは畑仕事を早めに切りあげては隣村の飲み屋にこっそり向かい、たまの結婚式や葬儀の日は豪華な料理を楽しんでいる。身体障害や高齢化、そしてこの病気に対する社会からの特異な態度といった問題に直面しながらも、回復者たちが生活の質を保ち自立しているようにみえるのは、かれら独自ともいえるケアの連帯を紡ぎあげてきたからではないだろうか。ひとりひとりが社会から排除され孤立した病者であったかれらは、ウモヨにおいて独自のケアのつながりを紡ぎだし、自らの生活を築きあげたのである。そのつながりは、回復者どうしの関係のなかだけでなく、子どもたち、地域社会、医療や援助といった社会環境のなかでつくられたものでもあった。かれらをとりまく環境は、コロナの閉鎖や援助の打ち切りなど、かならずしも助け舟となるものばかりではなかった。しかし、そのような外からの影響のなかでゆらぎながら受けとめながら、自分たちの生活の場所をつくりあげていったのである。



畑にいく子どもたち：  
お手伝いに行く途中も楽しい。かぼちゃと木の枝でつくった手押し車を片手にかけっこ。

そのことは、かれらが故郷を訪れても、かならずウモヨに帰ってくることも関係しているだろう。ハンセン病も完全に治癒できる時代となり、社会の対応も変化してきた。そこで、故郷に里帰りする回復者もいる。前節ででてきたチョカは、故郷の村での滞在について、「とくに嫌な思いをすることはなく、みんなよく接してくれる」と語っていた。かれらがハンセン病をわずらって、長い年月がたち、この病気に對する認識も少しずつ変わってきたのだろう。しかし、故郷に受け入れられるようになって、チョカもほかの回復者も、ウモヨに戻ってくる。家族や親族のいる、故郷に戻る選択があるのにも関わらず。

その理由のひとつに、回復者の子どもたちの存在があるだろう。子どもたちはウモヨで生まれ育った。子どもたちの生活の基盤はウモヨにある。そして、大きくなって、親や祖父母である回復者の手助けをする。さらに、かれらは、血縁を超えて高齢の回復者たちの生活を支えている。これは日本との違いの一つであろう。日本では法律のもと子どもをもつことを許さず、療養所の外に回復者を受けとめる具体的な手立ても未解決のまま時を経たせてしまった。他方、ザンビアでは、子どもたちが、療養所を出た回復者の生活の受け皿となり、社会と結び付けもしている。そのありようは、子どもたちが回復者をつつみこむ居場所をつくりあげているようにもみえる。ウモヨ村の多くの住民が若い世代でしめられ、回復者の人数は減ってきている。数十年もたないうちに、ウモヨも周りの村々にさらに溶け込んでいき、外から見ただけでは回復者の村だったとはもはや思われることもないだろう。しかし、回復者たちの積みあげてきた軌跡はその子どもたちによって記憶されていく。これまで、とりわけ日本では、ハンセン病の歴史は、負の物語として描かれることがほとんどであった。ウモヨで受け継がれていく記憶は、今後、どのように語られていくのだろうか。そして、どのような社会の歩みをうつし出すのだろうか。回復者の生きざまや、ウモヨの生活をみつめることは、その国やその社会や地域の姿をみつめることなのかもしれない。

\*1 本稿では、一般的な表現として「ハンセン病」を用いている。ただし、医学的な専門用語（らい菌など）や、歴史的な資料を引用する場合（らい予防法など）においては「らい」という言葉を用いている。同様に、英語による表現でも、療養所の呼び名（レプロサリウムなど）など史実にもとづいて記載している箇所がある。また人名や村の名前といった固有名詞はすべて仮名を用いている。

\*2 ハンセン病について知るには医学、社会、史実など多面的にとらえる必要がある、ここに記すべき多くの事実が残されている。また、史実の解釈のされ方もさまざまである。ハンセン病の回復者、医療関係者や研究者によって、数多くの記録や手記が出版されているので、ぜひそれらを参考にしていきたい。ここでは、大谷藤郎監修の『ハンセン病医学』にある「近代ハンセン病医療史」（牧野 1997）、日弁連の『ハンセン病問題に関する検証会議 最終報告書』（2007）、「ハンセン病を生き延びてきた子どもたちに伝えたいこと」（井波敏男 2007）を主に参考にした。

\*3 世界保健機関のこと。保健衛生の分野で国際協力をおこなう国連の専門機関のひとつ。

\*4 政府の見解ではハンセン病療養所という位置づけをしないと記したが、ムロンガ病院においては、病院スタッフも利用者も「療養所」という呼び方を続けており、またそこが現在でも療養所であるという見解をもっている。そこで、本報告では、療養所という呼び方を用いている。

\*5 ザンビアには73の民族の人たちが住んでいるといわれている。その多くの民族に首長があり、パラマウント・チーフと呼ばれる。民族ごとに伝統的な統治システムをもっており、パラマウント・チーフはそのなかの最高権威である。その民族の王としてあがめられ、祭事などの文化面でもトップに君臨し、重要な意味合いをもっている。

\*6 症状がひどく生活に手助けが必要な患者が子どもや孫をつれてくる、また、家族の単位で差別にあった者が家族とともに療養所にくることもあった。

\*7 約2 km離れたところにある。1900年以前よりある村。

- \* 8 コロニーでは単身の患者は男女別に5、6人位ずつで一軒家をシェアし、結婚するとそのカップルは夫婦用宿舎の一軒が与えられていた。
- \* 9 ザンビアの2011年の男女の平均寿命は49歳 (World Bank 2012)。
- \* 10 この地域では、トウモロコシを原料に自家製の醸造酒がつくられている。その造り手の多くが女性たちで、ウモヨ村以外では広く販売されている。女性の重要な現金収入の手段でもあり、ウモヨ村のように村全体で酒の醸造や飲酒が禁止されている例は周辺ではみあたらない。
- \* 11 2007年当時、ウモヨ村から州都までの乗り合いタクシーの運賃は往復2万kw (クワッチャ)。当時、ムロンガ病院での畑仕事の日雇い賃金が1日7,000kwであった。当時、1米ドルが約3,500kw。
- \* 12 10月に援助が届いた日は筆者も在村していた。10月のある日、州都から2名役人が訪れ「この村の高齢者、障害者の人数」を尋ねた。次の日再度ウモヨ村を訪れ、トウモロコシを製粉したもの、塩、石けん、服地、毛布を配った。役人にどこか所属か尋ねたところ、「州都の福祉省(社会事業庁のことだと思われる)」と答えていた。しかし、ザンビアの食糧援助は地方行政、NGOなどが複雑に入り組んで活動しているため詳細はわからない。村民は、請願の成果によりこの援助が来たと思っっているが、このような援助は各農村に対し不定期におこなわれており、実際のところはわからない。

#### 《参考文献》

- International Journal of Leprosy. 1961. Leprosy Institutions in Northern Rhodesia. *International Journal of Leprosy* 29 (3): 366-368.
- Griffiths, P Glyn. 1965. LEPROSY IN THE LUAPULA VALLEY, ZAMBIA: HISTORY, BELIEFS, PREVALENCE AND CONTROL. *Leprosy review* 36 (2) : 59-67.
- Seshamani, Venkatesh, Ngenda, Chris Mwikisa, and Odegard Knut. 2002. *Zambia's Health Reforms Selected Papers 1995-2000*. Lund: KFS AB.
- WHO. 2012a. WHO Leprosy Fact sheet No.101. 2012. <http://www.who.int/mediacentre/factsheets/fs101/en/> (February 7, 2013).
- WHO. 2012b. *Weekly epidemiological record* 24 August 2012, vol. 87, 34. 317-328 <http://www.who.int/wer/2012/wer8734.pdf> (February 7, 2013).
- World Bank. 2012. *World Development Indicators*. <http://data.worldbank.org/country/zambia> (February 18, 2013).
- 伊波敏男. 2007. 『ハンセン病を生きとてーきみたちへ伝えたらー』岩波書店.
- 厚生労働省. 2012. 平成24年版厚生労働白書 資料編. <http://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/12-2/> (February 7, 2013).
- 日弁連法務研究財団ハンセン病問題に関する検証会議. 2007. 『ハンセン病問題に関する検証会議 最終報告書』明石書店.
- 日弁連法務研究財団のウェブサイトででも閲覧可能 [https://www.jlf.or.jp/work/hansen\\_report.shtml#saisyu](https://www.jlf.or.jp/work/hansen_report.shtml#saisyu) (February 7, 2013).



平沢保治・2005.『世界ハンセン病紀行―出会いと復権の七つの旅―』かもがわ出版.  
牧野正直・1997.『近代ハンセン病医療史』大谷藤郎監修『ハンセン病医学 基礎と臨床』東海大学出版会.

## 第8章 エチオピアの葬儀講演活動―都市の無縁死にあらがう

西真如

### 1 はじめに

エチオピアの首都アジスアベバは、統計上の人口だけで270万人を数える大都市である。エチオピアでは近年、インドや中国などいわゆる新興国からの投資が盛んになっており、2006年から2011年まで年率10%前後の経済成長を記録している。増え続ける自動車で混雑する表通りには、輸入物の子供服やナイキの靴、サムスの家電といった見栄えの良い商品をあつかうショッピングモールが立ち並び、中古のカロラで乗りつける家族の姿が見られるようになった。

他方で路地裏をのぞくと、昔ながらの長屋暮らしの風景も見られる。こうした場所でも最近では、トタン屋根の上に衛星放送の受信アンテナが並ぶようになったが、住民の中には日雇労働に従事したり、あるいは自家製のビールを客に飲ませるといった零細な商売を営みながら、経済的に不安定な生活を送る者も多い。また人の出入りの多いアジスアベバでは、野宿者も珍しくなく、ときには路上で行き倒れている者もいる。それは地元で食い詰めたか、なんらかのトラブルに巻き込まれて、逃げるようにアジスアベバに流れてきた地方出身者であるかも知れない。



アジスアベバの街並み：この写真のような木立ちの多い低層建築の街並みは近年、高層ビルやアパートへの建てかえにともなって失われつつある。



路地裏の生活（写真の場所は、本文の内容とは無関係）

その日も路地の一角で、瀕死の男が倒れているのが発見された。近所の住民たちが集まってくる。助かる見込みがあれば、慈善団体が経営する病院に担ぎ込んでも良いが、どうやらこの男は見込みがなさそうである。持ち物を調べると、身分証明書が見つかった。アジスアベバから南へ160キロメートルほどのところにある田舎町の出身らしいことがわかる。男を担架に乗せて担ぎ上げ、長距離バスターミナルへと向かう。そこで南へ向かうバスを見つけ、運転手と車掌に訳を話し、瀕死の男を故郷の町で降ろしてもらおうように頼んでバスを送る。バ



スがその町に着くと、運転手は町の誰かに男を託して走り去るだろう。小さな町のことなので、その誰かは必ず男の家族か親類、少なくともその男を知る誰かを探しあてるだろう。アジスアベバの長距離バスターミナルで男を見送った人びとは、その男の行く末を確かめたわけではないが、きっと故郷の町で手厚く葬られただろうと考えている。

エチオピアでは、死が間近に迫った者を故郷に送り返すのは、決して珍しいことではない。たとえばアジスアベバの病院には、エチオピア中から重い症状を訴える患者が集まってくるが、そんな入院患者を受け持つ医師が、「この人はそろそろ故郷に送り返すのが良いでしょう」と言えば、それは死期が迫っているということだ。付き添いの家族は、故郷で待つ人びとに葬儀が近いことを知らせ、患者とともに村へ向かうのである。これは故郷の土に埋められることが大事というよりも、故郷のほうが多くの親しい者に見送られながら葬られることができる、それが死者にとっては何よりだという配慮であろう。

エチオピアの人びとの多くは、みずからが死んだあとに誰が葬ってくれるのか、ということに並々ならぬ関心を持っている。他の者が死んだときも、なるだけ手厚く葬られるように取りはからってやりたいと思う。というのも、エチオピアのある知識人のことばを借りれば、「死体を墓地へと送り届ける人びとの多さ、そのとき人びとが嘆き悲しむ声の高さは、死者への人びとの愛情の深さを示す」からである (Mekuria 1973)。

葬儀のために故郷に送り返される者がいる一方で、アジスアベバ市民の多くは市内で葬られることになる。しかし農村と違って大都市では、見知らぬ者どうしが隣り合わせに生活することも多い。また都会には、何らかの事情で家族や親類と疎遠になった者も少なくない。みずからが死んだあとに誰が葬ってくれるのかと案じる人びとが、頼りにするのは葬儀講である。葬儀講は、その名のとおり死者を葬ることを目的として運営される、互助組合のような組織である。決まった仲間が毎月一定の会費を講に納め、仲間あるいはその家族・親族に死者があっ

たときには、葬儀費用が支払われるとともに、講仲間が葬儀の実施に必要な労働力を提供するというのが、葬儀講の基本的な仕組みである。一定額の掛金を事前に納めておき、もしものときに給付を受けるという意味では、葬儀講は一種の保険のようなものだと考えても良い。

葬儀講は資金と労働を提供するだけではなく、見知らぬ者どうしが活動を通じて互いを葬り合う仲間になるということも重要である。葬儀講仲間は死を迎えるまでの数十年にわたって、非常に長いつきあいになる。多くの葬儀講では、全ての仲間が毎月の会合に出席する義務がある上に、仲間やその家族、親族の葬儀でも一緒に働くことになるので、仲間どうしのつきあいはそれなりに密なものとなる。葬儀の手伝いに出てこないとか、会費を滞納しがちだといったことにはじまり、互いの人柄や暮らしぶりに至るまで、よく知り合っているのが葬儀講仲間ということになる。

アジスアベバの人びとは、あとで述べるようにたいへんな苦勞をして葬儀講活動を維持している (第3、4節)。それは突き詰めて言えば、見知らぬ者があつまる都会で「無縁の死」を封じ込めるための活動だと言っても良いだろう。アジスアベバで活動する葬儀講の数を示す統計はないが、仮に数えれば数千あるいは数万という数になるはずである。だがアジスアベバの路地という路地で葬儀講が活動しているとしても、あらがってあらいきれないのが無縁の死であろう。このことは最後にもういちど考えるところとして (第5、6節)、まずは葬儀講の仕組みや活動の背景について、もう少し説明を続けたい (第2、3節)。

## 2 アジスアベバの葬儀と葬儀講の仕組み

アジスアベバの路地を歩くと、ときおり帆布製の大きなテントが道をふさぎ、人びとが出入りしているのを目にするだろう。それが葬儀会場である。葬儀会場を設営したり、死者を墓地へと運んで埋葬するのはたいへんな労働を必要とする。また埋葬が終わったあとの数日間、大勢の人びとがお悔やみを言うために葬儀会場を訪れる。弔問客には食事やコーヒをふるまう必要がある。アジスアベバでは、こうした労働の大半を葬儀講仲間頼るのがふつうである。葬儀そのものは、もちろん故人の宗教と切り離すことができないけれども、講の活動は労働と費用の提供が目的であって、基本的には宗教儀礼に干渉しない。したがって同じ講にキリスト教徒とムスリムが参加しているのは、決して珍しいことではない。またアジスアベバの葬儀講には、女性だけが参加できる講や、同じ職場の仲間で結成する講、あるいは同郷者のための講などさまざまな種類があるのだが、主流を占めるのは「近隣の葬儀講」、つまり一定の地理的な範囲で生活している人なら、宗教や職業、出自を問わず参加できる講である。本稿では、葬儀講と言えは常に「近隣の葬儀講」を指すことにする。ひとつの葬儀講には通常、200から300人くらいの仲間が参加している（これは講仲間にとって、全員の顔と名前が一致する規模なのだという）。また多くの場合、歩いて10分から20分くらいの範囲に住んでいることが、参加の条件となる。葬儀があればすぐに駆けつけられる距離である。アジスアベバの下町に住んでいれば、自宅の近くで活動している葬儀講の5つや6つはすぐに見つかるだろう。その中で、なるべくしっかりした活動をしている講を選んで参加することになる。

アジスアベバには、遺体を納める棺をつくる業者や、葬儀用の花を売る業者というのはあっても、葬儀一切を引き受ける葬祭業者は非常に少ない。住民みずから葬儀講を組織し、運営するためである。葬儀講活動を持続

させるためには、毎月の会費を確実に徴収し、仲間の死に備えて積み立てておく必要がある。そこで仲間うちから議長、書記、出納係といった役員を選んで、講の運営にあたってもらう。役員への負担は非常に大きい。報酬が支払われることはない。このほか葬儀講には、死者があったときにトゥルンバと呼ばれる楽器を吹き鳴らして、仲間を呼びあつめる係の者がいることがある。この係も無給だが、毎月の会費が免除されることが多い。そこで貧しくて会費を支払えないが、身体は比較的健康な男が、呼び出し係を勤めていることが多い。

## 3 葬儀講の成立

皇帝メネリク二世（在位1889—1913年）は、近代国家としてのエチオピアの基礎を築いたとされる人物である。シェワと呼ばれる一地方を統治する王族の一員として頭角を現した彼は、1886年から翌年にかけて新たな宮殿を設営し、その地をアジスアベバと名づけた。1889年にメネリク二世がエチオピアの皇帝として即位すると、アジスアベバはエチオピアの政治および経済の中心として、多くの人と富とを集めるようになった。初期のアジスアベバには、当時のエチオピアの支配階級であった貴族たちの屋敷が、メネリク二世の宮廷を取り巻くように配置された。それぞれの屋敷の周囲には、家臣や兵士たちが移り住んだ。加えてエチオピアと外交関係を結んだ欧米諸国の使節団、それに皇帝や貴族と親交を結んだ外国の大商人たちも、アジスアベバに拠点を構えるようになった（Bahru 2002; Johnson 1974）。

初期のアジスアベバにはまた、わずかな現金収入の機会にひかれた人びとが、農村から流れ込んできた。彼らの中には、外国人が経営する商店の小間使いとして働く者や、商社が所有する倉庫で荷役に従事する者がいた\*

。そうした職からあぶれた者は、道ばたに立って荷担ぎ人夫を求める声がかかるのを待つ者もいた。路上にはまた、通行人相手に茶を飲ませる露天商もあらわれた。アジスアベバで葬儀講を初めて組織したのは、こうした人びとであったらうと考えられている<sup>\*)</sup>。

エチオピアの社会学者アレマユは、葬儀講活動の成立の経緯を、次のように説明している。エチオピアの農村において人びとは「密接に編まれた地域共同体」のもとで生活していた。人の死に際しても、家族や地域住民から必要な助力と慰めを期待することができた。ところが農村から都市に移り住んだ人びとは、「混乱と疎外」の中で生活を始めねばならなかった。何よりも、もしものときに助力を与えてくれる仲間が、都市にはあまりにも少なかった。こうした状況で人びとが葬儀講を組織したのは、決して驚くべきことではないとアレマユは述べている (Alemayehu 1968)。

皇帝ハイレセラシエ一世 (在位1930—1974年) のもとで、エチオピアは近代的な官僚制度や教育制度、軍隊を備えた国家としての体裁を整えていったが、権力の中核は依然として一部の貴族階級が掌握していた。1973年に国内の農村で大飢饉が起ると、アジスアベバを中心に帝政の廃止を求める人びとの運動が高まった。1974年になると軍の一部が政権を掌握し、皇帝は廃位された。軍事政権は社会主義国家の建設を目指し、すべての土地を国有化する布告をおこなって、実際にアジスアベバでは貴族や大商人の所有する土地や建物が政府によって接収された。その中にはいわゆる長屋形式の貸間も多く含まれており、接収後は格安の公営住宅として住人たちに提供された。現在の政府は2005年以降、老朽化した公営住宅を取り壊して、4から6階建ての分譲アパートに建てかえる大規模な事業に取り組んでいるが、それでもまだ市内には古い長屋づくりの公営住宅が数多く残されている。またその中には、とりわけ経済的に困窮した人びとが多く生活するところもある。

#### 4 長屋の葬儀講活動

私が2004から2008年にかけて断続的に聞き取り調査をおこなった一地区では、老朽化した公営住宅に、零細商や日雇労働、物乞いなどをして生計を立てる人びとが生活していた。零細商というのは、店舗などの資産を持たず、わずかな元手で路上商いなどをする人びとのことである。この地区で暮らす零細商は、男であれば安価な雑貨と引き替えに古着を貰い受ける「交換屋」を営んだり、エチオピアの家庭でよく使われる手製のモップを売り歩く者が多い。また女であれば、自宅で醸造したビールや、自家製の揚げパン、インジェラなどを売って、不安定な収入を得ている場合が多い。インジェラとは、テフと呼ばれる雑穀を粉にひいて発酵させ、薄く焼いたエチオピア独特の食品である。日雇労働は、体力さえあれば男女とも従事することがある。物乞いは、身寄りのない年寄りが収入を得る手段である。アジスアベバ市民の多くはキリスト教徒 (エチオピア正教徒) あるいはイスラム教徒で、宗教的な功德のために施しをおこなう習慣がある。近所と同じ場所にいつも座っている年寄りの物乞いと挨拶を交わしながら、小銭を施すのを日課にしている者もいる。

この地区の中に、とりわけ簡素な長屋づくりの公営住宅がある。ここで暮らす人たちはかつて、少し離れた場所ですーダン商人が経営していた長屋の住人だった。革命のあと、この長屋も公営住宅となったが、しばらくしてその敷地に小学校が建設されることになり、長屋の住人たちは、雨が降るとすぐに冠水する湿地のような場所に建設された仮設住宅に、「一時的に」移転させられた。ところが、一年以内に建設されるという約束だった「本来の」公営住宅が建設されることはなく、彼らは現在まで、仮設住宅に住み続ける羽目になったのである。ある住人の話では、市民生活を監督する立場にあった当時の地区役員が、建設費用を着服したのだという。社会主義

政権下（1974―1991年）のエチオピアにおいて政治的な権力は、支配政党であるエチオピア労働党に集中した。その党員である地区役員を、貧しい公営住宅の住民が告発することなどできなかったのである。

この仮設住宅で暮らしを始めた人びとが今日までに払った苦労を数え始めればきりがないだろう。第一に、資産も定まった収入もない人びとの、日々の生活との格闘があった。加えて敷地の冠水を防ぐため、住人たちは労力とわずかな資金とを出し合って敷地に土砂を搬入し続けた。慈善団体の助けもあって、現在の敷地には石畳が敷かれ、アジスアベバの長い雨期のあいだにも冠水しない土地になった。そしてこれらの問題と並んで住人たちが多くの労力を払ってきたのは、誰かが死んだときにきちんと葬ることができる仲間づくりであると言って差し支えないだろう。初期のアジスアベバへの移住者が経験したような「混乱と疎外」は、現在の多くのアジスアベバ市民にとって、既に過去のものとなっている。現在のアジスアベバ市民の中には、一定の地位や資産を手に入れた、多くの友人や親族に囲まれて、それなりに安定した生活を送っている者も多いからである。しかし何らかの事情で親族と疎遠になった者や、身寄りの少ない者にとっては、もしものときに誰が葬ってくれるのかという問題は切実である。ここで取り上げた仮設住宅の住人の中には、そのような者が少なくない。

仮設住宅の住人の中に、女手ひとつでふたりの息子を育ててきたアリマ（仮名）という女性がいる。彼女は「勤労」講という名の葬儀講が設立された年から、今日までずっとこの講の活動に参加している。「勤労」講は、地区の住民たちが1975年に設立した葬儀講である。その名の由来は、仲間の多くが日雇労働などに従事していることにあるらしい。「勤労」講を設立しようとした人たちが、シャベルやツルハシといった墓を掘るための道具を買い求めていたところに、アリマが偶然居合わせたことから、彼女もこの葬儀講に参加することになったのだという。

現在の「勤労」講は、葬儀に備えた資金の蓄えもあり、また講が借り上げている倉庫には、葬儀会場として用いる帆布製の大型テントや、会場に必要な椅子、食器といった備品が積み上げられている。仲間の数も200人を超えており、仲間やその家族にもしものことがあれば、いつでも立派な葬儀を出すことができる。しかしアリマによれば、ここに至るまでの講運営は苦労の連続であった。あるときには、講の金を管理する出納係が金を使いついでいることが発覚した。「勤労」講の役員たちは出納係を裁判所に訴えたが、彼の兄が講に全額を返済して事は収まった。出納係はもちろんその役を罷免されたが、結果的に金が戻ったこともあり、講そのものから追放されることは免れた。

講にとって最大の危機は、1994年に訪れた。新しい出納係の不始末で、講に積み立てられていた金がほぼ全て失われたのである。事の真相は定かではないが、この出納係は講の金を使って詐欺まがいの悪事でひと儲けしようと企んでいたらしい。ところが詐欺の標的となった男のほうが一枚上手であった。「身内に一大事があって

いますぐ大金が必要だ」という話をつくり上げて、逆に出納係を騙しにかかったのである。電話でその話を聞かされた出納係は、すっかり信じてしまった。そしてあるうことか、じぶんの有り金と講の積立金を、その男にまとめて送金してしまったのである。非常に手の込んだ送金詐欺の口口であったようだ。金は戻らず、出納係は講仲間から除名された。これは「勤労」講の長い歴史の中で唯一、仲間が除名されたケースである。

積立金をすべて失った結果は重大であった。このとき、「勤労」講の仲間は300人を超えていたが、半数以



葬儀会場としてもちいられる大型テント

上の仲間が講に見切りをつけて去っていったのである。残った仲間たちは新しい役員を選び、金を出しあって、講の立て直しをはかった。私が「勤労」講の活動について聞き取りをはじめた2004年までには、詐欺の一件で失われた以上の積立金が積み上がっており、講の仲間も200人近くにまで回復した。ただし、大勢の仲間と十分な積立金さえあれば、気楽に活動を続けられるというわけでもない。次節では、葬儀講仲間を常に悩ませる問題のひとつを取り上げたい。

## 5 無縁の死者

葬儀講が葬る対象はたいの場合、葬儀講に会費を支払っている仲間本人と、その配偶者、親、子、兄弟姉妹のように定められている。これはわかりやすい規定であるようだが、じつは葬儀講を運営する当事者にとっては決してそうではない。とりわけ誰を葬るべきか、誰を葬ってはならないのかという問題は、常に仲間どうしで議論の種となる。

第一に、誰を葬るべきかという問題は、そもそも家族とは誰のことを指すのかという問題と関わっていて、なかなか厄介な問題である。エチオピアでは、他人の子をひきとって育てたり、身寄りのない老人をひきとって扶養している場合がある。また職探しや病気の治療のため故郷の村からアジスアベバに出てきた遠縁の親類が、長期にわたって仲間の家に滞在していることも少なくない。いくつかの講では、こうした同居人も家族と同様に葬る対象になることが規則で定められている(西2009:2010)。次に、誰を葬ってはいけないかという問題がある。これは言いかえれば、講の規則に従わない者を除名すべきかどうかという問題である。「勤労」講では過去

に、身寄りのない老女の会費を、仲間の男のひとりが長期にわたって着服していたのが発覚したことがある。老女は健康がすぐれず講の会合に出席するのが困難であったため、代わりに会費を支払ってもらおうと、男に金を渡し続けていた。そして着服が発覚したが、この男も貧しく着服した金を返済することは不可能だった。このとき、男は会費を着服したことで、老女は理由はともあれ会費を納められなかったことで、ともに講を除名されるべきかどうか議論になった。詳しくは別稿(西2010)を読んで頂くとして結論だけ述べると、老女は納められなかった会費を他の仲間が肩代わりすることで除名をまぬかれ、数年前に彼女が亡くなったときには、他の仲間と同じように手厚く葬られた。男の処遇については議論が紛糾したが、妻の嘆願が聞き入れられて、実質的に講にとどまることになり今日に至っている。前節でも述べたように、葬儀講活動には金をめぐるトラブルがいつてもまわる。会費を数ヶ月にわたって滞納した者や、他人の会費や積立金に手をつけた者はいつでも除名できる決まりだが、「勤労」講については、40年近い活動歴の中で実際に除名された者はひとりしかない。

このほか講仲間を悩ませる問題のひとつに、無縁の死者の扱いがある。冒頭に挙げたのもそのようなケースのひとつだった。ここではもうひとつ、それに近い例を挙げておきたい。あるとき、「勤労」講仲間が暮らす地区にひとりの野宿者があらわれた。無害な男であったようで、長屋の人びとも顔なじみになった。男は昼間は物乞いをして、夜は長屋の軒先で寝るといふ生活を何年か続け、そして死んだ。「勤労」講の仲間には、すでに述べたとおり物乞いをなりわいとする者も少なくないが、野宿者はいない。この男は何年もこの地区で暮らしたとはいえ、どの葬儀にも参加していなかったし、また参加を勧める者もいなかったらう。みなこの男の名は(それが親につけられた名かどうかは別として)知っていても、彼がどこから来たのか、家族や親類があるのかということは知らず、調べだすあてもなかった。

そこで講仲間は、彼らのことばでウルドという方法で男を葬った。ウルドは、講の積立金を支出することな

く、講仲間から寄付を募るとともに、仲間が街頭に立って道を行く人たちからも金銭の施しをあおいで資金を集め、葬儀をおこなうことである。なぜそんな面倒なことをするのか、と思う読者もあるかも知れない。実際、「勤労」講には男の葬儀を出すのに必要な資金の少なくとも数倍、ひょっとしたら数十倍ほど積立金があったはずである。これは、葬儀講が一種の保険の仕組みであることと関係している。保険の掛け金を払っても払わなくても同じような保障が得られるなら、誰も掛け金を払わなくなるだろう。保障の対象となる問題（葬儀講の場合は仲間の死）が起こるまえに、一定の掛け金を払った者がだけが給付を受ける。これは保険の仕組みが機能するためにもっとも基本的なルールである。葬儀講の仕組みがこわれてしまうのは困る。他方で講仲間ではない野宿者とはいえ、近所の顔見知りとして生活してきた男に、それなりの葬儀を出してやれないというのも辛い。こういった事情から、たいへんな手間をかけてもウルドの方法で男を葬る必要があったのである。

さてこういう方法で行き倒れを葬ることができるようなら、冒頭で述べた瀕死の男も、死を待ってアジスアベバで葬ってやっても良かったのではないかと疑問に思われるかも知れない。決まった引き取り手もないまま、長距離バスに押し込むのは少し乱暴だともいえる。じつは瀕死の男を長距離バスで送り出したのも、野宿者をウルドで葬ったのと同じ「勤労」講の仲間たちであった。両者への対応が違った最大の理由は、ひとりがまだ微かながら息をしていたということである。瀕死であっても生きている人間なら、通常の運賃で故郷へ送り返すことができる。それでも「勤労」講の仲間たちにとっては決して小さな額ではなく、彼らは男の運賃を工面するために奔走したはずである。これに対して、遺体を搬送する費用は比べものにならないくらい高額になる。だいたい、引き取り手のない遺体を送りつけるわけにもいかない。そこでウルドの方法で葬ることになるだろうが、それにはたいへんな労力がかかる。男が息を引き取ってしまうまえに、早くほかの誰かに押しつけたという気持ち働かなかったといえは嘘になるだろう。

それにもうひとつ、野宿の男が曲がりなりにも近所の顔見知りとして葬られたのに対して、瀕死の男は死んでしまえば、全く見知らぬ者に葬られることになるという事情もあった。それよりは、彼を知っている誰かを求めて故郷の町に送り返されるほうがよほど良いともいえるのであり、また長距離バスの運転手もその事情を理解すればこそ、瀕死の男を送り届けるという厄介な役目を引き受けたのではないだろうか。

## 6 おわりに

既に述べたとおりエチオピアの人びとは、みずから死んだあとに誰が葬ってくれるのかということに、なみなみならぬ関心を持っている。誰かが死んだときには、その者の宗教や出自を問わず、適切な葬儀がおこなわれなければならないという信念を、エチオピアの人びとは広く共有しているように思われる。ただし死者は正しく葬られるべきだという、ある種の「普遍的な」信念があるということと、実際に目の前にある遺体を誰がどうやって葬るのかということは別の問題である。そして私たちが必要としているのは、みずから死んだあとに、かけがえない者として葬ってくれる誰かなのである。

葬儀講の活動は、葬儀に必要な資金と労働とを提供するだけではなく、互いに葬り合う仲間をつくりだすことで、その二ーズに見事に応えている。ところが「勤労」講の活動経験をみると、その仲間というのは必ずしも互いへの思いやりとか信頼関係によって結びついた人びとだとは簡単に言えないことも思い知らされる。本稿では講の積立金に手をつけてしまったり、仲間の会費を着服した事例を紹介したが、このような事例の聞き取りを重ねてゆくと、「勤労」講の40年近い活動歴で、ただひとりの除名者しか出なかったのが不思議なくらいである。

信頼できない仲間を確実に除名してゆけば、葬儀講の活動はすいぶん円滑になるはずである。正直に会費を払っている会員が損失を被ることもなくなる。だが仲間を除名することは、自分たちの手で葬ってやれない死者を招くことでもある。少し大きさにいえば、ここには給付のシステムとしての葬儀講と、無縁死にあらがう活動としての葬儀講との葛藤があらわれている。そもそも誰からも愛され信頼されるような者であれば、死んだあとに誰がどうやって葬ってくれるかなどという心配をする必要はないだろう。葬儀講は長期的な信頼関係を必要とする仕組みでありながら、そうした関係を築けない者ほど、葬儀講の活動を必要としているのである。

とはいえ、人びとがどれほど葬儀仲間を増やし積立金を積み上げようが、あらがいきれないのが無縁の死である。アジスアベバの路地という路地でどれほど多くの葬儀講が組織され、堅固な活動を維持しようとも、ひとり行き倒れに遭遇したとたん、人びとはそこに無縁の死が口を開けているのを見てしまうのである。

\*1 商社の荷役に従事した初期の移住者に関する聞き取り調査として、Sherif (1985)を参照。

\*2 葬儀講の起源については、Pankhurst (2003)がおおまかに文献資料に基いて行った検討をおこなっている。

#### 《参考文献》

- Alenayehu, Seifu. 1968. "Eder in Ethiopia: A Sociological Study." *Ethiopia Observer* 7 (1): 8-33.
- Bahrū, Zewde. 2002. *A History of Modern Ethiopia, 1855-1991*. Second edition. Addis Ababa: Addis Ababa University Press.
- Johnson, Martin Eric. 1974. *The Evolution of the Morphology of Addis Ababa, Ethiopia*. Ph. D. Thesis, University of California, Los Angeles.
- Mekuria, Bulcha. 1973. *Eder: Its Roles in Development and Social Change in Ethiopian Urban Centers*. Senior essay, School of Social Work, Hailelassie I University.
- 西真如. 2009. 『現代アフリカの公共性—エチオピア社会にみるコミュニティ・開発・政治実践』昭和堂.
- . 2010. 「明日の私を葬る—エチオピアの葬儀講活動がくりだす応答的な関係性」『文化人類学』75 (1): 27-47.
- Pankhurst, Alula. 2003. "The Roll and Space for Iddirs to Participate in the Development of Ethiopia." In Alula Pankhurst (Ed.), *Iddirs: Participation and Development*, pp. 2-42. Addis Ababa: ACCORD Ethiopia.
- Sherif, Kerī. 1985. *A History of the Siti Community in Addis Abeba: a Study in Rural Urban Migration*. Senior essay, History Department, Addis Abeba University.

## 風の声のなかに

上田假奈代

釜ヶ崎とアフリカ。このふたつの土地の地名が放つ何か、どことなく似ていると思った。それはなんだろう、と考えていた。ある日、におい、だ。におい、じゃないかと思いつく。

アフリカに行ったことはない。でも想像する。土のにおい、風のにおい、川のにおい、太陽の陽射しのにおい、生き物のにおい。生き物と自然がギリギリの身上で存在しているのにおい。釜ヶ崎には豊かな自然があるとは言い難い。それでも生き物と自然がギリギリの身上で存在しているそれは釜ヶ崎で感じるにおいだ。日向に溜まる生きていくもののおい、にまじる死にゆくもののおい。日陰に溜まる死にゆくもののおい、にまじる生きていくもののおい。生と死がごちゃ混ぜになったのにおいだ。

ある日、釜ヶ崎の路上で倒れているおっちゃんを発見する。顔見知りのやっかいなおっちゃんだ。急いでいたが自転車をとめ、ともかく声をかける。「どうしたん。立てる？」何を言っても答えない。

大きな茶色の犬が通り過ぎた。「犬にでもひっぱられたん？」急に地響きするような大きな声で「ちゃうわー。引力やー！」

そのとき、谷川俊太郎の詩編〈二十億光年の孤独〉の一節が頭をよぎったのだ。

万有引力とは

ひきあう孤独の力である

孤独の引力に引き寄せられ、しばらく立ち上がることもできないようだった。何度も起き上がるように促すが、埒があかず、食堂の店主が出てきて首を横に振る。もう放っておくように言われる。「もし、だめそうだったら救急車呼んでください」と言って、引力のそばを離れた。

生活保護になって釜ヶ崎に流れてきたのか、数年前にコールドに急に現れた人だ。金属の杖を武器のように持ち、怒ったような口を聞いていたが、だんだん何を言っているのかよくわからなくなってきた。のちに「救急車を呼ぶときは頼むから」とコールドまで言いにくるほど弱っていく。そして、本当に救急車を呼び、「いってらっしゃい」と見送った。半年ほどたったころ退院してお酒をやめたからなのか、顔色もよくなって復活した。孤独の引力のよいバランスをみつけたのだろうか。

ある日、釜ヶ崎のおっちゃん数人と一緒にバスにのって岡山県の長島愛生園にいった。バスは橋を渡っ



て緑の島へ、ハンセン病の国立療養所だ。大阪出身の回復者と交流する会があるからと人づてに誘われ、コールドムによく来てくれるおっちゃんたちと十ヶ月の赤ん坊を抱いて出かけた。一緒にお好み焼きやたこ焼きを食べ、おしゃべりをした。

釜ヶ崎から来たと言うと「よく行ったわ。いいとこや。あそこ、誰も気にしないでしょ。」ケラケラと笑い、当時の商店街や路地の様子が語られる。おだやかに話されるが、若いときは島を出て歩いてみたい衝動にかられたのだろう。行き先は釜ヶ崎。帽子をかぶって埃っぽいまちを歩き回っている人の姿が目につかぶ。電信柱の影に人の影が重なる。

それは今でもまちのあちこちに見かける風景だ。身体的なさまざまな特徴を持つ人が歩いている。自転車をこいでいく。車いす、杖、大八車。時刻を問わずそのままの、あるいは全裸に近い状態で横たわっている人もいる。ハンセン病の回復者が釜ヶ崎を歩いていたとしても誰も何も言わないだろう。身体に変形があるうとなかろうと酒を酌み交わし冗談だって言うだろう。本書がアフリカと釜ヶ崎を並べているのは、偶然だけではない。周縁に生きる者たちの息づかいが呼び合っているのだと思う。

ある日、昼下がりの路上で寝ている人がいた。よくみかけるのは身体を横にしている姿勢だ。その人の寝姿がたいへんハッとするものであったのは、姿勢と陽射しによるものだと思う。一畳ほどの一段高い場所に長方形に陽が射していて、その中心に丸太のようにおおむけになり目を閉じていた。眩しいはずなのに微動だにせず眠っている。きらきらとした静けさに、まるで棺桶のような陽射しだと

思う。人が死ぬには畳一枚で足りるのだと思う。孤独な死があっけらかんと陽射しに支えられることもあるのだと思う。

ある日、コールドムに来た人が「ここで働かせてください」と言う。パソコン一台とわずかな本を持って、その人はコールドムのカフェに寝泊まりして働きはじめた。アフリカで暮らしたこともある学者のようだ。店内に本や資料がどんどん増えていく。彼を慕って卒論の相談を持ち込む学生や若き研究者、労働者のおっちゃんや古本をどさどさ持って、きてくれるようになった。ところがだんだん彼のいない時間が多くなり、ある日姿を消した。3週間ほどたって戻ってきた。それから、釜ヶ崎の死をめぐる研究会を立ち上げ意欲をみせたが、数ヶ月してまた音信が途絶えた。

アフリカと釜ヶ崎を結ぶ人がふいに現れ、2年の年月が流れ、ふいに去った。雑然と残された仕事と研究会が粛々と継がれてゆく。釜ヶ崎だからね。当事者性を問われるのよ、と思う。わたしたちはどこから来て、どこへ行くのか。ゆるす、ゆるされる、とは何か。じぶんは何者なのか。孤独の引力にひかれてなお、どう立つのか、どう流れてゆくのか。

ある日、ギターを持った若者がコールドムに就職した。毎日、路木を掃除し、長靴をはいて水を撒き、入居者の様子を気にかける。整理整頓が苦手だった前任者のあとを黙々と整えていった。4ヶ月がたち、路木の日々が凧のように落ち着いてきたように思われたころ、若者は音楽活動と給料の安い仕事の両

立ができないことに気づく。「仕事を辞めたい」と考えはじめた若者をまじえ、スタッフみんなで集まり話を聴き合った。他者の人生にむかってことばを選びあうことの難しさ。沈黙を支えながら、そこにいる。ある日、若者は何かを選ぶだろう。孤独の引力に抗うように、あるいは流れにまかせて。

ある日、あなたは釜ヶ崎に足を踏み入れる。昭和時代のような商店街や自転車車が整然と並ぶドヤ街、ゴミ箱を持って一斉に掃除するトクソウの人たちや路上に寝ている人を見るかもしれない。もしかしたら釜ヶ崎はきれいなまちになっているかもしれない。それでも、頬をなげる風に吸い込む空気に埃っぽいにおいを感じるだろう。孤独に誘われた風のおいか。応答する孤独の風の声か。存在は、ふいに他者の身ぶりによって表されることだってある。それが孤独に応答する孤独であることを、わたしたちは本能的に知っているように思うのだ。

ある日、本をつくろうと、ニカイ！文化センターに社会学や人類学、哲学の研究者たちや現場の人が集まった。世代やフィールド、経験も異なるわたしたちは、ある日を期日に原稿を書きはじめ、大学の方々やデザイナー、印刷会社、家族や友人や仕事仲間など、のっぴきならず人々を巻き込んでしまう。誰かに頼み事をしたりされたり、励まし励まされ、「ごめんなさい」とか「ありがとう」ごさいます！」を何度も何度もやりとりしているときは、孤独の引力がちょっと愉快な引力に変わっているような気がする。

ほんとうに、みなさん、ありがとうございます。

## 編著者

### 西川勝

大阪大学コミュニケーションデザイン・センター

1957年、大阪市生まれ。はじめて与えられた自転車は、父親が釜ヶ崎で買って堺市まで乗って来たものだった。息子と娘たちが釜ヶ崎の「こどもの里」に遊びに行っている。ぼくは西成市民館で「哲学の会」をしています。

## 執筆者

(50首順)

### 石川翠

大阪大学大学院博士前期過程2年(社会学専攻)

1988年、京都府生まれ、京都府出身。2010年の夏からココルームに通い、卒業論文を書かせてもらう。担当章(1、2、4章)は修士論文「釜ヶ崎における生活保護受給と社会的孤立―支援付き住宅の住人の事例から」を加筆・修正したもの。

### 石橋友美

紙芝居劇むすびマネージャー

島根県生まれ。会社員や外国での農業生活、派遣社員、人権問題の仕事などを経て紙芝居のグループと出会う。2005年より押しかけマネージャーとしておっちゃんたちにお世話になっている。

### 上田假奈代

詩人、NPO法人こえとこぼとこぼの部屋(ココルーム)

1969年、奈良県生まれ。1992年に一度だけ釜ヶ崎に来た。いまは住んで、こぼとこぼにならない間で木のように立ち、眠り、起きて、自転車をこいだり、仕事をしたりしています。

### 姜明江

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

大阪府生まれ。専門は緩和医療、国際保健、地域研究。主なフィールドはザンビア(2007年)と釜ヶ崎(2011年)。ときどき薬剤師として働きつつ、研究と実践のはさまに身をおいています。

### 小手川望

演劇制作、NPO法人こえとこぼとこぼの部屋(ココルーム)

1974年、埼玉県生まれ。2011年6月に東日本大震災と原発事故をきっかけにこどもと釜ヶ崎に移住。ココルームに受け入れてもらう。毎日が釜ヶ崎・ココルーム劇場。だいたいココルームか路木にいます。

### 白波瀬達也

大阪市立大学都市研究ラザ博士研究員

奈良県生まれ。専門は宗教学、福祉社会学。編著書に『釜ヶ崎のススメ』(洛北出版、2001年)。2003年から釜ヶ崎でフィールドワークを実施。2007年から2012年にかけては、西成市民館の職員として地域福祉実践に従事。

### 西真如

京都大学

兵庫県生まれ。専門は文化人類学、医療人類学、アフリカ研究。著書に『現代アフリカの公共性』(昭和堂、2009年)。エチオピアの都市や村をフィールドに調査をしているが、一昨年から釜ヶ崎にも通いはじめた。

大阪大学コミュニケーションデザイン・センター高齢社会プロジェクト活動報告書  
孤独に応答する孤独 ―釜ヶ崎・アフリカから―

編著者：西川 勝

著者：石川 翠

石橋友美

上田假奈代

姜 明江

小手川 望

白波瀬達也

西 真如

編集協力：特定非営利活動法人こえとことばとこころの部屋（ココルーム）

デザイン：高草 建

写真：高岡伸一（釜ヶ崎風景）、白波瀬達也（釜ヶ崎風景、第3章）、石川 翠（第4章）、小手川 望（第5章）、  
石橋友美（第6章）、姜 明江（第7章）、西 真如（第8章）

地図作製：平川隆啓（釜ヶ崎）、西 真如（アフリカ）

発行日：2013年3月27日

協力：紙芝居劇むすび、特定非営利活動法人こえとことばとこころの部屋（ココルーム）、西成市民館

本報告書には、大阪大学 CSCD 高齢社会プロジェクト研究助成（代表者：西川勝）と、三井住友海上福祉財団 研究助成『「無縁社会」における高齢単身者の死に関する研究：大阪市西成区釜ヶ崎を事例として』（代表：山田假奈代）の成果の一部が含まれています。

大阪大学コミュニケーションデザイン・センター

〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町1-16 全学教育推進機構 教育研究棟I（イチ）4階

TEL：06-6850-6111

URL：<http://www.cscd.osaka-u.ac.jp>

